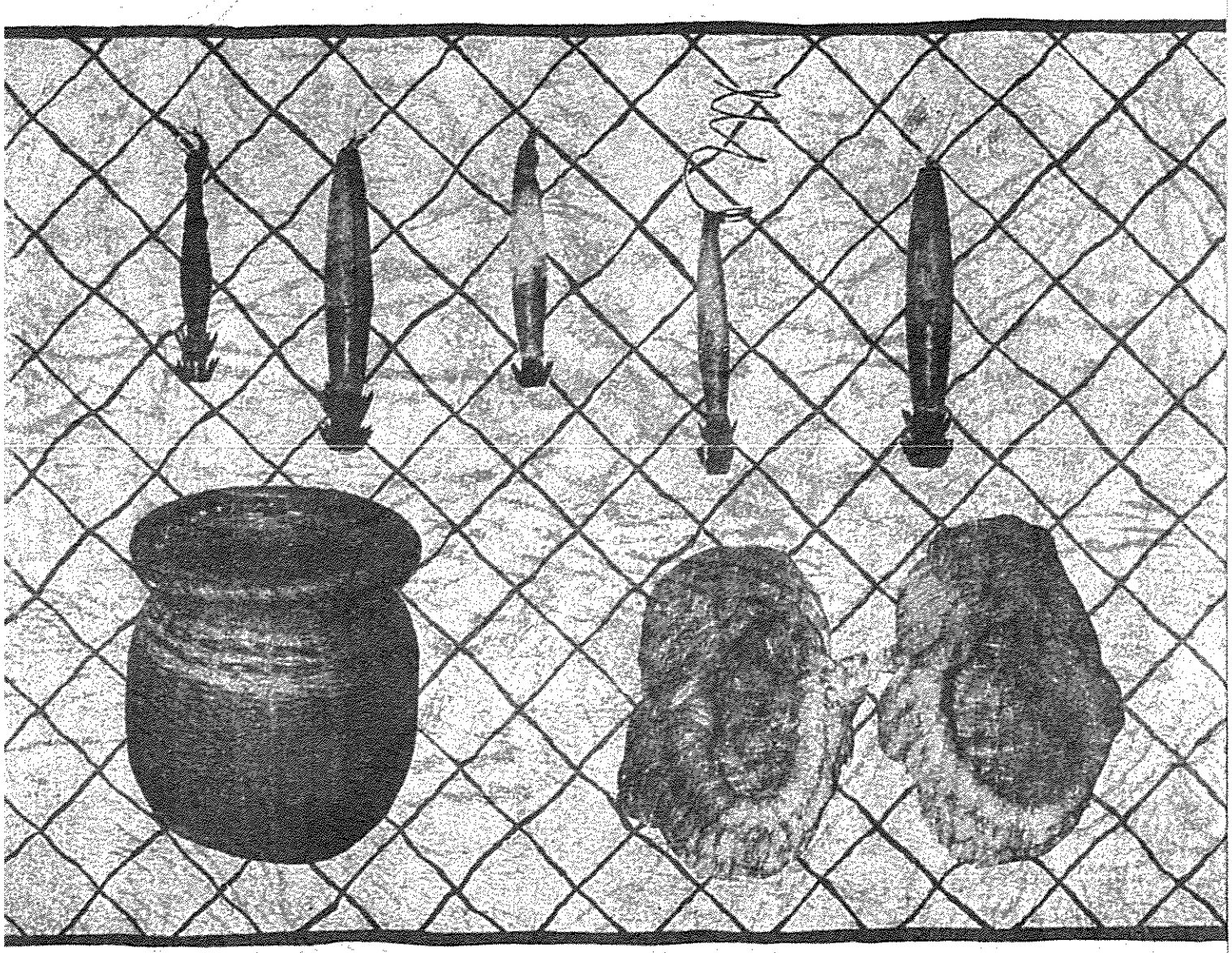
宮城県の伝統的漁具漁法　Ⅲ

北　部　地　区



宮城県水産試験場

平成２年３月

漁村高齢者活力促進事業

宮城県の伝統的漁具漁法 III

北 部 地 区

宮城県水産試験場

はじめに

現在の漁撈装備、技術は近代化が進み目覚ましい進歩をとげている。このため、漁獲努力量の増大が進み、資源の減少が深刻な問題となっている。この中で資源の有効利用をふまえた、より良い漁業形態を考えていくことが必要になっている。

漁業技術は、古くから自然条件、魚族の生態に応じた改良が繰り返され多種多用な発達があり、同時に操業上の取り決めによる資源の管理等様々な規制を行っていた。これは現在にも共通することであり、当時の記憶をたどりその流れを伝えることが漁村高齢者の役割であり、このことを漁業後継者に知ってもらう意味で、なくてはならない資料となろう。

漁村高齢者活力促進事業の一環として行われてきた宮城県の伝統的漁具漁法も今年度の北部地区を最後に完結となり、３部を通じて宮城県の伝統的漁具漁法はかなりの割合で網羅できたと考えられます。又、北部地区の後編に中南部地区の未収集分資料、宮城県における明治時代に行われていた主な地域別漁法も追加しました。

漁具、漁法の収集については各方面の援助を得たが、特に唐桑町漁業協同組合所属の三上堅治郎氏、佐々木淳氏、鹿折漁業協同組合所属の尾形栄七氏、大島漁業協同組合所属の村上安雄氏、小松勝美氏、歌津全町漁業協同組合所属の及川廣氏、志津川町漁業協同組合所属の佐々木勇氏、本吉町漁業協同組合所属の三浦良平氏になみなみならぬご尽力をいただいた。各氏は長年漁業に従事し、伝統的な漁具漁法に精通しておられた。心から感謝申し上げると共に、敬意を表する次第です。

宮城県水産試験場長　石田信正

○目　　次○

宮城県の伝統的漁具漁法Ⅲ

北部地区

1．北部地区の概要 …… 1
2．各漁法の主漁期 …… 2

1．船曳網漁 …… 4

①ムツ船曳網 …… 4
②イワシ船曳網 …… 5
③タルコ網 …… 8
④ワカサギ船曳網 …… 9

2．底曳網漁 …… 11

①浮操網 …… 11

3．地曳網漁 …… 13

①イワシ大地曳網 …… 13
②ワカサギ地曳網 …… 15

4．旋網漁 …… 16

①イワシ巾着網 …… 16
②ボラ巾着網 …… 17

5．刺網漁 …… 19

①マス刺網 …… 19
②スズキ刺網 …… 20
③ナメタガレイ刺網 …… 20

6．流網漁 …… 22

①マグロ流網(1) …… 22
②マグロ流網(2) …… 23
③サンマ流網 …… 24

④マス流網 …… 25
⑤イワシ流網 …… 26

7．定置網 …… 27

①桃生式器械網 …… 27
②筒状網 …… 30

8．すくい網漁 …… 33

①すくい網 …… 33

9．延縄漁 …… 34

①サメ延縄 …… 34
②マグロ延縄 …… 35
③メヌケ延縄 …… 36
④ドンコ縄 …… 38

10．底曳網漁（貝類） …… 40

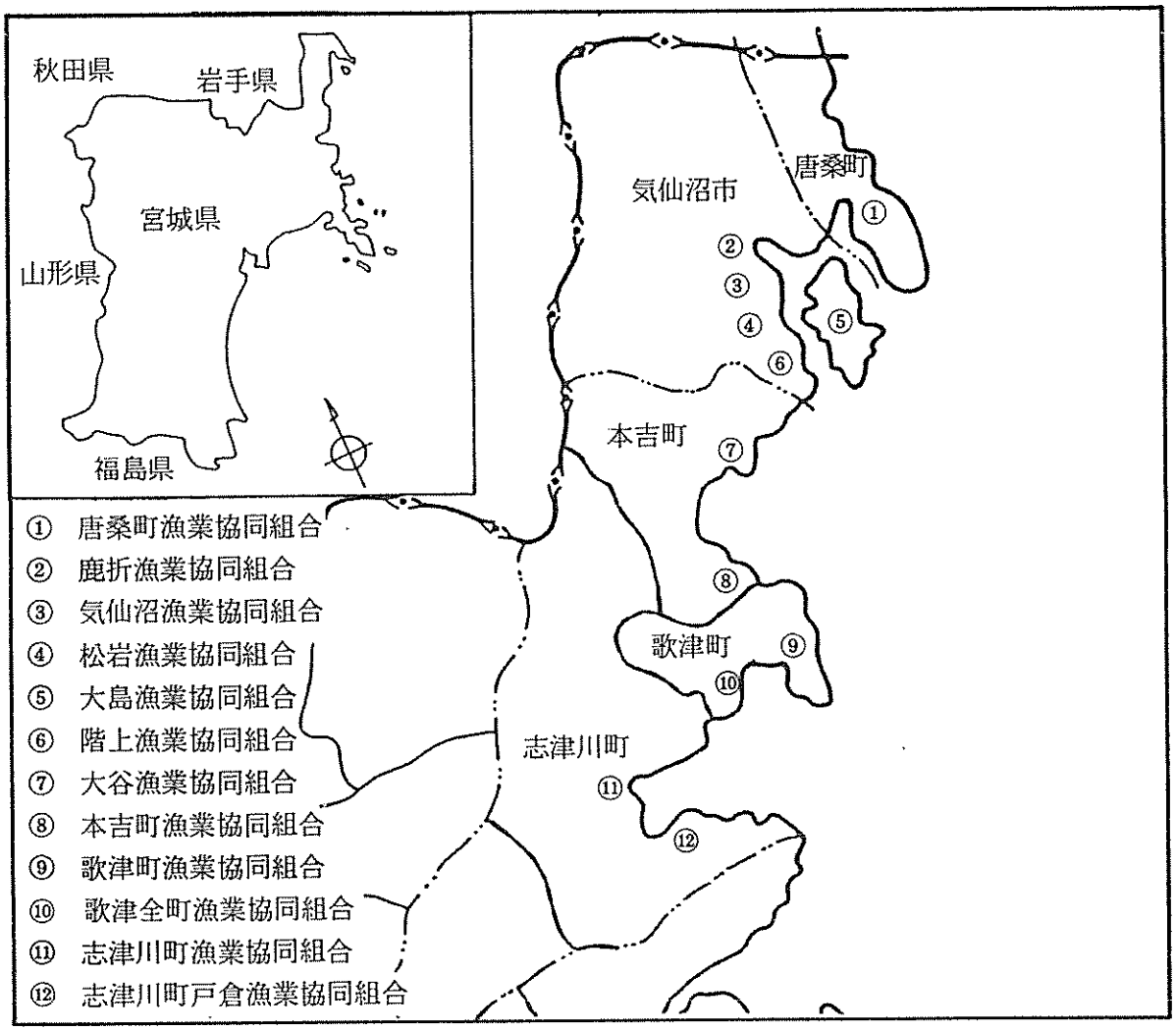
①アカガイ曳 …… 40

11．釣り漁 …… 41

①スズキ投げ釣り …… 41

12．その他漁法 …… 42

①ナメタガレイ突き …… 42
②ミズダコ鈎捕り …… 43
③アワビ取り …… 44
④ホッキ取り …… 45
⑤サラガイ突き …… 46
⑥ヨメガイ突き …… 46
⑦ホヤ鈎 …… 47
⑧テングサ採取 …… 49



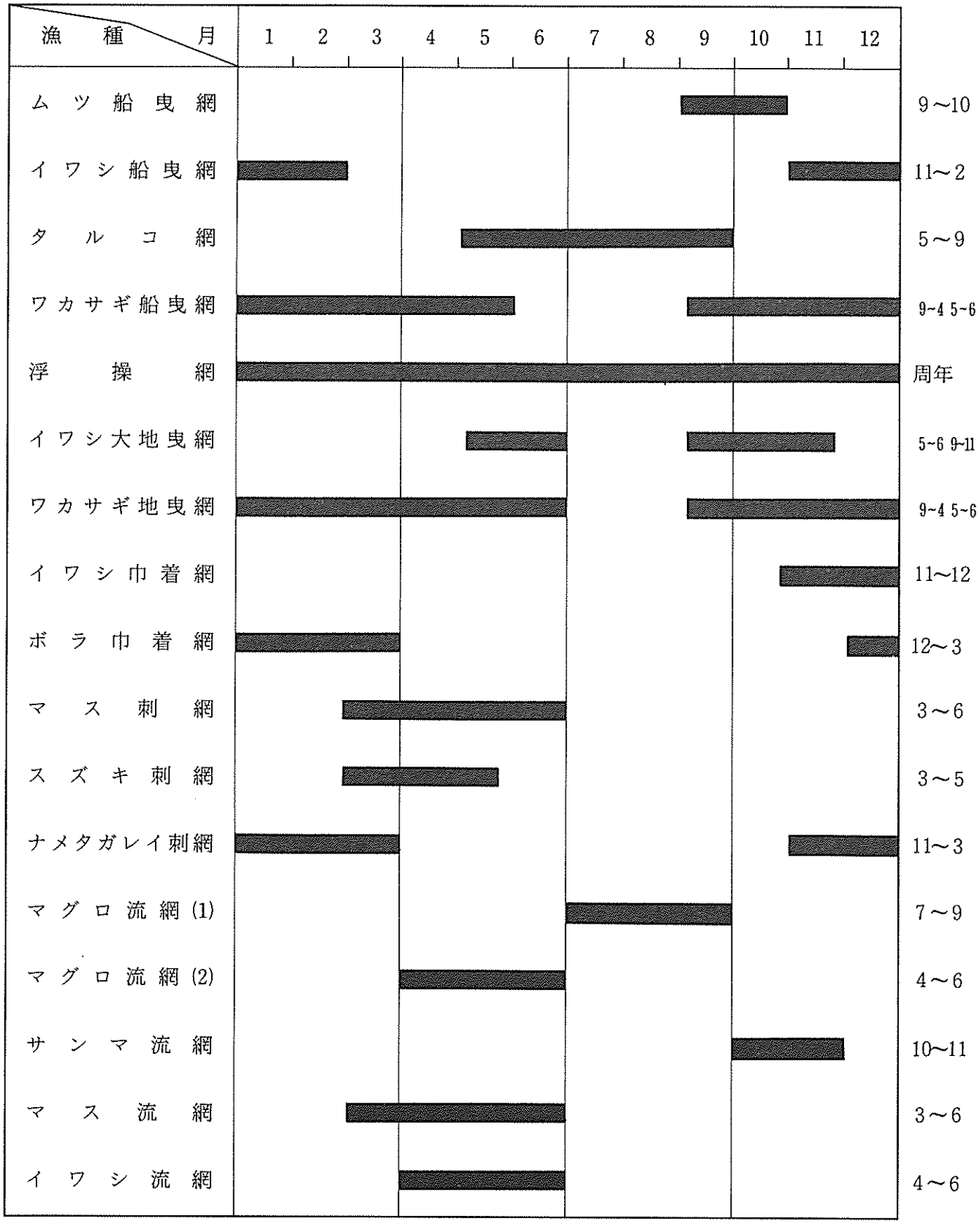
1．北部地区の概要

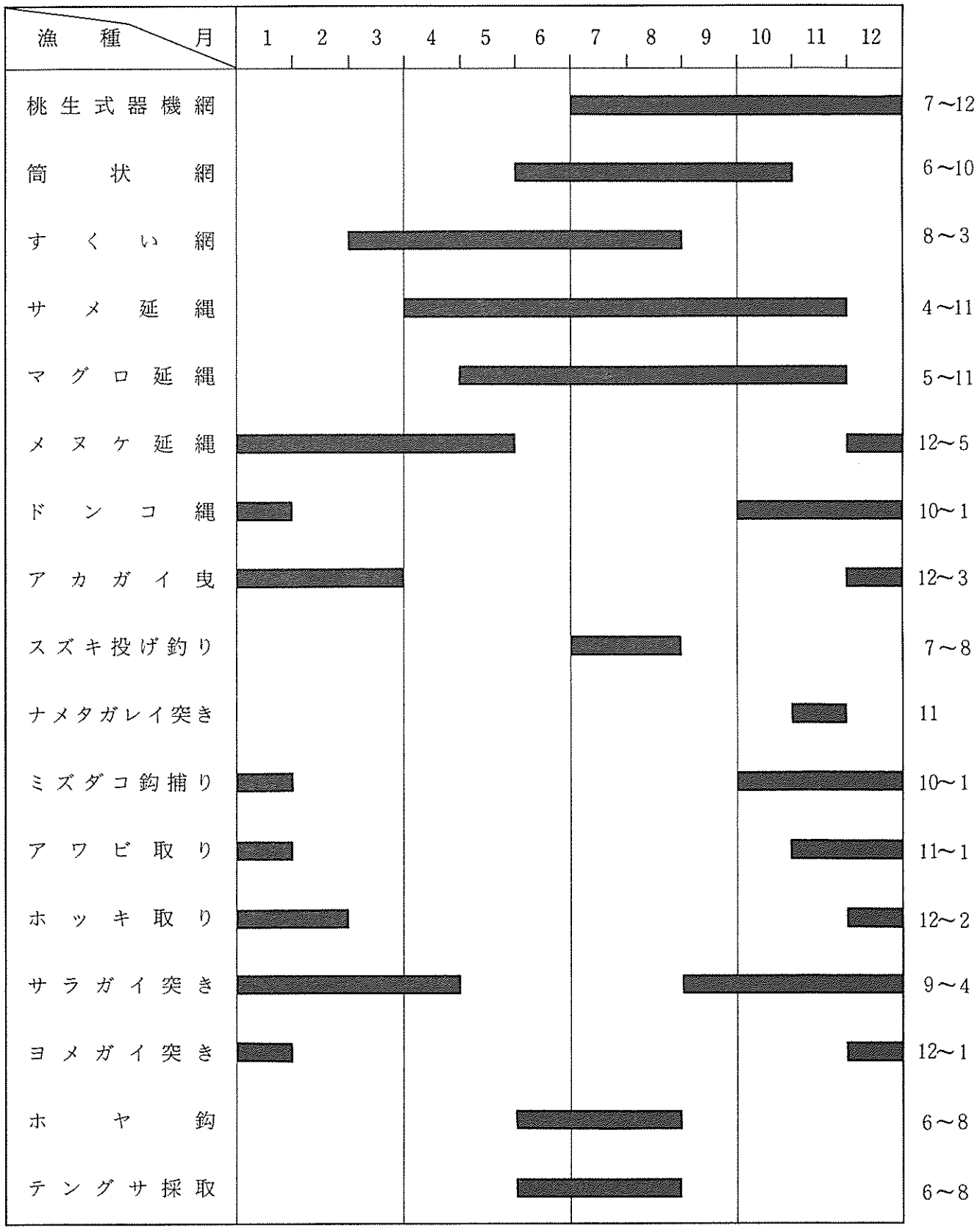
本海域は、本県北部沿岸域に位置している。海岸地形は、三陸リアス式海岸で、海岸の出入りが厳しく海底勾配が極めて急である。このため、天然の入江、内湾に恵まれ、大小63の漁港があり漁業生産の基地となっている。

沿岸は志津川町、歌津町、本吉町、気仙沼市、唐桑町の１市４町にわたり、合計12単協の漁業協同組合がある。

沿岸漁業は漁船漁業、養殖漁業が中心として行われている。また、特定第３種気仙沼漁港をもち、沖合、遠洋漁業の基地となっている。

2. 各漁法の主漁期


漁種
月
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
ムツ船曳網
9～10
イワシ船曳網
11～2
タルコ網
5～9
ワカサギ船曳網
9~4 5~6
浮操網
周年
イワシ大地曳網
5~6 9~11
ワカサギ地曳網
9~4 5~6
イワシ巾着網
11～12
ボラ巾着網
12～3
マス刺網
3～6
スズキ刺網
3～5
ナメタガレイ刺網
11～3
マグロ流網(1)
7～9
マグロ流網(2)
4～6
サンマ流網
10～11
マス流網
3～6
イワシ流網
4～6


漁種
月
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
桃生式器機網 7～12
筒状網 6～10
すくい網 8～3
サメ延縄 4～11
マグロ延縄 5～11
メヌケ延縄 12～5
ドンコ縄 10～1
アカガイ曳 12～3
スズキ投げ釣り 7～8
ナメタガレイ突き 11
ミズダコ鈎捕り 10～1
アワビ取り 11～1
ホッキ取り 12～2
サラガイ突き 9～4
ヨメガイ突き 12～1
ホヤ鈎 6～8
テングサ採取 6～8

1．船曳漁業

①ムツ船曳網（気仙沼市）

ムツは深海性の魚であるが、産卵期（冬）になると浅海に移動し、分離浮遊卵を産む。幼魚は浅海域に生息し、秋になると成長にともない深海に移動する。

この漁は、移動時期である９～10月の２ケ月間行われる船曳網漁法である。

ムツは沿岸の地曳網、船曳網、定置網で漁獲され各浜がにぎわったが、昭和に入ると漁獲量が減少し、現在ムツを見かけることはほとんどない。

網は袋網と袖網からなる。袋網は口前、胴、魚捕りからなる。口前は岩手麻を用い、目合い14節、100掛け、５間切りとする。これを９枚横縫いし、この内左右３枚は、袖部の１脇に縦縫する。胴は岩手麻を用い、目合い16節、100掛け、５間切りとする。これを９枚横縫いし口前に縦縫する。魚捕りは岩手麻を用い、目合い18節、100掛け、５間切りとする。これを４枚横縫し、胴の中央部に縦縫する。また胴の２反半を、魚捕り５尋間に縦目に横縫する。縮結は口前と胴は２割とし、魚捕り部は４反を５尺にし、縮結は７割５分とする。袖網は１脇、中とおで、前とおで、縁網からなる。１脇は岩手麻を用い、目合い14節、100掛け、長さ15尋のもの３反を横縫する。中とおでは岩手麻を用い、目合い10節、100掛け、25尋切りとし、これを２反横縫する。前とおでは岩手麻を用い、目合い10節、100掛け、25尋切りとし、これを２反横縫する。縁網は綿糸８号を用い、目合い２寸、蛙股５掛け、浮子方、沈子方とも、１脇より前とおでまで同じ長さを用いる。縮結は片袖で約１割とする。目通糸は綿糸15号を用い、浮子方、沈子方とも全部に270尋を用いる。縫合糸は綿糸10号を用い、袋縫および袖縫全部に210匁を用いる。浮子は桐製で、長さ８寸、幅２寸、厚さ８分のものを用いる。これを袖網部には３尺、袋網部には１尺の間隔で１枚を取付ける。５枚浮子は桐製で、長さ６寸、幅３寸、厚さ１寸５分のものを用いる。これを５枚魚捕りの所に取り付ける。浮子綱は４本用いる。１本は藁縄、径２分５厘のものを用い、長さ17尋のもの２本を袋網に取り付ける。２本目は藁縄、径４分のものを用い、長さ13尋半のもの２本を１脇に取り付ける。３本目は藁縄、径４分のものを用い、長さ22尋半のもの２本を中とおでに取り付ける。４本目は藁縄、径４分のものを用い、長さ23尋半のものを、前とおでに取り付ける。沈子は60匁位の石を用いる。これを藁縄で包み３尺間隔で取付ける。沈子綱は藁縄、径２分５厘のものを用い、長さ１４尋のもの２本、23尋半のもの４本を使用する。曳綱は藁縄、径８分のものを用い、25尋切りのもの２本を使用する。

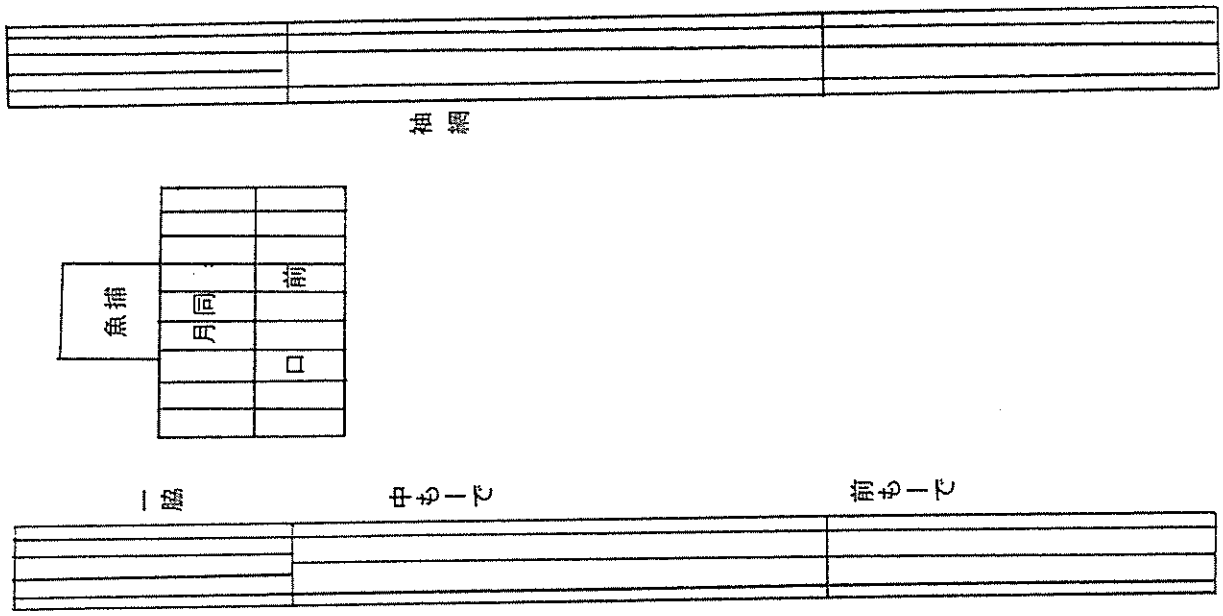
漁期は９～10月。漁場は地先沿岸で水深10尋以内の海底砂地の場所である。

この漁では漁船３隻を使用する。１隻はザグミ（調査員）船とし２人乗り込み、２隻は

網船とし各船12～13人乗り組み出漁する。漁場に着くとザグミが魚群を見付け、その指示に従い網船は、魚群を囲みながら投網する。網舟は魚群を囲み終わると錨を投入し、曳網を開始する。また網は、ムツが中層を泳いでいることから魚を逃がさないように、袖網が海底から海面までとどく高さのものを使用する。

この漁ではムツとアジが漁獲され、ムツの大きさは４～６寸である。

ロクは分離浮遊卵を産むが、この地域ではムツはホヤの口（入出水口）にタラの卵より大きい卵を生むとされ、他人の腹を借りて子を産むのがロク（ムツの方言）と言われていた。



ムツ船曳網漁具見取図

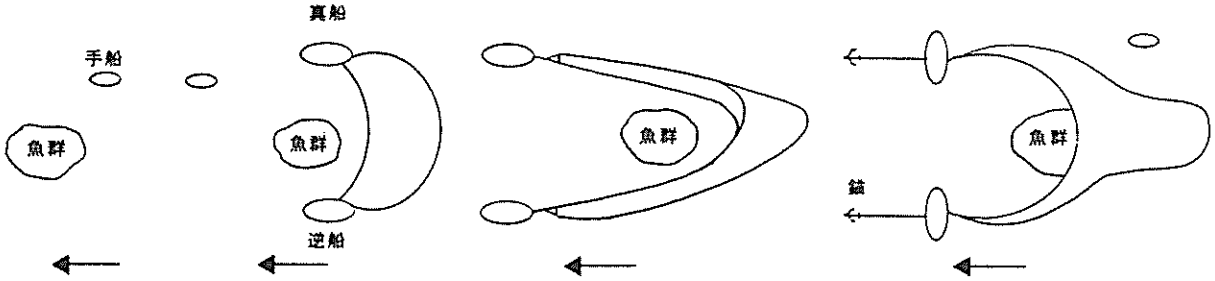
②イワシ船曳網（気仙沼市）

イワシ漁は部落単位の集団操業である。

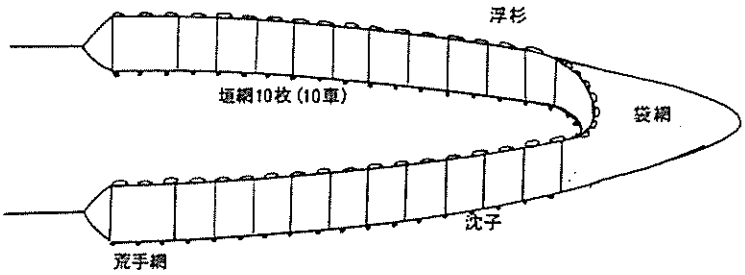
漁が始まる前に各家から１人づつ集まり、船の作業分担を決める。分担は船毎に決定する。船は網船と手船を使用する。網船は２隻使用し、１隻に12～13人乗り込む。網船の配置は船頭、ともし等の順に経験に合った位置づけを行う。手船（調査船）は１隻に２人乗り込み１人は漕ぎ手、１人はザグミ（調査係）となる。ザグミは魚を見つけ網船に指示を出す役割を担い、漁の中心的存在であることから、部落の本家から選ばれる。手船（調査船）は多い時で３～４隻出漁し、各船にザグミが乗り込む方法を取っていた。

イワシ船曳き網はコシタ網とも呼ばれる。イワシ漁は冬漁であり中羽イワシ（中型のマイワシ）が対象となる。

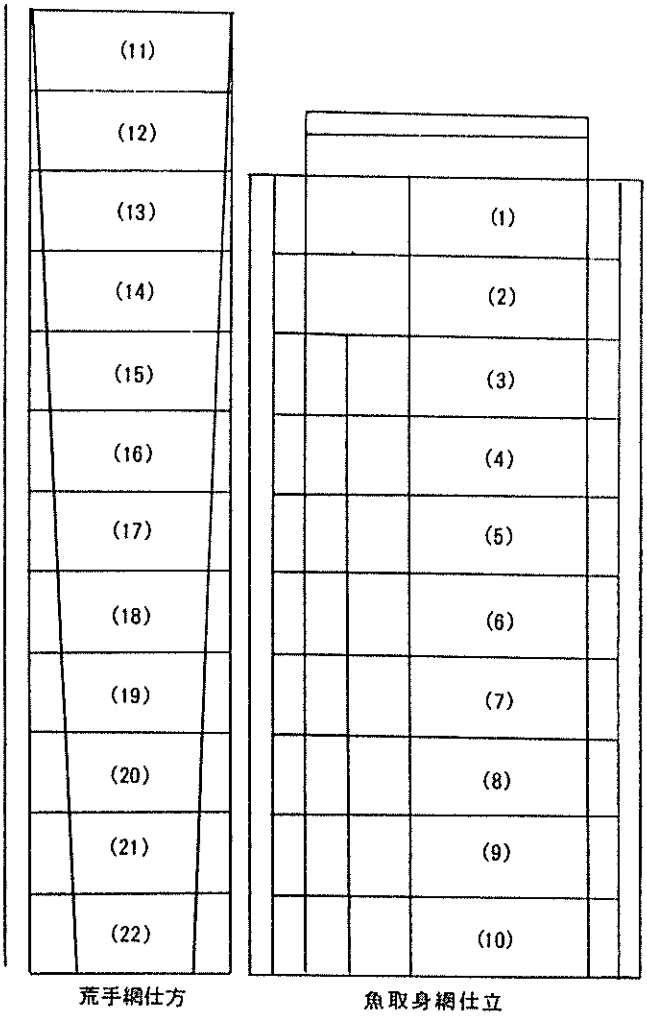
網は、魚捕部、身網部、荒手部からなる。各網は図に基づき連続で番号を付す。魚捕り



イワシ船曳網操業図



イワシ船曳網漁具見取図



イワシ船曳網漁具見取図

部(1)網は３号綿糸、太麻糸を用い、目合い本目25節、100掛け、５尋切りのものを25反横縫して縦目に用いる。(2)網は３号綿糸、太麻糸を用い、目合い本目25節、100掛け、５尋切りのものを30反横縫して縦目に用いる。見網部(3)網は３号綿糸、太麻糸を用い、目合い本目20節、100掛け、５尋切りのものを40反横縫して、縦目に用いる。(4)網は３号綿糸、太麻糸を用い、目合い本目18節、100掛け、５尋切りのものを40反横縫して縦目に用いる。(5)網は３号綿糸、太麻糸を用い、目合い本目14節、100掛け、５尋切りのものを33反横縫して縦目に用いる。(6)網は３号綿糸、太麻糸を用い、目合い本目10節、100掛け、５尋切りのものを30反横縫して縦目に用いる。(7)網は３号綿糸、太麻糸を用い、目合い本目８節、100掛け、５尋切りのものを30反横縫したものを縦目に用いる。(8)網は３号綿糸、太麻糸を用い、目合い本目６節、100掛け、５尋切りのものを25反横縫したものを縦目に用いる。(9)網は３号綿糸、太麻糸を用い目合い本目５節、100掛け、５尋切りのものを用い、20反横縫して縦目に用いる。(10)網は９号綿糸、太麻糸を用い、目合い本目100掛け、５尋切りのものを10反横縫したものを縦目に用いる。荒手網部(11)網は径３分の藁縄を用い、目合い本目５尺５寸、28掛け、15尋切り１反を用いる。(12)網は径３分の藁縄を用い、目合い本目５尺５寸、27掛け、15尋切りのもの１反を用いる。(13)網は径３分の藁縄を用い、目合い本目５尺５寸、26掛け、10尋切りのもの１反を用いる。(14)網は径３分の藁縄を用い、目合い本目５尺５寸、25掛け、10尋切りのもの１反を用いる。(15)網は径３分の藁縄を用い、目合い本目５尺５寸、24掛け、10尋切りのもの１反を用いる。(16)網は径３分の藁縄を用い、目合い本目５尺５寸、23掛け、10尋切りのもの１反を用いる。(17)網は径３分の藁縄を用い、目合い本目５尺５寸、22掛け、10尋切りのもの１反を用いる。(18)網は径３分の藁縄を用い、目合い本目５尺５寸、21掛け、10尋切りのもの１反を用いる。(19)網は径３分の藁縄を用い、目合い本目５尺５寸、20掛け、10尋切りのもの１反を用いる。(20)網は径３分の藁縄を用い、目合い本目５尺５寸、19掛け、10尋切りのもの１反を用いる。(21)網は径３分の藁縄を用い、目合い本目５尺５寸、18掛け、10尋切りのもの１反を用いる。(22)網は径３分の藁縄を用い、目合い本目５尺５寸、17掛け、10尋切りのもの１反を用いる。縁網は８号綿糸、太麻糸を用い、目合い本目８節、９掛け、４尋のもの２反を縦縫し、魚捕り部に横縫する。この他に３部径の藁縄を用い、目合い本目６寸、２掛けのものを魚捕り部に横縫する。身網部には８号綿糸、太麻糸を用い、目合い本目８節、９掛け、４尋切りのもの16反を藁縄を用いて縫合する。縮結は魚捕り部は８尋、身網部両側は28尋、口前20尋は８尋、荒手部 130尋は125尋とする。浮子は魚捕り部で使用するものは、杉製で、長さ１尺２寸３分、中央６寸５分、両端４寸５分、厚さ中央とも１寸２分のものである。これを１尋に４枚の割合で取り付け、合計32枚用いる。身網部に使用するものは杉製で、長さ９寸５分、幅中央４寸、両端２寸、厚さ中央とも１寸のものである。これを１尋につき４枚の割合で取り付け、合計224枚を用いる。荒手部に

使用するものは杉製で、長さ１尺１寸、幅中央とも６寸、両端２寸５分、厚さ中央とも１分のものである。これを１尋につき４枚の割合で取り付け、合計1,000枚を用いる。浮子は合計1,256枚使用する。浮子綱は藁縄、径７分のものを用い、魚捕り部および身網部に、長さ78尋のもの２本、荒手部には長さ125尋のもの４本を用いる。沈子は重さ30匁位のものを用いる。これを沈子綱に３尺の間隔で１個を取り付け、合計416個を使用する。沈子綱は藁縄径７分のものを用い、長さ120尋のもの４本を使用する。方言ぶち縄は、身網口前の沈子綱の代用縄で、藁縄、径７分のものを用い、８尋切りのもの２本を合わせて用いる。網の製作には、30人がかりで50日位の日数を要する。

漁期は11～翌年２月。漁場は水深10尋以内の海底が砂泥質の場所である。

日中の操業である。網船２隻と手船１隻を使用する。網船は１隻を真網船といい、もう１隻を逆網船という。肩８尺の網船に漁師１２人乗り込み出漁する。始め手船はザグミ（魚見）を乗せ漁場に着くと、速やかに魚群を探し出す。次に魚群の進行方向を網船に指示する。網船は手船の指示に従い、魚群に近寄り適当な位置に着く。その後袋網を投入し両船は左右に別れて次々と投網する。投網が終わると引き綱を投下しながら同じ方向に漕ぎ寄せ錨をとうじもあいを捕る。両船は均一になるように網を引き寄せる。もあい綱は最初は延ばしておき、網を引き寄せるに従い短縮する。最後に袋網を操り上げ漁獲物を取り上げる。１回の操業時間は３～４時間かかる。このため１日に３～４回の操業しか出来ない。手船がマイワシを見付ける場合の目安は水面に泡が出る、魚が水面に出てくる、水色が変わる（黒っぽくなる）等である。何れの場合も魚群を捜すためには、かなりの経験が必要である。

１回の操業で、多いときには1000籠（１かご30キロ）の漁獲があった。

操業は戦前まで行われた。

③タ ル コ 網（気仙沼市）

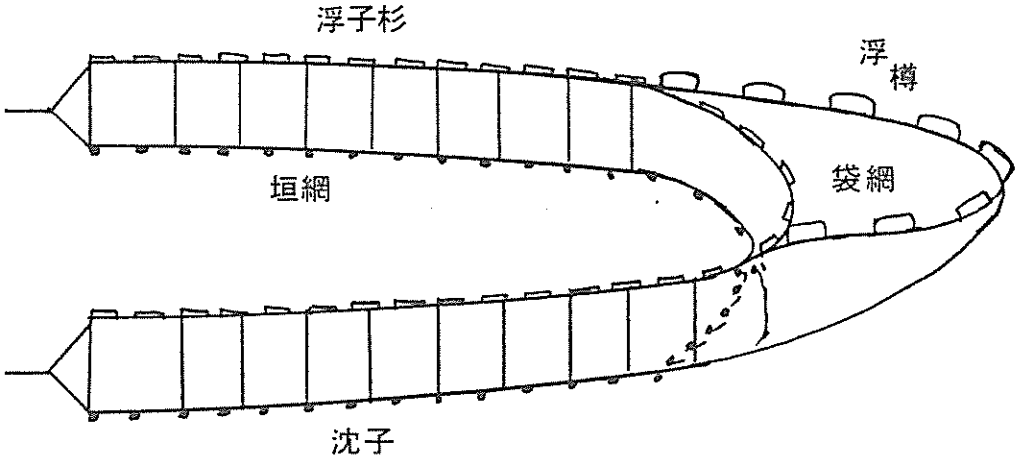
イワシ漁では、５～９月中旬の夏漁はタルコ網、11～２月までの冬漁はコシタ網（イワシ船曳網）が行われる。

タルコ網はカツオ漁に使用するカタクチイワシを漁獲する目的で行われる船曳網漁である。

網は、コシタ網と同じものを使用する。構造上の相違点は２点あり、１点は袋網部に浮きとして樽を用いることで、網が常にふくらんだ状態を保つことにより魚が傷つかないようにしてあることである。もう１点は袋網入口上部にかぶせ網を取り付けてあることで、１度入ったイワシが逃げられないようになっていることである。この漁法では、カツオ釣

りの餌イワシ（生きたイワシ）を取ることが目的であり、出来るだけ魚を傷めず漁獲することが必要である。

経営、漁法等はコシタ網と同じである。



タルコ網漁具見取図

④ワカサギ船曳網（志津川町）

チカ（方言は、ワカサギ）は、全長15センチ程度のワカサギに似た魚で、冬期間に沿岸域に来遊する。

ワカサギ船曳網は、冬期間行われる船曳網漁である。

曳網は垣網とスド（袋網）からなる。網は綿糸を用い、長さ25間とする。スドは、目合い14節、長さ５尋とする。垣網は３段網とし、スドに近づくにしたがい目を小さくする。網丈は、１丈３尺とする。浮きは、桐又は漆製で、長さ８寸のものを、100個用いる。沈子はセト製で、網全体に150個を使用する。網は自分で製作し、１網作るのに約１カ月間かかる。浮きに使用する漆は、長く使うと水を含み表面が腐るので、その場合焼くことにより表面の皮を取り再度使用する。

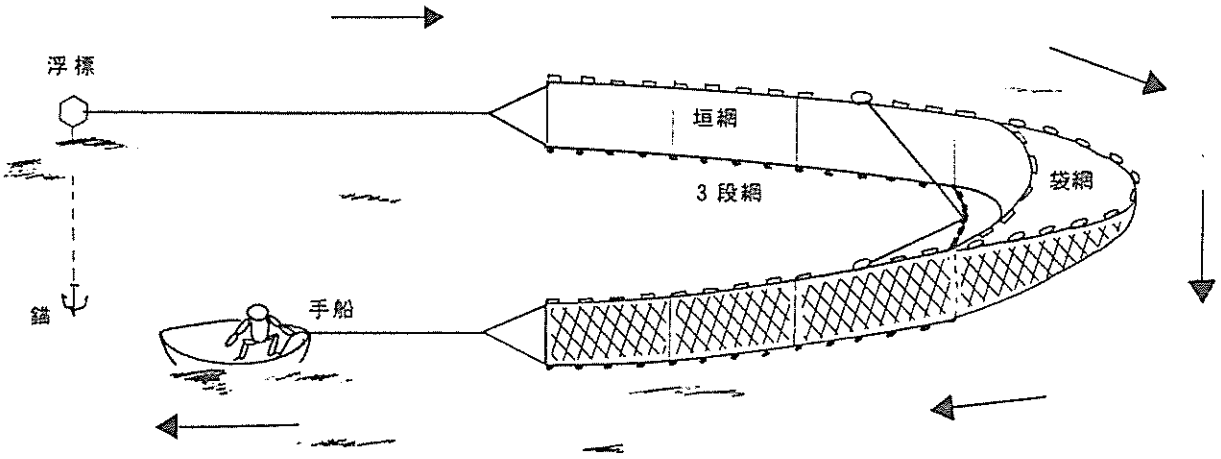
漁期と対象種は、９～翌年４月まではワカサギ、５～６月はタナゴである。漁場は地先沿岸で、水深３～４尋の海底砂地の場所である。

漁船１隻に２～３人乗り込み出漁する。漁場では１人が舳先にたって魚群を捜す。魚群を見つけると船から錨、浮標と下ろし、網の片袖を固定する。その後船を走らせて投網を行いながら魚群を囲んでいく。投網が終わり浮標の所まで来ると、左右の浮綱を船に取って曳網を開始する。途中岩がある場合には、岩の側まで船を寄せ、網を揚げるか巻き取る等してかわし操業を続ける。１日に４～５回の操業を行う。

ワカサギは淡水の流れ込むところに多く、産卵期に近い３～４月にかけては夜になると粗い砂地の場所に多くあつまる。この時期は曳網を夜間行う。

タナゴは八十八夜が近づくと藻場に集まる。この集まった所を漁獲する。漁獲量は潮によって決まり、ワカサギは満潮、タナゴは干潮がよい。

１回の漁では１貫、多い時には10貫位の漁獲がある。



ワカサギ船曳網操業図

2．底曳網漁

①浮　操　網（気仙沼市）

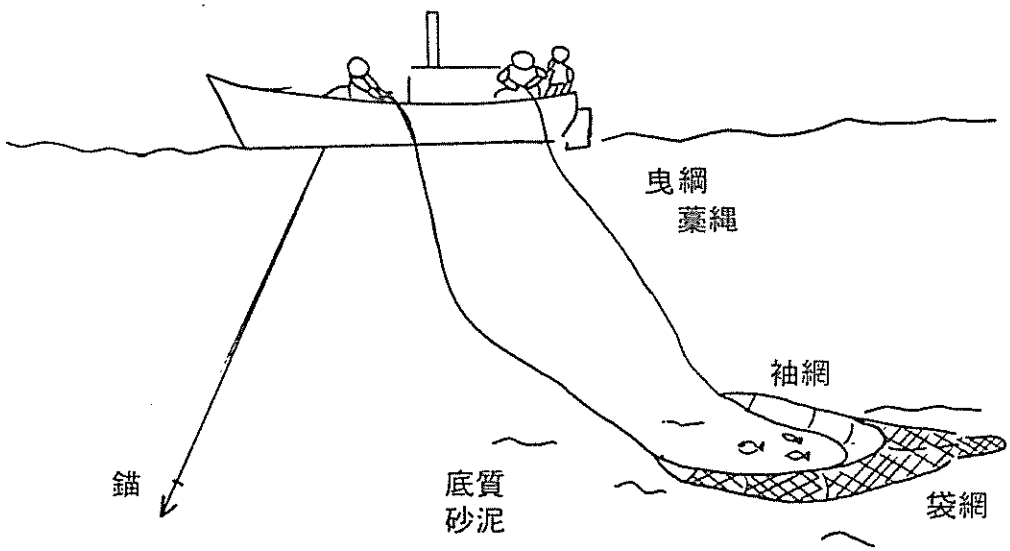
この漁法は漁船１隻を使用し、夜間行う手操網（底曳網）漁業である。

網は、小目網、中目網、大目網からなり漁獲対象種により使い分ける。小目網は、袋網部と袖網部からなる。袋網部はスッポ、スッポ境、身網からなる。スッポは岩手麻、径２厘を用い、目合14節、100掛け、長さ４尺のものを使用する。これを４反横縫して用いる。スッポ境は岩手麻、径１厘５毛を用い、目合い１２節、100掛け、３尺切りのものを使用する。これを５反横縫しスッポに縦縫する。身網は岩手麻を用い、目合い11節、長さ１丈２尺５寸切りのものを使用し６反を横縫する。これと目合い９節、90掛け、長さ１丈２尺５寸切りのものを使用し、６反を横縫し２部を縦に縫合わせ、11節の方をスッポに縦縫する。縮結は口前で、上下１枚づつは２尺に仕上げる。また左右両側２枚づつは１脇に縦縫する。袖網部は、１脇とトオテ網からなる。１脇は岩手麻、径１厘５毛のものを用い、目合い９節、100掛け、長さ１丈のものを使用する。トオテ網はくご縄、径１分のものを用い、目合い本目１尺２寸、８掛け、長さ７尋切りのもの１反を袖として用いる。縮結は浮子方で１尋とし、２寸５分（９分５厘）の割合とする。沈子方はない。目通し糸はくご縄、径１分のものを用い、長さ12尋のもの１脇に用いる。浮子は桐製で、長さ６寸５分、幅１寸５分、厚さ６分のものを29枚使用する。この取り付けは口前では２尺間隔で３枚、１脇には６枚づつ、トオデには７枚づつとする。浮子綱は、岩手麻、径２分のものを用い、長さ２丈２尺のものを２本使用する。沈子は鉛製の円筒型で、長さ１寸、径５分、重量約10匁のもの20個を用いる。取付けは口前は２尺間隔で４個、片袖には８個づつ、トオデ網には素焼の円筒型で、重量約10匁のもの15個づつを用いる。沈子綱は、藁縄、径３分５厘、長さ５尋のもの１本を使用する。この他に岩手麻、径２分５厘、長さ５尋のもの１本と、藁縄、径３分５厘、長さ７尋切りのもの２本づつを使用する。曳綱は藁縄、径１寸、長さ20尋のもの２本と、藁縄、径６分、長さ200尋のもの２本を用いる。テン木は、杉の円棒を用い、径７分、長さ１尺３寸のもの１本づつを、両袖の端に用いる。中目網は、スッポ、スッポ境、身網、１脇からなる。スッポは岩手麻を用い、目合い６節、60掛け、４尋切りのものを使用する。これを２反横縫する。スッポ境は岩手麻を用い、目合い100掛け、３尺切りのものを使用する。これを３反横縫しスッポに縦縫する。身網は岩手麻を用い、目合い５節、45掛け、５尋切りのものを使用する。これを６反横縫し、スッポ境に縦縫する。１脇は、岩手麻を用い、目合い80掛け、２尋切りのものを使用する。これを各１反づつ片袖に用いる。大目網は、スッポ、身網、１脇からなる。スッポは綿糸、５号を用い、目合い本目１寸５

分、200掛け、長さ５尺切りのものを使用する。これを円筒型に縫合する。身網は３種類使用する。１網は綿糸、４号を用い、目合い本目２寸５分、50掛け、長さ５尋切りのもの１枚を下部に用い、口前では２尺とする。２網は綿糸、４号を用い、目合い本目２寸、55掛け、５尋切りのものを１枚は上部に用い、口前においては２反を使用する。３網は綿糸、４号を用い、目合い本目２寸５分、80掛け、５尋切りのものを用い、両側に１枚づつを使用する。１脇は綿糸、４号を用い、目合い本目３寸５分、80掛け、１丈２尺５寸切りのものを２枚使用し、１枚づつを片袖に用い、片袖を縮結して１丈２尺とする。漁期は周年。漁場は地先沿岸の水深15～50尋迄の海底が砂泥の場所である。

肩４～５尺の小伝馬船に漁師３人乗り組み出漁する。漁場に着くと先ず山見法により位置を定め錨を投じ、水深の３倍位に錨綱を延ばす。この場所に８升入位の樽を付けて目標とし、ここから片方に曳網を延ばす。次に網を湾曲に投じ、最後に曳網を延ばして元の位置に戻る。その後浮標樽にもあいを取り両曳網を同時に引き寄せる。最後に網の袋を揚げながら魚をスッポに送りこみ、船中でスッポを解いて魚を取り出し魚倉にいれる。小目網を使用するときは、曇りの時または荒天後で海底が荒れている時であり、このときはカジカ（ハゼ）等が漁獲できる。中網はカレイ用であり、大目網は主としてヒラメを捕獲する目的で用いる。

この漁業は戦前まで行われた。



浮操網操業図

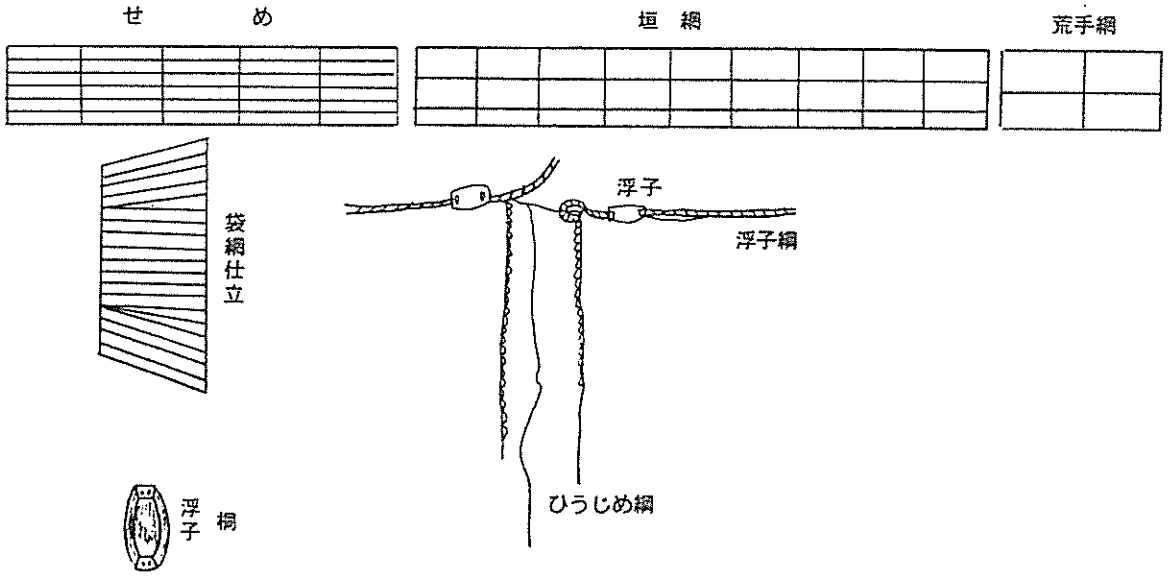
3．地曳網漁

①イワシ大地曳網（歌津町）

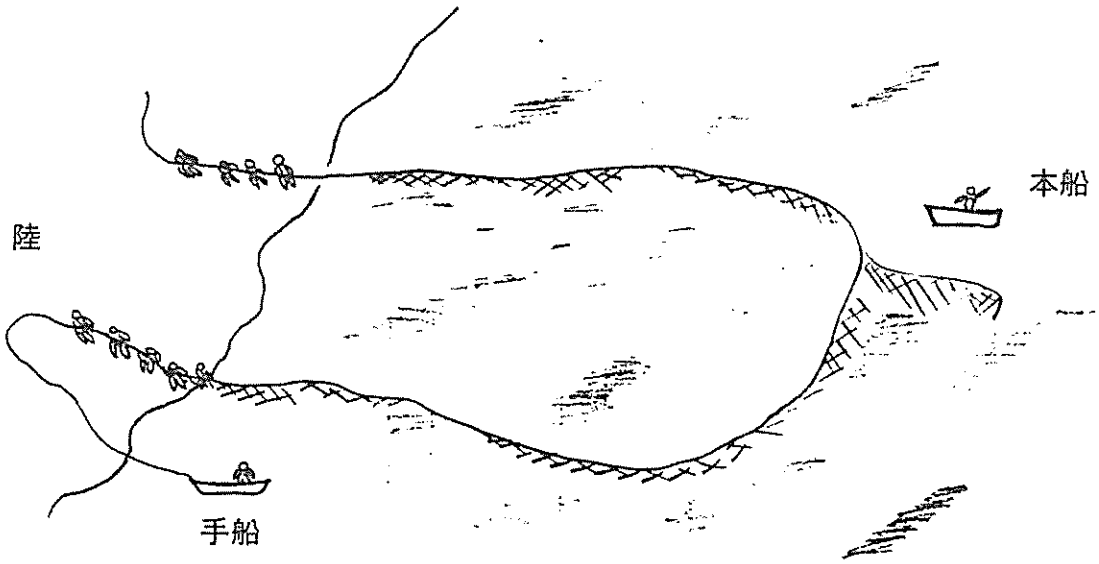
イワシ大地曳網は海底が砂地で障害物のない場所で行われた。操業形態は浜全体で行われる共同作業である。

網は、袋網部と、袖網部からなる。袋網部は、袋、すじ縄、沈子縄、沈子、沈子綱、浮子からなる。袋は岩手麻を用い、目合い16節、100掛け、長さ25尋切りのものを用い、18反の内２反は斜織りして４反とし、20反は横縫する。すじ縄は岩手麻、径２分のものを用い、長さ22尋切りのもの24本を使用する。これを各反の縫合用とし１本づつ、外４隅には１本づつをたして２本とし、合計24本使用する。沈子綱は藁縄、径１寸のものを用い、長さ４尺のものを使用する。これを両端５寸づつ折り返してつぼを作り、２本を合わせて用いる。沈子は約60匁の石を用いる。これを沈子綱に３尺間隔で５個取り付け、沈子綱の間に挟み結び付ける。沈子綱は、藁縄径５分のものを用い、長さ４尺とし、両端５寸を折り返してつぼを作り２本を合わせて使用する。浮子は桐製で、長さ７寸、幅４寸、厚さ３寸のものを用い、浮子綱２本の間に３枚をさして結び付ける。袋網部の沈子綱と浮子綱の取り付け場所は、沈子綱は袋網の沈子方中央部の１反に、浮子綱は浮子方中央部１反に結び付ける。縮結は約１割３分とする。これは網丈２丈５尺を、すじ縄２丈３尺に結び付ける為である。また浮子方、沈子方は約５割とする。これは目合い16節、100掛けのもの１枚を、３尺に縮結するためである。袖網は、方言せめ、垣網、荒手網、目通綱、浮子綱、浮子からなる。方言「せめ」は岩手麻を用い、目合い14節、100掛け、長さ20尋切とする。これを６反横縫し、５列に縦縫する。垣網は岩手麻を用い、目合い８節、100掛け、長さ20尋切りとする。これを２反半横縫し、８列に縦縫する。荒手網は岩手麻を用い、目合い６節、100掛け、長さ20尋切りとする。これを２反を横縫し、２列に縦縫する。縮結は浮子方、沈子方とも２割５分とする。目通綱は岩手麻、径１分５厘のものを用い、長さ1,200尋とする。浮子綱は岩手麻、径５分のものを用い、長さ600尋とする。浮子は桐製で、長さ８寸、幅２寸５分、厚さ１寸のもの、せめの部には８寸間隔で垣網には１尺２寸間隔で、荒手には２尺間隔で１枚を用いる。沈子綱は藁縄径１寸のものを用い、長さ300尋とし片袖に２本づつ用い、合計４本を使用する。沈子は40匁の石を用い、せめの部分は１尺４寸、垣網は２尺、荒手の部分は３尺間隔に１個を取り付ける。ひうじめ縄は岩手麻、径２分のものを用い、長さ846尋を使用し、各網地の接合に用いる。

漁期は年に２回あり、夏は５～６月の２カ月間、秋は９～11月の３カ月間。漁場は沿岸域である。



イワシ大地曳網漁具見取図



イワシ大地曳網操業図

地曳網は、陸又は海上で操業している船が魚群を見付けることから始まる。陸上で捜す場合、イワシが多いと海の色が変わることでわかり、海上ではカモメが多くついていることでわかる。魚群を見つけると部落全体にしらせ、全員で漁の準備をする。この漁では漁船２隻を使用する。１隻は手船といい肩５尺の船で、もう１隻は本船といい肩７～８尺の船である。操業は、まず手舟に漁師３～４人乗り組み、曳網の片袖部を積み込み出漁する。次に本船に漁師10人乗り組み、曳網の片袖部を積み込み出漁する。本船は魚群を確認すると、片袖の一端より投入しながら魚群を囲んでいき、最後に手網を付けて陸に漕ぎ着け曳き寄せる。手舟は本船の投入のした片袖の１端に曳網を付けて陸に漕ぎ着ける。網は両袖に緩みのないように平均を保つように曳き寄せる。この平均を保つため手船

と本船に１人づつ乗り込み、袋口付近にいて引手の強弱を支持し、袋口を引き立てて魚が入りやすいようにする。

漁獲されたものは部落全部で分ける。夏場に漁獲されたものは肥料にし、冬場に漁獲されたカタクチイワシは生干しに、マイワシは塩をして売った。

②ワカサギ地曳網（志津川町）

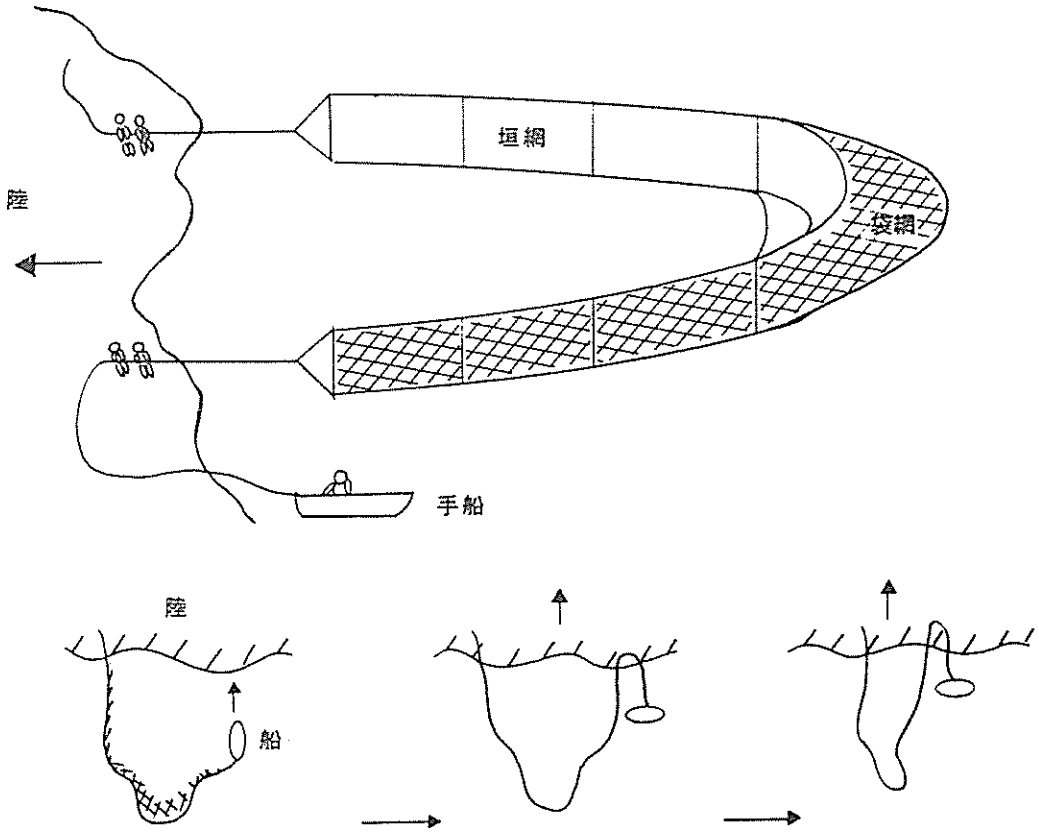
ワカサギ地曳網漁は、ザグミを中心にした数軒単位の形態をとる。漁法は、小型の地曳網である。

漁具はワカサギ船曳網で使用するものを兼用して用いる。

始めザグミの乗った手船（網船兼用）が魚を捜す。魚を見つけると手船は陸に片方の曳網を取って、投網をしながら魚群を囲んでいく。囲み終わるともう片方の曳網を陸に渡す。その後陸では２人１組となり曳網を始める。手船は網が均等に曳けるように海上から指示を出す。１回の作業時間は20～30分である。

漁獲された魚は、漁に加わった人達で均等に分ける。

地曳網は砂浜が必要であるが、現在防波堤等ができたことから砂浜が少なくなり、この漁は行われなくなった。



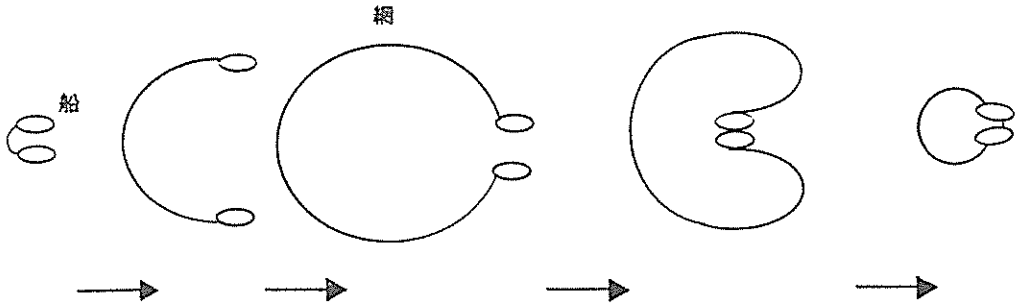
ワカサギ地曳網操業図

4．旋　網　漁

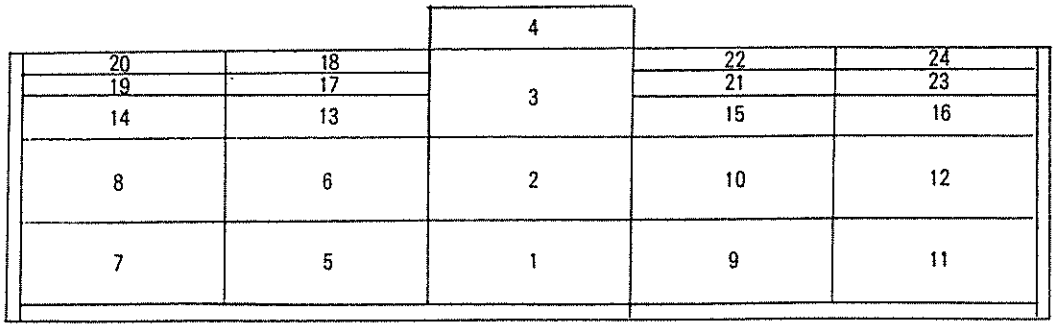
①イワシ巾着網（気仙沼市）

イワシ巾着網は、冬期間行われる旋網漁業である。網は滑車を用いて巻き上げる。

網は魚捕り部と袖網部からなる。網は図に基づき番号で表示する。魚捕り部は(1)～(4)網を使用する。(1)～(3)網は２号綿、糸太麻糸を用い、目合い本目23節、100掛け、10尋編み下ろしのものを１反として用いる。これを60反横縫し縦目に用いる。(4)網は３号綿糸、太麻糸を用い、目合い本目14節、100掛け、５尋切りのものを用いる。これを30反横縫し縦目に用いる。袖網部は(5)～(28)網を使用する。(5)～(12)網は２号綿糸、太麻糸を用い、目合い本目20節、100掛け、10尋切りのものを用いる。これを45反横縫し縦目に用いる。(13)～(16)網は２号綿糸、太麻糸を用い、目合い本目20節、100掛け、５尋切りのものを用いる。これを45反横縫し縦目に用いる。(17)～(20)網は３号綿糸、太麻糸用い、目合い本目14節、100掛け、２尋半切りのものを用いる。これを30反横縫し縦目に用いる。(21)～(24)網は４号綿糸、太麻糸を用い、目合い本目８節、100掛け、２尋半切りのものを用いる。これを18反横縫し縦目に用いる。(25)網は３号綿糸、太麻糸を用い、目合い本目８節、100掛け、138尋切りのものを用いる。これを１反、横目に用いる。(26)網は３号綿糸、太麻糸を用い、目合い本目８節、100掛け、90尋切りのものを用いる。これを１反、横目に用いる。(27)～(28)網は麻、径１分の糸を用い、目合い３寸、４掛け、28尋編み下ろしのものを用いる。これを横縫合わせし縦目に用いる。縮結は網丈と網長で行う。網丈は魚捕り部を30尋に、両袖端を28尋に仕上げる。網の長さは捕魚部と左方袖部を80尋に仕上げる。縁網は径３分のマニラ綱を用い、長さ30尋とし、２本を左右縁網の端に取り付ける。浮子は桐製で、長さ４寸、径４寸の円筒型のものを用いる。これを魚捕り部に２寸５分の間隔で３個、袖網部には４寸間隔に１個の割合で結び付ける。浮子綱は、しゅろ綱、径３分のものを用い、120尋のもの各２本を合あわせて使用し、綱端を50尋づつ延ばしておく。沈子は鉛製の円筒型で、長さ１寸５分、外径および中央８分、両端６分、孔径４分のものを用いる。沈子綱は径３分のマニラ綱を用い、長さ80尋と120尋の各２本を合わせて用いる。綱の一端は50尋づつ延ばしておき、浮子綱の延長部とともに曳綱としても用いる。環釣り綱は径３分のマニラ綱を用い、長さ４尋のもの１本を沈子綱に４尋３尺間隔で結び付け、合計44本を用いる。環は亜鉛鍍金鐵を用い、環径９分、外径４寸のもの24個を用いる。括綱は良質のマニラ綱、径７分を用い、長さ150尋のもの２本を使用する。この内１本は魚捕り部の中央に用い、撚戻器を取り付ける。分銅は45貫の鉛製のものを用いる。分銅綱はマニラ綱、径４分のものを用い、長さ50尋のもの１本を使用する。



イワシ巾着網操業図



イワシ巾着網漁具見取図

漁期は11～12月。漁場は、地先沿岸の水深20～40尋の海底が砂地の場所である。

網船２隻に網を分載し出漁する。漁場に着くと、まず魚群を探し出す。魚群を見つけると各船は近づき、魚群の密度、遊泳方向、潮流の方向、速さを推察する。投網の見込みがあるときは、網を一体に縫合して投網の準備をする。魚群が近づいたら網船は網の中央より投網を始め、左右に分かれて魚群を囲む。両船が接すると直ちにもあいを取り、両船は共に各自の浮子綱の一端を船梁に結び付ける。網地の縁端は胴間に置き、浮子綱の一端は２番船梁に結び付ける。同時に括綱は舟首に取り交わして、２番船梁際に立てた支柱の滑車に通す。その後両船の括綱を分胴の頭部左右の滑車にはめこみ沈下して、両袖の間隔をせばめて均一に括綱を曳く。網の締括が終わり網袖が水面にあらわれると、分胴を船に収め撚戻器より一方の括綱をとく。網がまとまった時は、両船は共に２番船梁に支え持ち、網を操揚げ捕獲する。

②ボラ巾着網（気仙沼市）

現在、気仙沼湾内ではボラを対象にした漁業は行われていないが、戦前までは、湾内はボラの好漁場であった。ボラ漁は、雪白水（山から流れて来る冷たい水）が来ると始められ、水温の高くなる春先まで行われた。この時期のボラは目に霞（脂肪）がかかり、夏に

比べて動きが鈍いため漁獲率がよい。

この漁は集団操業の形態をとりザグミを中心とした旋網漁業である。

網は綿糸を使用し、目合いは外網で８～10節、中網で16節とする。網の長さは仕上がり50～300間とし、操業規模により使い分ける。縮結は５割とする。網丈が長いと、浅場から深場まで漁獲場所がひろがって良いが、お金がかかることから10～20尋とする。浮きは桐を使用する。沈子はタマガネと呼ばれる鉛製のもので、中央に穴の空けてあるものを使用する。ダベゾは上部が曲がった堅木で滑車を取り付けて旋網作業を行うときに用いる。

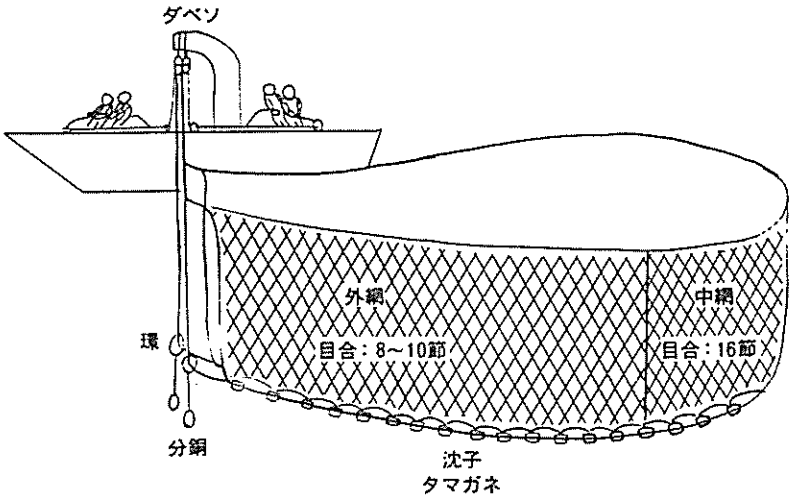
漁期は12～翌年３月。漁場は、水深10尋位までの海底が泥の場所とする。

漁船は網船２隻、手船１隻を使用する。網船は１隻は真船、１隻は逆船と呼ばれる。ボラ漁は夜明けから始まる。まずザグミが船または陸からボラの跳ねる様子や、海の色の変化によって魚群を見付け出す。次にザグミは魚群移動方向を推測し、網船に指示する。その後、網船はザグミの指示に従い漁場に向かう。漁場に着くと網船は二手に分かれて網を下ろしながら魚群を囲んで行く。２隻が近づくと、真船は逆船より浮綱と締綱を受け取ってから錨を下ろす。その後船内にダベゾを立てて、滑車に締綱を通す。次に環に締綱を通して分銅と環を水中に下ろす。分銅と環は網底の締綱を引く時に、網が海中で常にひろがった状態を保つための支点となる役割がある。その後、締綱を曳きアシ部分を閉じて分銅を上げ、網をしぼって漁獲物を取り上げる。

この時期のボラは、海底近くを遊泳し、風や波があると魚を見つけることが出来ないことから、凪（波や風がほとんど無い日）の日にしか操業はできない。

以上のことから、ボラを見つけることはかなりの注意力と感が必要であり、この漁でのザグミの役割が重要であることがわかる。

漁獲が多い時には小舟で20隻（１隻に300キロ積み）もの水揚げがあった。ボラの大きさは30～40 cm のものが主体であった。



ボラ巾着網操業図

5．刺　網　漁

①マ ス 刺 網（歌津町）

マスは春先に山に沿って来ると言われ、この時期は岸近くまで漁獲される。

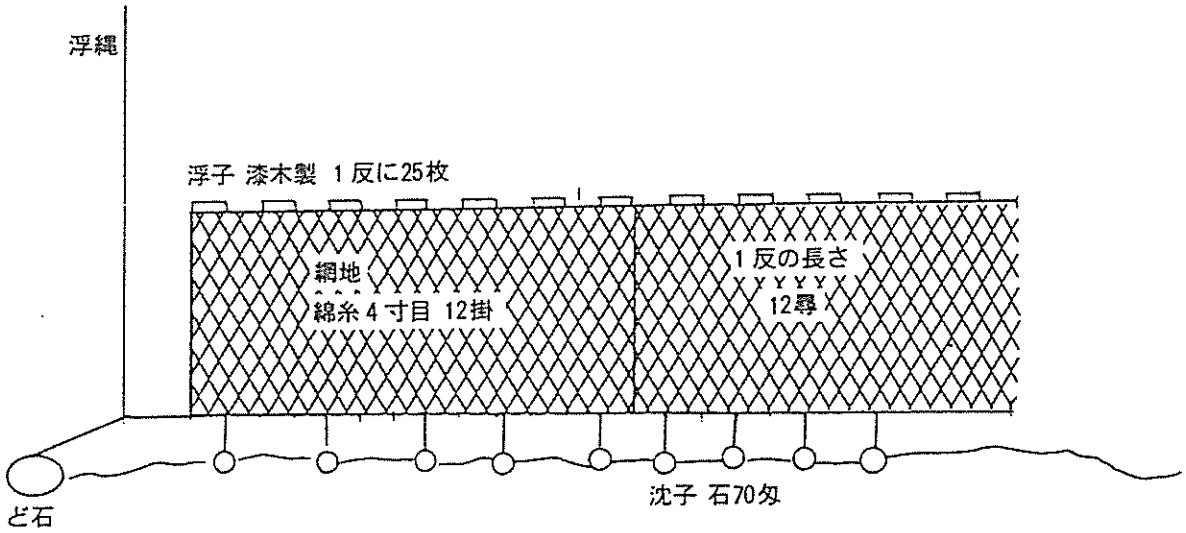
マス刺網はサクラマス、マスノスケ等のマス類を対象にして行う底刺網である。

網地は３号綿糸を用い、目合い４寸、12掛け、22尋を１反とする。縮結は浮子方で12尋、沈子方で７尋に仕上げる。目通糸は８号綿糸を用い、浮子方は14尋、沈子方は10尋とする。浮子は漆木製で、長さ５寸、中央幅および厚さは共に５分のものを用いる。１反に25枚を結び付ける。網目は浮子下に１目、浮子間に５目を入れる。浮子綱は、くご縄径５厘のものを用い、長さ12尋のものを使用する。沈子は70匁位の石を用い、最初の１反には５個、他は４個を用いる。浮子綱は、麻縄径３分のものを用い、長さ７尋のものを使用する。下げ麻は、８号綿糸を用い、長さ８寸切りのものを１反に25本結び付ける。浮標は桐材を用い、径４寸、長さ２尺位のもの２本を使用する。浮縄は藁縄径５分のものを用い、水深により異なるが40～50尋とし投網の両端に結び付ける。

漁期は３～６月。漁場は水深15～30尋の礁間で底質が砂地の場所である。

肩５尺位の棚付けサッパ船に３人乗り組み出漁する。夕方漁場に着くと、先ず浮標及び浮標綱を投じる。その後、潮流を横断するように網を下ろしていく。最後に浮標綱および浮標を入れて帰航する。翌朝、日の出前に漁場につき揚網を行う。１か所には、３～５反を一繋ぎとし、数か所に刺網する。

１反で２～３本漁獲される。



マス刺網漁具見取図

②スズキ刺網（志津川町）

この漁は、春木の芽が出るころより始められ、木の芽が緑に色づく（初夏）頃まで続けられる。この時期のスズキはイカナゴを捕食するために砂地の場所に集まる。これを漁獲する目的で行うのがスズキの底刺網である。

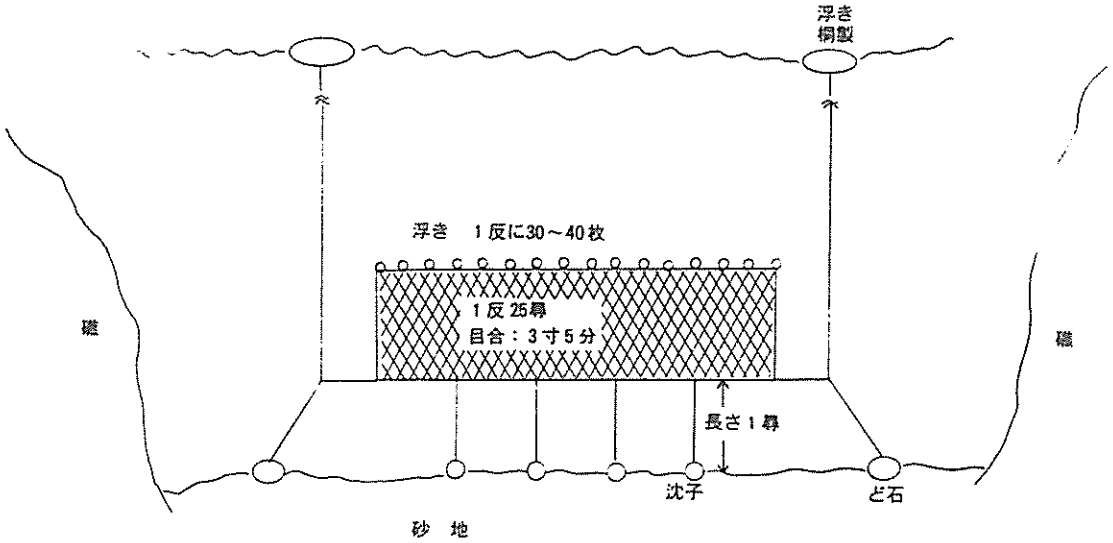
網地は麻を用い、目合い３寸５分、25尋を１反とする。浮きは桐製で、１反に30～40枚を用いる。沈子は石を用い、１反に４個を使用する。

網の設置水深は漁期始めスズキが海底近くにいる時は底から１尋上げ、時期が遅れるにつれ海底からはなし、最後は３尋前後上げる。

漁期は３～５月。漁場は外洋に面した礁間である。

漁船に１～２人乗り込み夕方出漁する。刺網は場所を変えて数か所に設置するが、漁場は山計りで決める。１か所には３～５反を一繋ぎとして設置する。揚網は翌日行う。

漁獲は凪の良い日がよい。



スズキ刺網漁具見取図

③ナメタガレイ刺網（歌津町、本吉町）

宮城県では、ナメタガレイ（ババガレイ）は年越しに食べる魚とされ、正月にはなくてはならない魚の一つである。冬期間が産卵期であり、深みに下った魚を底刺網により、この時期漁獲する。

網地は地麻極細糸を用い、目合い５寸～５寸５分、11掛け、22尋を１反とする。縮結は、浮子方を12尋、沈子方を８尋とする。目通糸は綿糸12号を用い、浮子方は12尋、沈子方は７尋４尺５寸とする。浮子は漆木製で、長さ５寸２分、幅中央８分、両端２分のものを用い、１反に28枚結び付ける。浮子縄は、みご縄、径２分３厘を用い、長さ12尋とし、両端

を１尺８寸づつ延ばしておく。沈子は80～100匁の石を用い、１反に３個づつ結び付ける。ど石は１貫目位の石を用い、両端に１個づつ用いる。沈子綱は麻縄径４分のものを用い、長さ７尋とし、その両端を８寸位延長しておく。下げ麻は、８号綿糸を用い、長さ１尺１寸のもの１反につき28本を用いる。浮標は桐材、径５寸位のもの２本を用い、両端の浮綱に結ぶ。浮縄は、藁縄径６分のものを用い、長さ200～250尋のものを使用する。

漁期は11～３月。漁場は、唐桑から大島沖の水深170尋以内の場所とする。

肩９尺の五大木船に漁師11人乗り組み出漁する。網は11反使用する。漁場に達すると山立法により正確に位置を定め、浮標を投入し帰航する。その後、天候をよみ通常２日後に漁場に向かう。漁場に着くと、天候および潮流等により網の位置を推測し、すばる（網掛具）を引き回し、網を捜索する。すばるが掛かると、網を引き揚げ漁獲物をとりはずす。その後再び投網を行い帰航する。

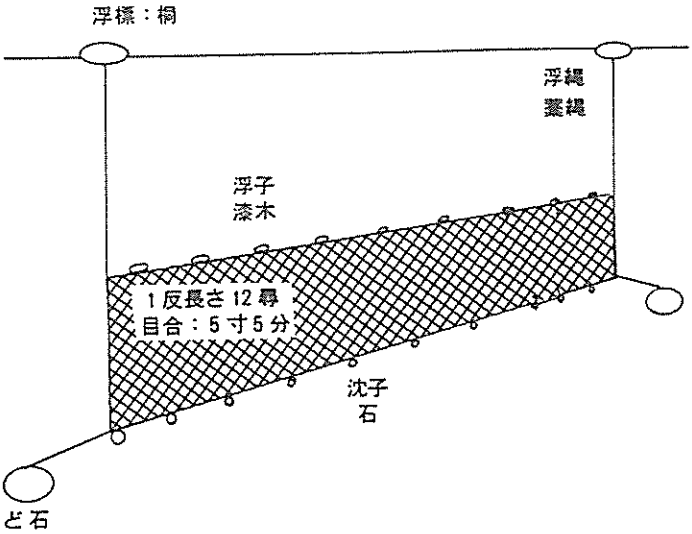
また、本吉地区では小型船を使用しての操業も行われている。

網地は麻を用い、目合い３寸５分、12～13反を１網とする。浮子は漆製で、３尺間隔に１個取りつける。沈子は石を用い、縄を使い３尋に１個取りつける。ど石は３貫の石を用い、網の両端に１個づつ結び付ける。浮縄は藁縄を用いる。浮きは桐を用いる。目標としては竹を取り付ける。また網は手製で１反の製作には10日前後かかる。

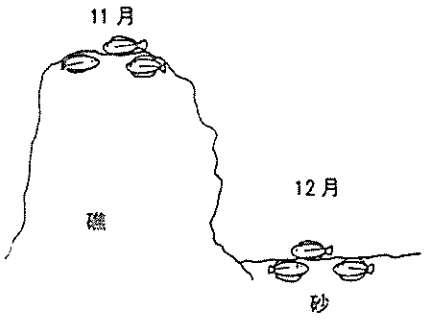
漁期は10月～翌年４月。漁場は11月は根の上、12月になると底質が砂地で根の境の所が良い。

サッパ船に１～２人乗り込み、夕方漁場に向かう。漁場に着くと刺網を行う。各船により漁場が異なる。上げ網は翌日行う。

普通ナメタガレイは、雄雌一緒に漁獲される。多いときでバンジョに２つ、100キロ以上の漁獲があったが、現在は漁獲量が減少している。



ナメタガレイ刺網漁具見取図



ナメタガレイ移動図

6．流　網　漁

①マグロ流網（気仙沼市）(1)

マグロ流網漁の操業形態は、乗合（6～7人）で行うものと、小規模（1～2人）で行う場合の二通りがある。

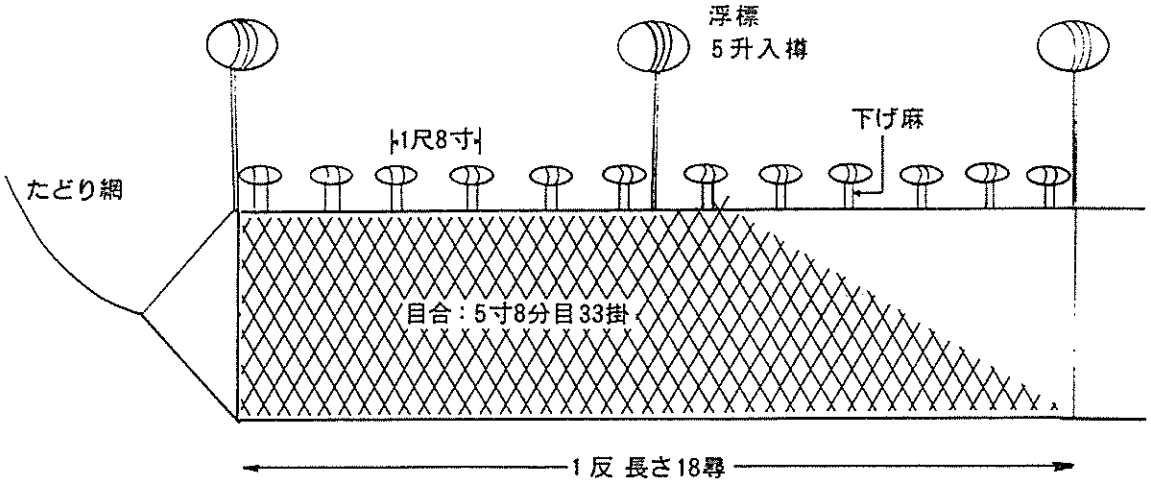
この漁は明治7年頃より始まる。

乗合で行うマグロ流網漁は、沿岸に来る小マグロを漁獲する目的で行われる流網漁である。

網地は、なんきん麻を用い、目合い5寸8分、33掛け、長さ29尋を編み下ろし1反とする。網の重量は1貫700匁である。網縁は、なんきん麻糸（編み糸より太いもの）を用い、4寸目を半目丈浮子方に口編みする。浮子は桐製で、長さ9寸、幅1寸、厚さ1寸のものを用いる。これを浮子綱に1尺8寸間隔で取り付ける。浮子綱は藁縄径4分、長さ18尋半のものを用いる。縮結は浮子方で4割とする。下げ麻は綿糸30号を用い、長さ1尺8寸のものを使用する。これを浮子1枚につき2本取り付ける。たどり綱は藁縄径7分、長さ40尋のもの5本を用いる。これは、網端と漁船とを繋ぐ手綱として用いる。浮標は桐製で、径6寸、長さ1尺2寸位のもの9本を用いる。浮標樽は5升入り樽3個を用いる。

漁期は7～9月。漁場は沖合20浬内外の所とする。

1隻に漁師6～7人乗り組み出漁する。洋上では、透明度が良く、ミズナギドリが付いている場所を捜す。これはマグロが水面近くまで浮上しないため、水色と鳥により魚群の位置を知るためである。漁場が決まると、網25反を繋ぎ合わせて、夕刻潮流を横断するように投網する。夜間は3～4回見回りを行う。魚がかかっている場合には、網を全部揚げて漁獲物を取り上げる。漁獲が少ない場合には数日洋上に漂留し操業することもある。



マグロ流網漁具見取図

②マグロ流網（本吉町）(2)

本吉郡地方で操業された小マグロを捕獲する目的の流網である。規模は小さく漁場も沿岸である。

網地は４枚岩糸を用い、目合い６寸５分、25掛けのもの、22尋を１反とする。縮結は、約５割とし、仕上げで10尋とする。浮子は桐製で、長さ１尺、幅１寸５分、厚さ７分のものを用いる。１反に18枚使用する。浮子綱は藁縄径７分、長さ10尋２尺とし、両端を約１尺５寸づつ延ばしておく。下げ麻は５号綿糸を用い、長さ２尺のもの、１反に36本使用する。これを浮子の両端より吊す。方言「ち」は下げ麻と同じ太さの糸を用い、長さ８寸とする。これを網袖の両端に結び付ける。浮樽には５升入樽１個を用いる。

漁期は４～６月。漁場は大島黒崎沖合とする。

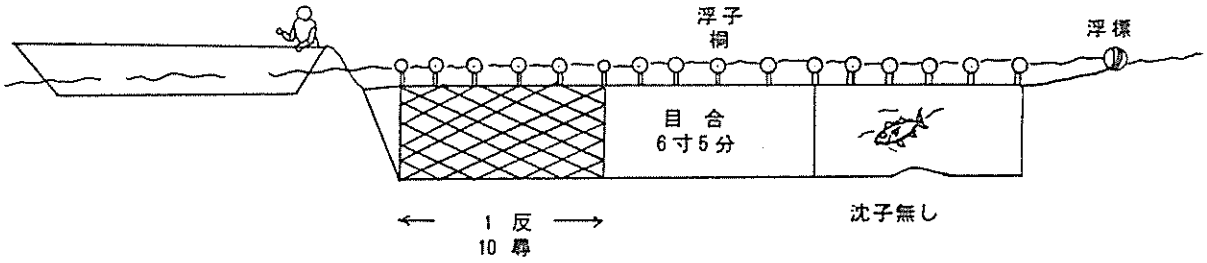
肩３尺５寸～４尺のカッコに漁師１人乗り込み出漁する。漁場につくと潮流を横断するように投網する。網は12～15反を使用する。投網が終了すると、船を風上におき、網よりもあい綱を取って操業する。夜間２～３回見回りを行う。網に魚がかかっていれば網を揚げ、漁獲物を取りはずす。

魚が網に掛かったかどうかは、音によりわかる。１回の音は魚が逃げた時で、２回以上の時は魚が網に掛かった時である。

漁期始めは水温が低いので魚の動きが鈍く、流網に掛かった場合逃げられることが少ない。しかし、水温が高くなるに連れて魚の動きが良くなり、大型のものになると網を破られることもある。

漁獲はメジマグロ（クロマグロの小型のもの）が、１反に５～６本である。

現在はマグロの来遊量も減りこの漁業は行われていない。



マグロ流網操業図

③サンマ流網（気仙沼市）

サンマ流網は、10～11月の夜間に行われる浮流網漁業である。

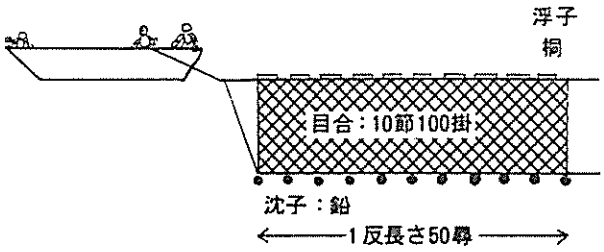
操業は明治41年頃から始められ、カツオ釣りの副業としてかなりの漁獲があったことから、その後盛んに行われるようになった。

網地は２号綿糸を用い、目合い本目10節、100掛けとし、25尋１反半を１束とする。縮結は２割５分とし、仕上で20尋とする。目通糸は５号綿糸、太麻糸を用い、長さ20尋とする。これを浮子方に用いる。浮子は桐製で、長さ８寸、幅１寸５分、厚さ１寸のものを用い、浮子綱に２尺の間隔で１枚を取り付ける。１反に50枚を用いる。浮子綱は２分径しゅろ綱を用い、長さ20尋２尺のもの１本、綿糸15号太麻糸のもの１本とを合わせて用い、浮子を挟む。沈子は鉛製で、長さ７分、中央径５分の円筒型で、１個の重量10匁位のものを用いる。これを沈子綱１尋に１個の割合で取り付ける。１反には20個を用いる。沈子綱は15号綿糸と、20号綿糸太麻糸のものを用いる。これを２本合わせたものを、15号は目通糸とし、20号は沈子用とする。浮標樽は杉製で、径８寸、高さ２寸２分の樽を用いる。これを２反に１個取り付け、網の両端には１斗樽を用いる。もあい綱は５分径しゅろ綱、長さ20尋のもの１本を用いる。この綱の一端は網に、もう片方は船に繋ぐ。

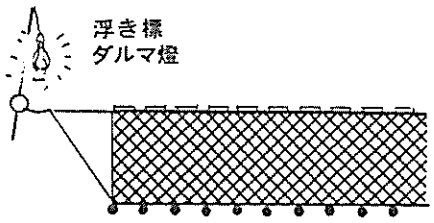
漁期は、10～11月。漁場は金華山から10～30浬の沖合である。

肩１丈１尺の四板船に漁師16人乗り組み出漁する。夕方漁場に着くと、潮流を横断するように投網する。投網が終わると網の１端を船に繋ぎ留め、網と共に流れる。揚網は２回行う。１回目は夜間に、２回目は翌朝行う。又浮標を付けての固定式浮刺網も行う。これは10反を一網とし、浮標にはダルマ燈を取り付け、夜間でも見える様にしたものである。漁獲が多い時にはサンマが網いっぱいに掛かり、その重さで網が底に行くこともある。このため揚網作業には、朝までかかることもある。漁獲したサンマは網からはずすが、方法は網を船の網掛の両端に掛け、竹の棒で頭のでている方を叩くやり方で行う。こうすると網からサンマが簡単にはずれる。サンマは棒で叩くため、頭のなくなるものもあり、水揚げ後は頭のあるものとないものとを分けて売る。

サンマ流網漁は、昭和の初め集魚灯を利用する棒受網が開始されたことから下火となり終漁をむかえた。



サンマ流網漁具見取図１



サンマ流網漁具見取図２

④マス流網（本吉町）

マス流網はサクラマス、マスノスケを対象とした浮流網漁業である。

マス漁は、山桜が咲くころが盛漁期となる。

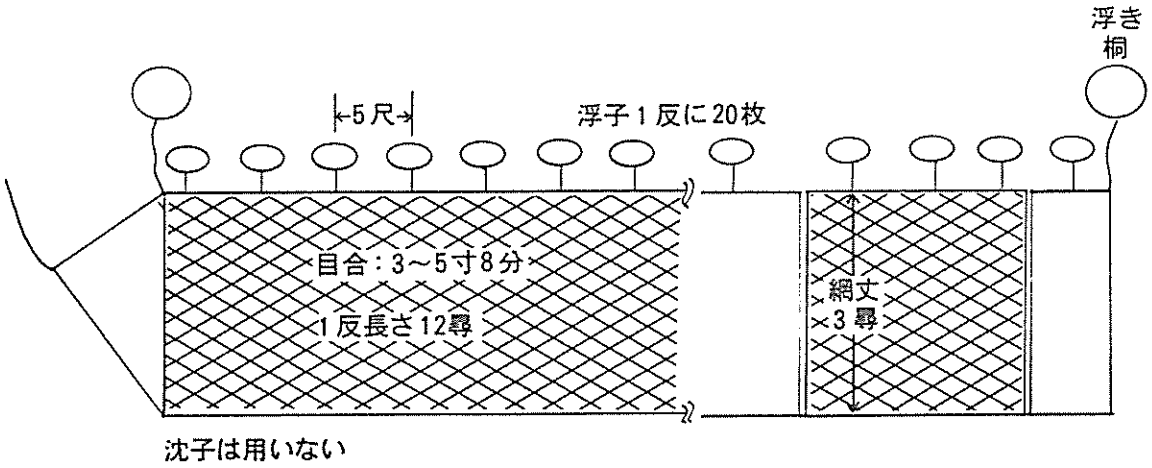
網地は麻縄を用い、目合い３寸～５寸８分のものを使用し、魚種、魚の大きさにより使い分ける。１反の長さは、12尋、網丈３尋とする。浮子は桐製で、大きさ１尺２寸のものを使用する。これを５尺間隔で１枚取り付け、１反に20枚使用する。浮子綱は、網より大きい麻綱を用い、網から３尺離して結び付ける。沈子は使用しない。浮きは桐を用いる。これを網２～３反に１個取り付ける。網は１反作るのに10～20日かかる。又カッツ（網を染める染料）を使用し、染め上げる作業も行う。麻縄は腐りやすいため、操業後は陸揚げし日中網干しを行う。網は始め麻縄、その後綿糸、ナイロンと変わっていった。

漁期は３～６月。漁場は、早い時期は地先沖合、遅くなるにつれて岸沿いとなる。

漁は、夜間から日の出前まで行う。漁船に１～２人乗り込み夕刻漁場に着くように出漁する。漁場に着くと操業位置を決める。次に櫓を漕ぎながら網を一繋ぎとして、直線になるように投網する。最後の網が入れ終わると、手綱を船に結び、潮にまかせて操業する。網は15～30反使用する。魚がかかった場合は音と船に繋いである手綱が下がることからわかる。この場合、網を引き揚げて漁獲物を回収する。沈子がない漁法であり、魚は網に刺さるというより、からんだものを漁獲する漁具である。

豊漁のときは150貫前後の水揚げがあった。１尾の重量は600匁前後であった。

漁具は改良され次第に良くなっていったものの、漁獲量が減少したことから漁は行われなくなった。



マス流網漁具見取図

⑤イワシ流網（本吉町）

イワシ流網は、夜間行われる浮流網漁業である。この漁は、網に刺さったイワシを漁獲する目的で行われる、小規模の流網漁業である。

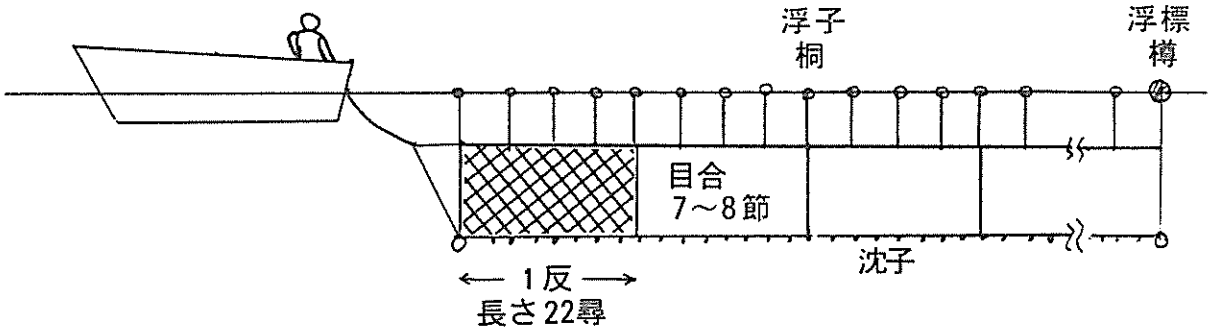
網地は綿糸を用い、目合い７～８節、１反の長さ22尋とする。浮子は桐製である。これを１反に１５枚使用する。浮きは、樽を使用する。

漁期は４～６月。漁場は地先沿岸とする。

夜間操業である。サッパに１～２人乗り込み出漁する。漁場に着くと、船をゆっくり走らせながら、投網を行う。最後の網が入れ終わると、手綱を取って船に結び、船と網は一緒に流れるようにする。イワシが網に掛かると、網を船に引き揚げ帰航する。イワシを網からはずす作業は、陸で行う。

漁獲が多いときは１トン位の水揚げがあった。この時は、魚が掛かりすぎて網が棒のようになり、海底の方に下がっているので、揚げるのには大変時間と労力がかかった。また船に多く積み込んだため、帰航する途中転覆することもあった。水揚げされたイワシはカスや肥料として使用した。

この漁は戦前まで行われていた。



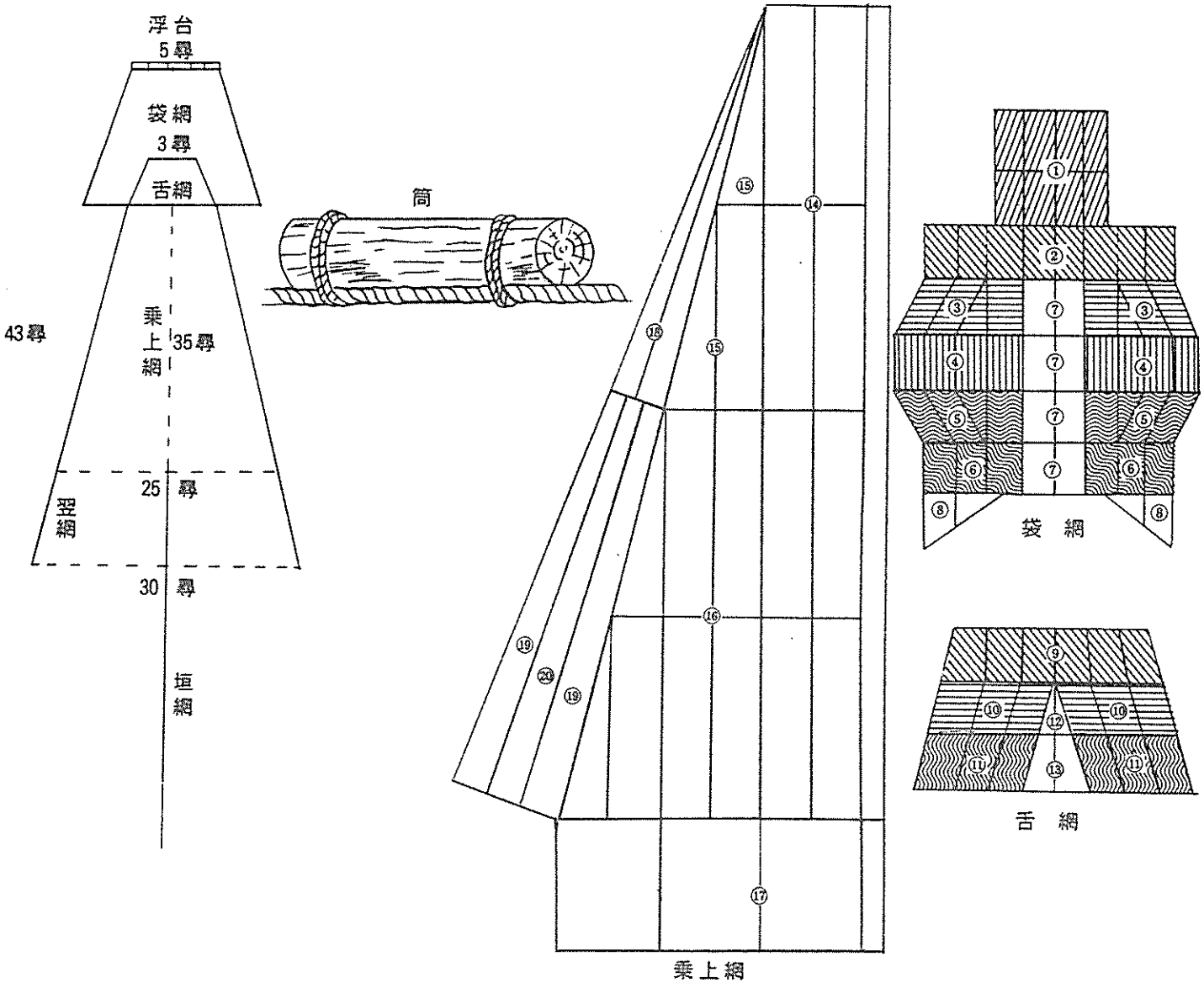
イワシ流網操業図

7．定　置　網

①桃生式器械網（志津川町）

桃生式器械網は、別名サケ器械網とも呼ばれサケを捕獲する目的で、秋期から冬季にわたり敷設する。また周年敷設するものもある。これはスズキ、マス、コダイ、イカ、タナゴ等を捕獲する。

網は、袋網、舌網、乗り上り網、縁網、垣網からなる。網は図に基づき番号で説明する。袋網部は(1)～(8)網からなる。(1)網は、5号綿糸を用い、目合い本目8節、100掛け、5尋切りのもの縦目に8反使用する。(2)網は、6号綿糸を用い、目合い本目6節、100掛け、5尋切りのもの縦目に8反使用する。(3)網は、6号綿糸を用い、目合い本目6節、100掛け、5尋切りのもの縦目に7反使用する。この内1反を三角網2枚に切断する。(4)網は6号綿糸を用い、目合い本目6節、100掛け、5尋切りのもの縦目に8反使用する。(5)網は、6号綿糸を用い、目合い本目6節、100掛け、5尋切りのもの縦目に7反使用する。この内1反を三角網2枚に切り用いる。(6)網は6号網糸を用い、目合い本目6節、100掛け、5尋切りのもの縦目に6反使用する。(7)網は5号綿糸を用い、目合い本目5節、100掛け、5尋切りのもの縦目に8反使用する。(8)網は、6号綿糸を用い、目合い本目6節、100掛け、5尋切りのもの縦目に6反使用する。舌網は(9)～(13)網を使用する。(9)網は6号綿糸を用い、目合い本目6節、100掛け、5尋切りのもの縦目に6反使用する。(10)網は、6号綿糸を用い、目合い本目6節、100掛け、5尋切りのもの縦目に6反使用する。(11)網は、6号綿糸を用い、目合い本目6節、100掛け、5尋切りのもの縦目に6反使用する。(12)網は、6号綿糸を用い、目合い本目5節、100掛け、5尋切りのもの縦目に6反使用する。この内、1反を2枚の三角網として用いる。(13)網は、6号綿糸を用い、目合い本目5節、100掛け、5尋切りのもの縦目に6反使用する。乗り上り網は、(14)～(20)網を使用する。(14)網は、みご縄を用い、目合い本目4寸、25掛け、25尋切りのもの縦目に4反使用する。(15)網は、みご縄を用い、目合い本目4寸、25掛け、25尋切りのもの縦目に2反使用する。この内、1反は2枚の三角網として用いる。(16)網は、みご縄を用い、目合い本目6寸、23掛け、20尋切りのもの縦目に10反使用する。この内、1反は2枚の三角網として用いる。(17)網は、みご縄を用い、目合い本目8寸、25掛け、12尋切りのもの縦目に6反使用する。これを羽袖という。以上、(14)～(17)網は左右両側対象となる。(18)網は、みご縄を用い、目合い本目6寸、15掛け、20尋切りのもの縦目に使用する。これを2枚の三角網として用いる。(19)網は、みご縄を用い、目合い本目8寸、12掛け、20尋切りのもの縦目に2反使用する。(20)網は、みご縄を用い、目合い本目1尺、8掛けより編み初め、5尺毎に1目を増していき、20尋で編み止めしたも



桃生式器械網漁具見取図

のを使用する。縁網は、袋網部と乗り上り部からなる。袋網部は6号綿糸を用い、目合い本目6節、100掛け、1尺5寸切りのもの25反を使用する。乗り上り部は、みご太縄を用い、目合い本目5寸、5掛け、50尋切りのもの左右1反づつ使用する。垣網は、小荒手を用い、目合い本目5尺、25掛け、長さ200尋とし編み下ろしを150尋に縮結したものを使用する。この一端を両羽袖間の渡し綱の中央に結び付け、他の一端は陸上の岩石等に取り付ける。網袖には5～6尺位に、1貫匁位の石を結び付ける。側綱は藁縄径1寸8分のものを用い、身網周辺および垣網に取り付ける。筒は杉材を用い、長さ5尺、径8寸のものを、袋網の周辺、乗り上り網、垣網に、合計62本を取り付ける。浮子は桐製で、長さ8寸、幅2寸5分、厚さ1寸位のものを、舌網の縁網部に1間に3枚の割合で取り付け、合計44枚を使用する。浮き基（方言かもい）は杉材を用い、径5寸の丸太または角材の長さ5尋の間に、1尺5寸位の横木6本を入れ梯子型を作る。この杉材の上に長さ1尺6寸、径1寸5分位の先端が又木になるもの5～6本を立て、これに竹を渡して袋網の縁網を掛けておく。碇は、土俵を用い、俵に小石を入れたものを2俵合わせて1組として使用する。重量は50～60貫とする。方言「しかり」は、柴木を束ね、藁縄にて編み円型とした径4寸位のものに、石80貫を入れ、浮き基の背後の碇として用いる。碇綱は藁縄径1寸8分位のものを用い、筒1個に1本づつ、壷浮きには3本を用いる。この長さは水深の3倍とする。力綱は袋網と乗り上り網の間に取り付け、径2分のマニラ綱を用い、長さ35尋のものを使用する。引き上げ綱は、力綱に取り付けて網の引き上げに用いるもので、径2分のマニラ綱を用い、長さ15尋とし4本を使用する。張り綱は、舌網の両端を浮き基の方に引っ張り魚の入ってくる細口を作るもので、径2分のマニラ綱を用い、長さ15尋とし2本を使用する。渡し綱は、藁縄径1寸5分のものを用い、長さ25尋とする。これを両羽袖の内側を結び付けるのに使用する。

漁期は7～12月。漁場は、地先沿岸である。

建込み方法は、次のとおり行う。まず、陸上における不動目標の、交斜方位法により位置を定め碇を投じ、この碇綱に浮き基を繋ぐ。次に浮き基の左右の碇を投じ、碇綱を張って浮き基の位置を定める。その後、陸上で結合してある側綱および筒を浮き基に繋ぐ。次に四方の土俵碇を投じて外形を整える。最後に網を取り付けるが、左右の位置の移動は陸上での指示に従って行う。網の取付けは、他の建網類と同じで垣網の先に側綱を張り、沖の一端より網を取り付ける方法で行う。

小舟に漁師3～4人乗り込み出漁する。口前に着くと、引き立て綱により力綱を挙げて、袋網の方に向かい均一に網を繰越していく。魚捕り部に達すると、タモ網により魚をすくい取る。

②筒　状　網（志津川町）

筒状網は、主としてカツオ釣り用の餌イワシを捕獲する目的で、湾内または湾口付近に敷設する。使用が簡単で、大半は婦女老幼でも作業が行える。また魚体を傷つけることも少なく、生き餌の供給に適している。

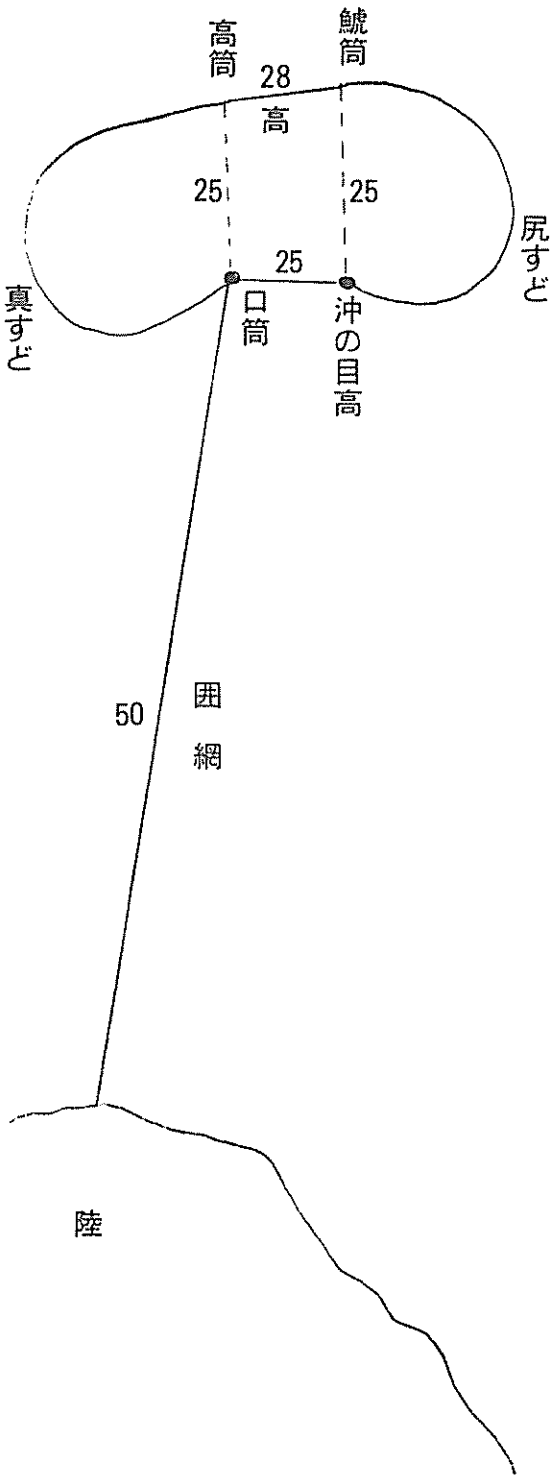
構造は、マグロ大網とほぼ同じであるが、規模は小さく、口前25間、周囲162間、円50間である。構造は口筒、沖ノ見筒、高筒、鯱筒の４か筒を基礎とする。また口筒より高筒までを真すび、高筒より鯱筒までを高、鯱筒より沖ノ見筒までを尻すびという。身網部は図に基づき番号で説明する。(1)網は、小荒手縄、織り網を用い、長さ８間、幅４尺５寸のもの８反を使用する。(2)網は、小荒手縄を用い、長さ３間のもの２反を、(1)網の中央４枚へ横縫する。(3)網は、にこめ縄を用い、目合い４寸、40掛け、８間切りのもの８反を横に縫合し、中央４反を織り網に縫合する。(4)網は、にこめ縄を用い、編み始め40掛け１目止めのもの４反を、(1)網および(3)網に縫合する。(5)網は、にこめ縄を用い、目合い６寸、40掛け、６間切りのもの７反を使用する。(6)網は、にこめ縄を用い、目合い１寸、27掛け、10間切りのもの５反を使用する。(7)網は、にこめ縄を用い、目合い１尺５寸、27掛け、10間切りのもの８反を使用する。(8)網は、にこめ縄を用い、目合い１尺５寸、27掛け、10間切りのもの９反を使用する。(9)網は、にこめ縄を用い、目合い１尺５寸、27掛け、10間切りのもの16反を使用する。(10)網は、にこめ縄を用い、目合い１尺５寸、27掛け、10間切りのもの２反横縫したものを、中央２反と縦縫する。(11)網は、引き立て網といい、目合い１尺５寸、27掛けのもの３反横縫したものを、縦縫し縦目に用いる。(12)網は、側目網で、織り網部は目合い４寸、５掛け、他は添え縫する。身網部と同目、同長とする。以上の各網を縫合し、(1)網から(5)網は５割、他は３割の縮結とし、桁縄に取り付ける。囲い網には、にこめ縄を用い、目合い２尺５寸、20掛け、20間切りのもの１反および、にこめ縄、目合い２尺５寸、15掛け、30間切りのもの１反を使用する。筒は四筒（沖ノ目、口、高、鯱）に杉材を用い、長さ８尺、周り６～７尺のものを使用する。真すび筒は、杉材を用い、長さ５尺、周り５尺のもの24枚を使用する。この内、４枚は組み筒とし、真すびの中央魚捕り部に用いる。高および尻すびは杉材で、長さ５尺、周り４尺内外のもの36枚を使用する。内、尻すびの中央８枚は組筒とする。囲い筒は、杉材を用い、長さ４～５尺、周り３尺内外のもの10枚を使用する。柴木は、真すび中央には、周り３尺、両端周り１尺５寸、長さ20間のもの、尻すびには中央周り２尺、両端周り１尺、長さ20間のもの桁綱と合わせて用いる。碇は四筒に用いる。柴を束ねたものを縁とし藁縄で編んだ直径８尺のものに、石10個を入れて用いる。並碇は、碇と同じ作りで直径６尺のものに、石５個を入れたもの38枚を用いる。四筒碇綱は、中央荒手縄、60本撚合わせのものを用い、長さ26尋のもの８本を

使用する。囲鼻筒碇綱は、中央荒手縄、42本撚り合わせたものを用い、長さ26尋のものを2本使用する。真すび碇綱は中央荒手縄、15本撚り合わせたものを用い、長さ35尋のもの45本を使用する。尻すび碇綱は、中央荒手縄、12本撚り合わせたものを用い、長さ35尋のもの40本を使用する。囲碇綱は、中央荒手縄、12本撚り合わせたものを用い、長さ28尋のもの6本を使用する。外囲い網の袖には5～6尺おきに、1貫匁位の石1個づつを取り付ける。方言「しきり」綱は筒合船に積んでおき、尻筒にもあいを取って適時操り延べ、網の繰越を適度にするために用いる。しきり綱は、中荒手、12本撚合わせのものを用い、長さ40尋のもの2本を用いる。

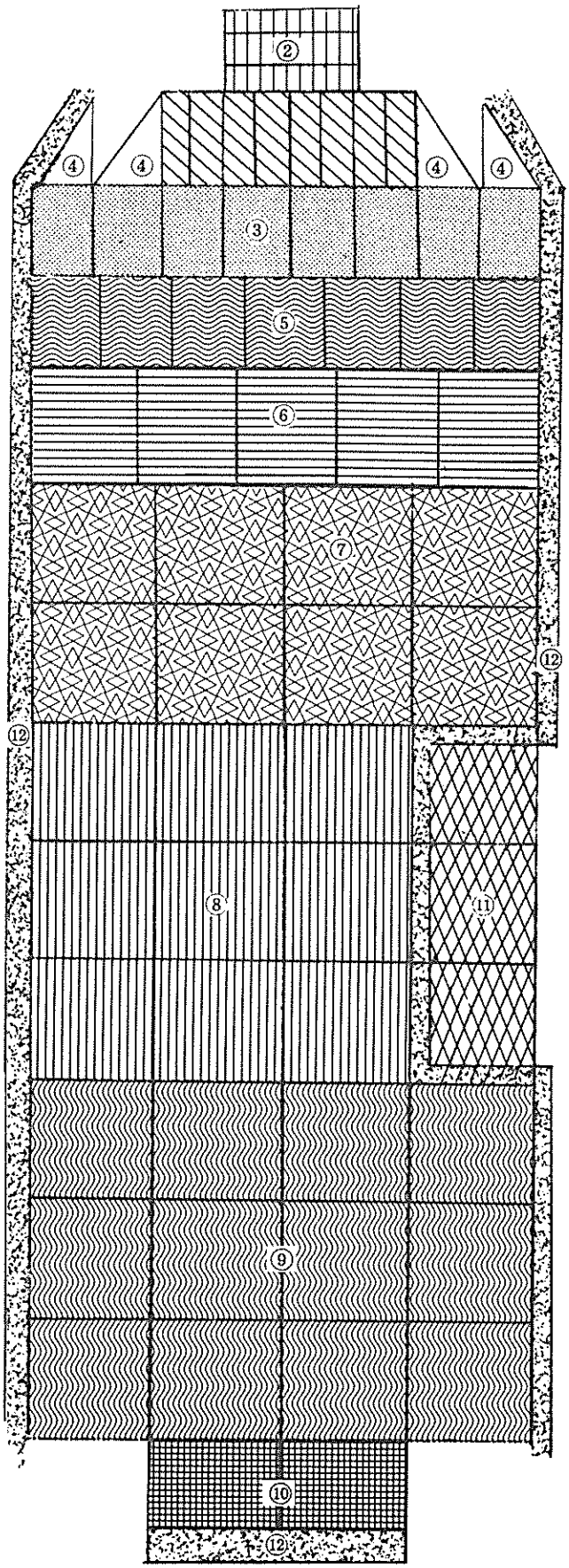
漁期は6～10月。漁場は、地先沿岸である。

設置には、筒船2隻を使用する。2隻はもあいをとり、つながった状態で作業を行う。まず四方に碇を入れて船の位置を保つ。次に2隻の間に碇を置き、これに碇綱および筒を付けて、水平になるように海底に沈める。この方法により、まず口筒、沖ノ目筒、高筒、鯱筒の順序に投入する。次に桁綱に、筒および柴木を縛って2部に組み立てる。これを四筒に渡して、四方に碇を投じる。この碇筒を用い、筒を締めて形を整える。次に四筒の投下と同じ方法により鼻筒を入れる。これと陸上の岩石との間に桁縄を張り、碇を投じて筒を支える。網は囲いのように陸上で縫合わせる。この網を曳きよせて、準備しておいた標識により四筒および両すびの中央を結ぶ。次に四角を結ぶ囲い網は鼻筒より取り付ける。敷設した網は、2日間位浮いているので、魚群が多い時には石を入れて沈める。

小舟に1～2人に乗り込み口前にて監視を行う。網に魚群が入ったのを確認すると、曳綱により引き立てて網を揚げ、口前を張り切る。次に標旗を揚げるか、高声で陸上に知らせる。この知らせにより、漁師19名（大半が婦女老幼である）が分かれて、筒合船に13名、高船、沖ノ目船に各3名づつ乗り込み、尻すびの所に行く。尻すびに着くと、筒合船を中央とし、高船は左に、沖ノ目船は右に位置する。各船は、もあいを取り一緒に網を操り揚げ、魚群を織り網中に追い入れて、たもですくい取る。漁獲したイワシは、餌籠に蓄えカツオ釣りの餌とする。



筒伏網漁具見取図



身網仕立

8．すくい網漁

①すくい網（唐桑町）

唐桑地区でのすくい網漁は、８月～翌年１月まではイワシ(カタクチイワシ)、１～３月はヨド（イカナゴ）を対象として操業する。

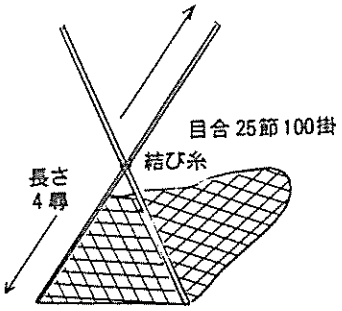
網地は上州麻を用い、目合い本目25節、100掛け、一網の長さ６尋１尺とする。１尋の重量は約20匁とする。これを３反横縫し、この両側に同じ５尋切りの網、２反づつを横縫する。魚捕りの中央３反の内、１尋１尺は両側の２反に縦目に横縫する。縁は、口前７反を、網地糸より太い糸で、１目丈縁編みする。縁網は網地糸より太い糸を用い、目合い８節、５掛け、編み下ろしで長さ７尋のもの、口前を除き外周の縁に縫合する。柄木は、元径２寸５分、先径１寸、長さ４尋位の木の棒を２本用いる。柄木を網に結び付けるには、両側に３個づつ糸輪を作っておき、出漁前に柄木をこれに通して先端を結んでおく。柄木はたためる用になっており使用しない時は、２本合わせて船縁に寄せておく。

漁場は地先沿岸とする。

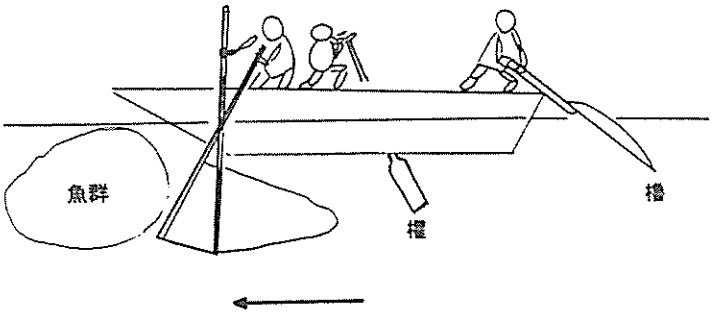
サッパ船に、漁師２人乗り組み出漁する。漁場につくとまず魚群を探がす。
魚群が見つかると１人は櫓を漕ぎ、１人は柄木を船の左舷に用意し、ヨドまたはイワシの群をすばやく抄い捕る。その後柄木を舳より外し、船腹に回してタモにより船上に漁獲物を抄い捕る。魚群はヨド、イワシとも鳥まわり（カモメの動き）でわかる。またイドコ（水面近くの魚群）があると、水面も赤黒く見えるのでわかる。イドコのでき方は、ヨドの場合は鳥、イワシの場合はソオダカツオに追われて出来る。

漁は多い時で竹籠で30籠、重量で５貫の漁獲があった。

現在は機械化が進み漁船、装備共大型化となっている。



すくい網漁具見取図



すくい網操業図

9．延　縄　漁

①サ メ 延 縄（気仙沼市）

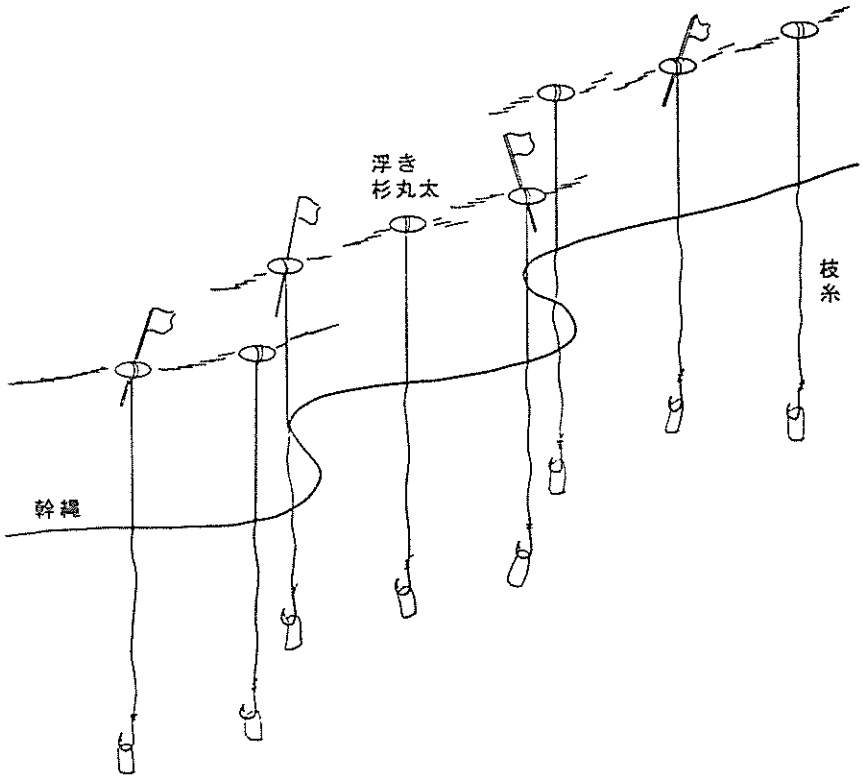
サメ延縄はモウカザメ（ネズミザメ）を対象とする浮延縄である。モウカは3～4月に金華山沖を北上し、11月には南下して宮城県沖合から見えなくなる。この北上時と南下時、岩手県沖から宮城県沖を追いかけながら操業するのが、この漁である。

幹縄は岩手麻、径2分5厘を用い、長さ100尋とする。枝糸は3部分よりなる。1糸は、幹縄に接合する部分に6枚麻を用い、長さ85～180尋とする。2糸は6枚麻を用い、長さ4尋のもの2本を、麻糸で間隔がないように結び付けたものを用いる。3糸は亜鉛鍍金、鐵線6分のもの4本を、右撚に撚り合わせたもの長さ4尋として用いる。この一端に釣り針を付ける。釣針は鐵製で、1個の重量は8匁位とする。浮標樽は、根緒岩手麻を用い、長さ5尺とする。この一端をつぼとし、幹縄の枝糸を結び付ける部分に結んでおく。そしてつぼには、浮標綱を取付ける。浮標は杉の丸太を用い、径4寸、長さ4尺のもの1籠に5本用いる。この丸材の一端に穴を開け、これに綱を通し折り返し、3寸のつぼを作る。これは投縄の際、浮標綱の一端を結び付けるために使用する。浮標竹は、長さ1丈、元径1寸、先径3分位のもの25本を使用する。この先の先端に笹もしくは1尺5寸位の白布を取り付け目標とする。この竹は浮標1個おきに取り付ける。

漁期は4～11月。漁場は、金華山東方30浬沖合より岩手県沖合いまでの場所である。

本船は、18トン型の木造帆船を使用する。作業船は肩5尺位の傳馬形船2隻を使用し、各船に漁師4人づつ乗り組み出漁する。延縄を各船に5籠づつ積み込み、合計10籠を使用する。漁場につくと、始め浮標に延縄の一端を結び付け、浮標竹を直立させる。その後、潮流を横断しつつ投縄する。釣針には餌としてイカまたはカレイ等の切り身を掛ける。餌は釣針から取れないように、細糸により結び付ける。魚が釣針に掛かると、浮標竹が直立するか、斜立する。この時縄をこの付近より操揚げ、漁獲物を捕獲する。本船は、作業船の付近にいてこれを監視する。

戦前まで行なわれていたこの漁業も、漁獲量の減少により、現在は行われていない。



サメ延縄漁具見取図

②マグロ延縄漁（気仙沼市）

この漁は、メヌケ延縄漁が終漁をむかえると、同じ船を使い乗合い経営で、春～秋迄操業される。マグロ延縄漁で漁獲されるマグロはクロマグロである。クロマグロは索餌回遊のため５月頃から金華山沖に見え始め、その後北上する。この移動を追って、マグロ延縄漁が行われる。また、この漁ではメカジキも漁獲される。

幹縄は、綿糸10匁のものを用い、長さ2,000尋とする。枝縄は、綿糸40号を用い、１本の長さ６～７尋とする。これを幹縄に25尋につき１本の間隔で結び付ける。釣針は、カジキ針３寸８分を用い、１縄に80～100本を使用する。浮子は桐製で枝縄３本に１個の割合で取付ける。浮子綱はマニラ綱を使用する。

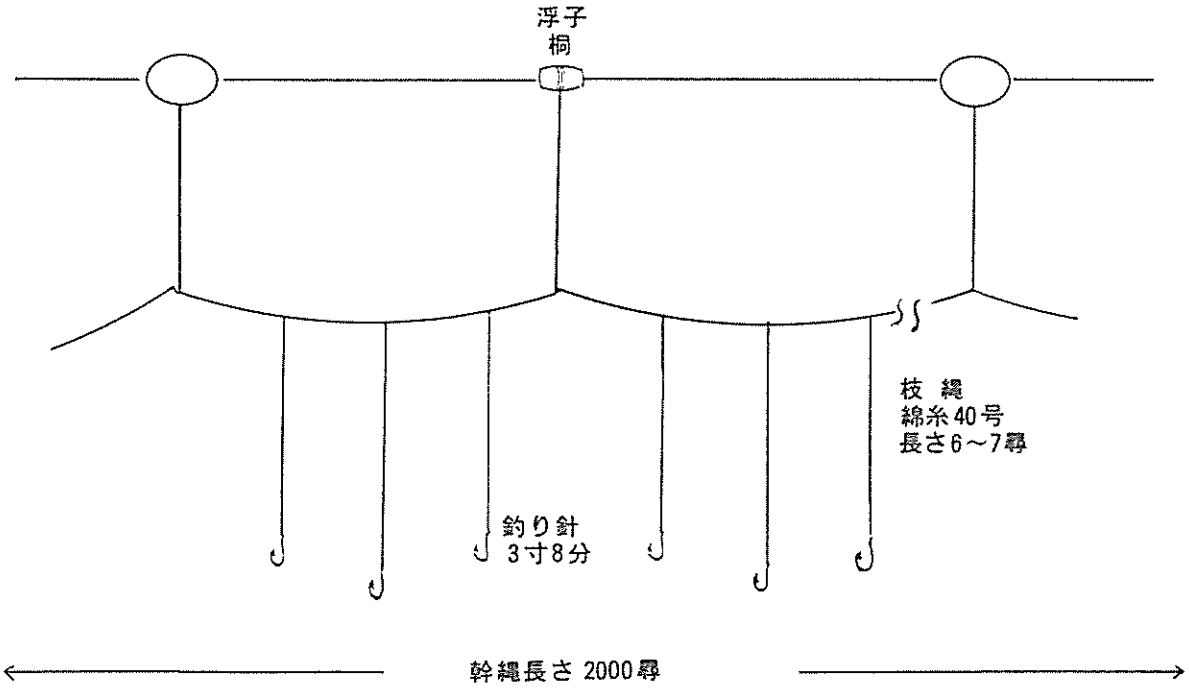
漁期は５～11月。漁場は、始め金華山沖から北上し岩手県沖までとし、最後に又金華山沖に戻る。

漁船に12～13人乗り組み出漁する。操業位置により出漁時刻はちがってくるが、約４時間で漁場に到着する。夜間操業である。餌はイカを使用する。漁場に着くとまずイカ釣りを行い、餌の調達を行う。イカが無い場合はサバも使用する。餌の調達が終わると、船頭は水色を見て漁場を決定する。その後浮標から投入し、餌を掛けながら投縄を行う。投縄

作業は１時間位である。縄待ち時間は、約４時間であり、その後揚縄作業を行い漁獲物を取り揚げる。また朝にもう１度投縄を行い、この作業を繰り返す。

１回の漁ではマグロが１～２本、メカジキが４～５本、重量70～80貫の漁獲があった。

現在この地区ではマグロ延縄漁は行われていない。



マグロ延縄漁具見取図

③メヌケ延縄（気仙沼市）

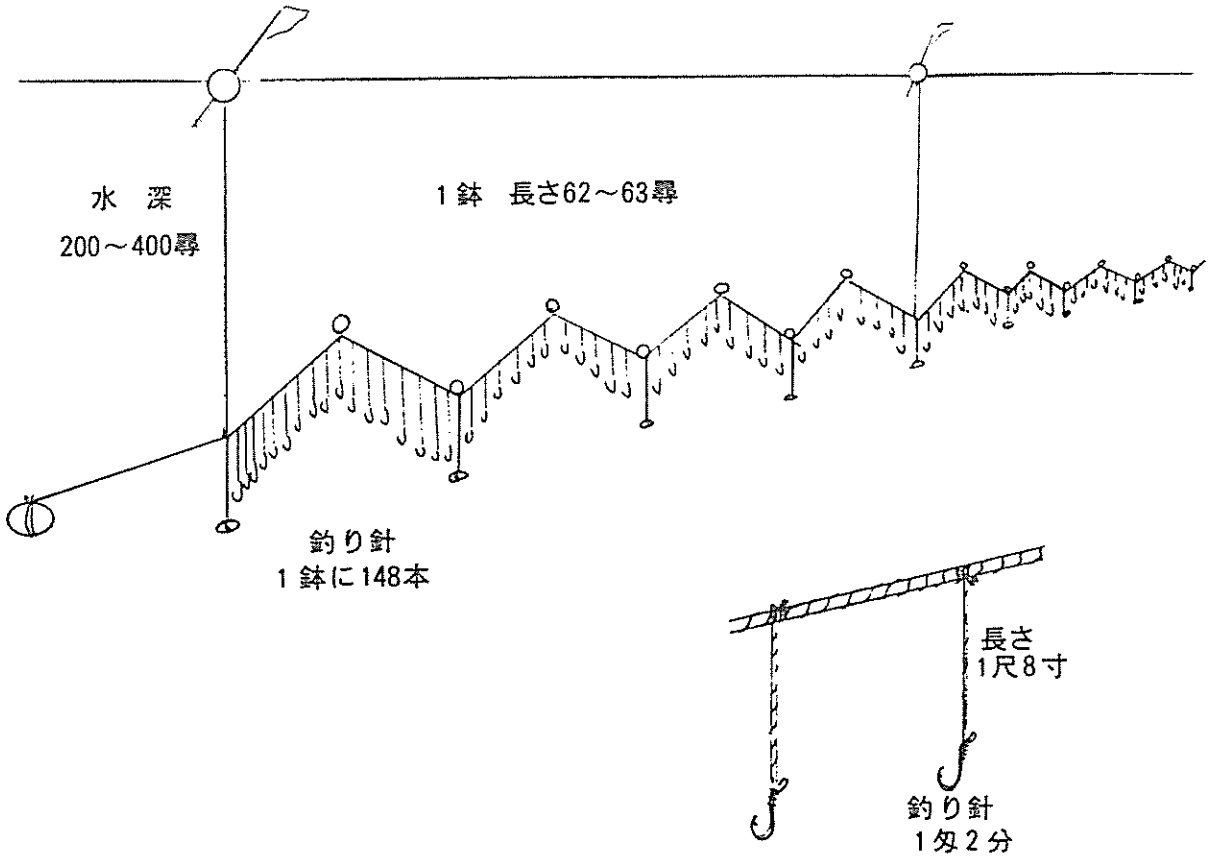
メヌケ延縄漁はマメヌケ（サンコウメヌケ）、コウジンメヌケ（オオサガ）、バラメヌケ等、水深の深い場所に棲息しているメヌケを対象とした底延縄である。

この漁は、船主を中心とした乗合経営である。船主はメヌケ漁が近付くと、漁具の作成作業を目的として、麻、針金等買っておいたものを乗り組員に渡す。乗組員は渡されたものを各自家に持ち帰り、麻を編んだり釣り針を作る作業を行う。１縄作るのに約１週間を要する。縄は１人、５縄用意する。縄の準備ができると次に投縄の順番を決める。漁場では縄の順番が大切で、まず船頭、右櫓等のようにしだいに下になっていくにしたがい、投縄の順位が遅れていく。それは水揚げした金額により、配当（分配）の基準となるからである。配当金は船じまい（終漁）の時に船主から一括してもらう。

幹縄は麻２匁５分糸を用い、１鉢の長さ62～63尋とする。枝糸は麻５分糸を用い、１本

の長さ１尺８寸とする。１鉢に148本を使用する。釣針は鐵１匁２分の針金製である。１鉢に付、針金55匁位を用いる。浮子は漆木製で、長さ７寸、周囲６寸のものを用い、１鉢に16枚を取り付ける。浮子付け糸は、麻１匁糸を用い、１本の長さ８寸とする。浮子付け糸は麻１匁糸を用い、１本の長さ２尋とし１鉢につき３本を使用する。始め口浮子は、漆木製で、厚さ２分５厘、長さ３寸、高さ２寸のものを用い、１鉢に付２枚取り付ける。縄籠は竹製で、平籠の直径は２尺とする。本浮縄は麻５匁糸を用い、長さ380尋のもの１本を使用する。末浮縄は麻４匁糸を用い、長さ450尋のもの１本を使用する。並浮縄は、麻３匁糸を用い、長さ400尋のもの16本を使用する。浮縄は麻３匁糸を用い、長さ200尋のもの16本を使用する。ホテ竹は、周囲４寸、長さ４尋のもの15本を用いる。浮標は桐製で、回り７寸、長さ２尺５寸のものを使用する。これを５本束ねて１個とし、ホテ竹１本に付き１個用いる。沈子は石を用い、長さ270匁のものを、３匁糸を用いて結び付け、１鉢につき３個を用いる。繋ぎ口沈子は、重さ270匁の石を用いる。これを３匁糸を使い、各縄の繋ぎ目の浮縄の付いてないところに用いる。釣り石は、重さ700匁～１貫200匁の石を用い、浮縄１本に付１個取付ける。

漁期は、12～５月。漁場は、水深200～400尋の底質な砂泥の場所が良く、大島沖から時期により金華山沖まで追って行く。



メヌケ延縄漁具見取図

肩幅９尺７寸の漁船に、15～16人乗り組み夜間（11～12時頃）出漁する。漁場には早朝着くようにし、着くまでの間に用意しておいたイカを餌とし、針に掛ける作業を行う。漁場に着くと水深を探り、潮向き、流れ（速さ）を計り、位置を決定する。次に浮き標より順に縄を下ろして行く。位置を知るため、縄３～４鉢に浮き標１本を立てる。全部で60枚前後の縄を使用する。投縄時間は約１時間である。その後約２時間の縄待ちをし、揚縄にかかる。この作業は、水深が深いため全員休みなしで、５時間前後を要する。又縄をつむ（投縄）のは難しく、この作業を行うのにはかなりの経験が必要である。

漁獲は多い時で2,000～3,000本の水揚げがあった。

メヌケ漁に限らず、水深の深い場所での漁では、海底に生えているガバクサ（腔腸または棘皮動物類）があることが重要である。ガバクサは長さ１～３尺で、種類も違い、刺網、延縄等するとよく掛かってきたことから、かなりの量があった。しかし現在は、ほとんど見られなくなっている。

現在この地区で、メヌケ延縄漁は行われていない。

④ドンコ縄（唐桑町）

ドンコ（エゾイソアイナメ）は、ハモ（マアナゴ）釣りの外道として釣られ、周年漁獲出来る魚である。特に、冬はきも（肝臓）が大きく味が良いことから、鍋物等に使用され、値段も高い。

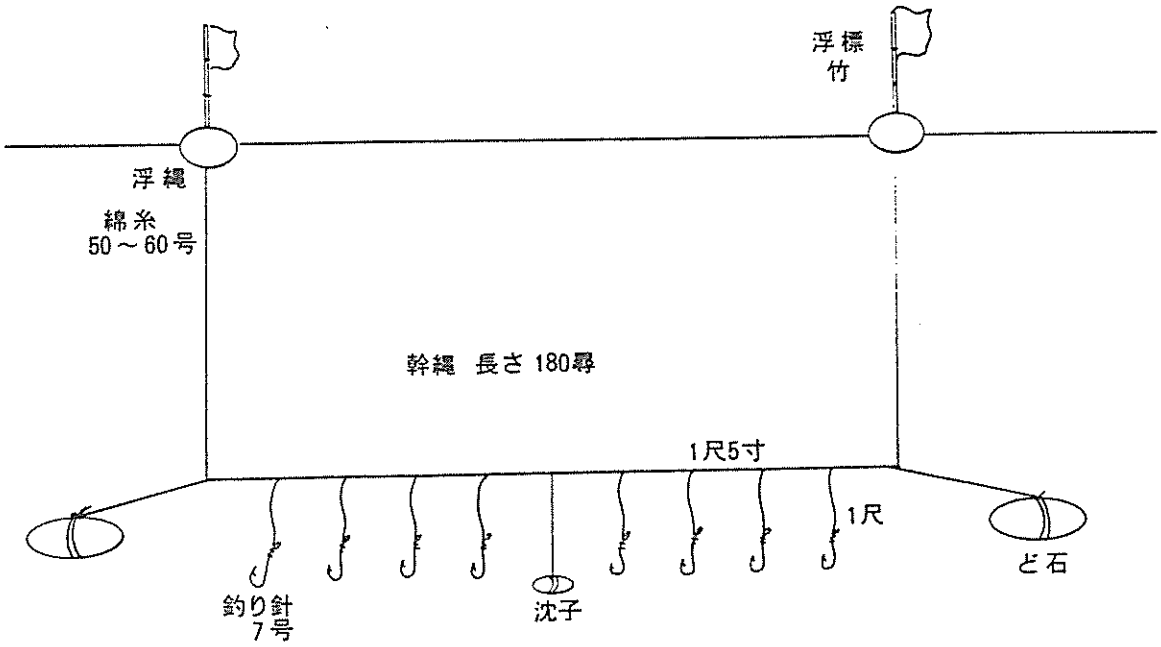
ドンコ縄は、夜行性の習性を考え、夜間行なう底延縄である。

幹縄は綿糸40号を用い、長さ180尋とする。枝糸は、長さ１尺のものを用い、幹縄に１尺５寸間隔で結び付ける。１縄で100本を使用する。釣り針は、７号針を用いる。幹縄の中間には、石を１個結び付け重りとする。ど石は両端に１個づつ取り付ける。浮き縄は、綿糸50～60号を使用する。浮きは、桐を用いる。浮き標は、竹を用いる。

漁期は、10月～翌年１月。漁場は、岩礁と砂地の境である。

出漁前に、イワシを大きさにより２～３個に切り、家族全員で餌掛けを行う。陸作業が終わると、漁船に２～３人乗り組み夕方出漁し、日の入りにかけて投縄を行う。縄は１隻で14～20鉢使用する。投縄終了後１時間前後縄待ちをし、揚げ縄を行う。投縄作業は岩礁域から外れないように潮の流れ等を見るコツが必要である。それは、砂地の場所に入ると、漁獲が少ないためである。縄は帰ってから整理し翌日の出漁準備をする。

漁獲は多い時でバンジョ（竹で編んだ大型の籠）で２つ、重量で約30貫もの水揚げがあった。普段でもドンコは一定量の漁獲がある。



ドンコ縄漁具見取図

10．底曳網漁（貝類）

①アカガイ曳き（気仙沼市）

アカガイは、沿岸の砂泥底に生息する２枚貝である。血液中にヘモグロビンを含み、血や肉が赤みを帯びている。また、味が良く寿司ネタや刺身等でたべるが、特にこの地区で取れるアカガイは味も良いとされ、値段も高かった。

この漁は、アカガイを対象とした底曳漁業である。

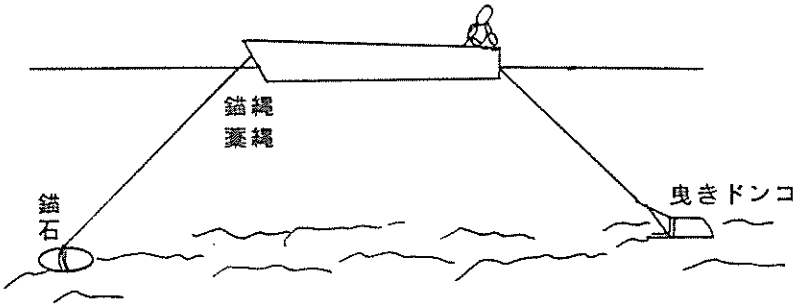
漁具は、曳きドンコと言われるケタ網を使用する。ケタは長さ４尺、高さ１尺２寸のヤマナシ（堅木）を用いる。爪は鉄製で、長さ８寸、幅２寸５分のものを、12～14本取り付ける。網は綿糸を用い、目合い１寸５分のものを使用する。これを袋状とし、長さ４サク（１サクは３尺）とする。ケタの中央には、石を取り付ける。曳綱は藁縄を使用する。ケタは自分で作る。１個作るのに３日かかる。

漁期は12～３月。漁場は、水深10尋までの海底が泥の場所である。

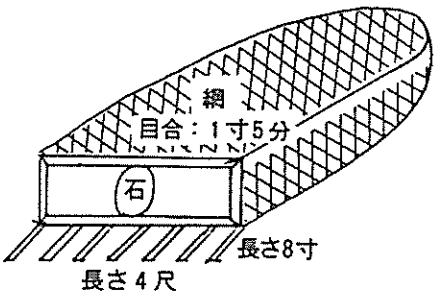
漁船に１人乗り込み漁場に向かう。漁場につくと錨を下ろし船を走らせながら錨綱を60尋延ばす。次に曳きドンコを下ろす。曳きドンコが、海底に着くと曳き綱を船に結び付け、延ばしておいた錨綱を20尋曳く。その後、曳きドンコを引き揚げ、泥を落としてから船に積み込み、漁獲物を取り出す。この作業を繰り返す。また漁獲量により曳く距離を調整する。

１回の漁では６個、１日の漁では100個前後の漁獲があった。

現在は、漁獲量が減少している。



アカガイ曳き操業図



アカガイ曳き漁具見取図

11. 釣　り　漁

①スズキ投げ釣り（唐桑町）

スズキは、沿岸の暗礁の回りや荒磯に棲息する魚で、季節により移動を行う。食性は動物食で小魚、エビ、カニ類を捕食する。また餌を追っての捕食行動が活発で、この習性を利用した釣り方がスズキの投げ釣りである。

仕掛けは自分で製作する。先ず鉛を流し込む型を作りその中に鉛を流し込む。次に針、鉄線を取り付け出来上がる。岩礁地帯で使用することから、根がかり等した時のために2～3個用意しておく。

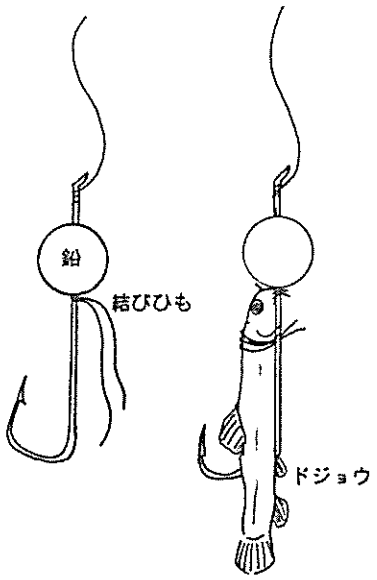
漁期は、土用（7月末）から約1カ月間。漁場は、波の荒い岩場が良い。

日中の操業である。漁船に1人乗り込み出漁する。漁場に着くと先ず用意しておいたドジョウを背掛けし、針からはずれないように糸を使い針に結び付ける。その後、櫓を使用して、船が岩場にぶつからないように操作しながら、仕掛けを波打ち際に投げ入れる。スズキの食いが良い場合には、仕掛けが水中に入るとすぐに食い付いてくる。普通は、仕掛を海底すれすれにして水中を引き、船の側まで来たら引き上げる。これを繰り返す。スズキが餌に食い付いた時はあたりをとり、糸が弛まないように引いて船に揚げる。スズキは針に掛かると口を開けて暴れるため、糸を弛めると針からはずれることも多く、釣り上げるのにはコツがいる。また漁場は岩場の波打ち際であり、釣りをしながらの櫓漕ぎの技術が必要である。

1回の漁では多い時で、30～40本漁獲される。1本の重量は1貫500～1貫600匁位である。

現在、この漁はほとんど行われていない。

スズキ投釣り操業図



スズキ投釣り漁具見取図

12. その他の漁業

①ナメタガレイ突き（歌津町）

11月になりアワビ漁が始まると、副業的にナメタガレイ漁も行われた。
この漁はナメタガレイをヤスを用いて漁獲する刺突漁業である。

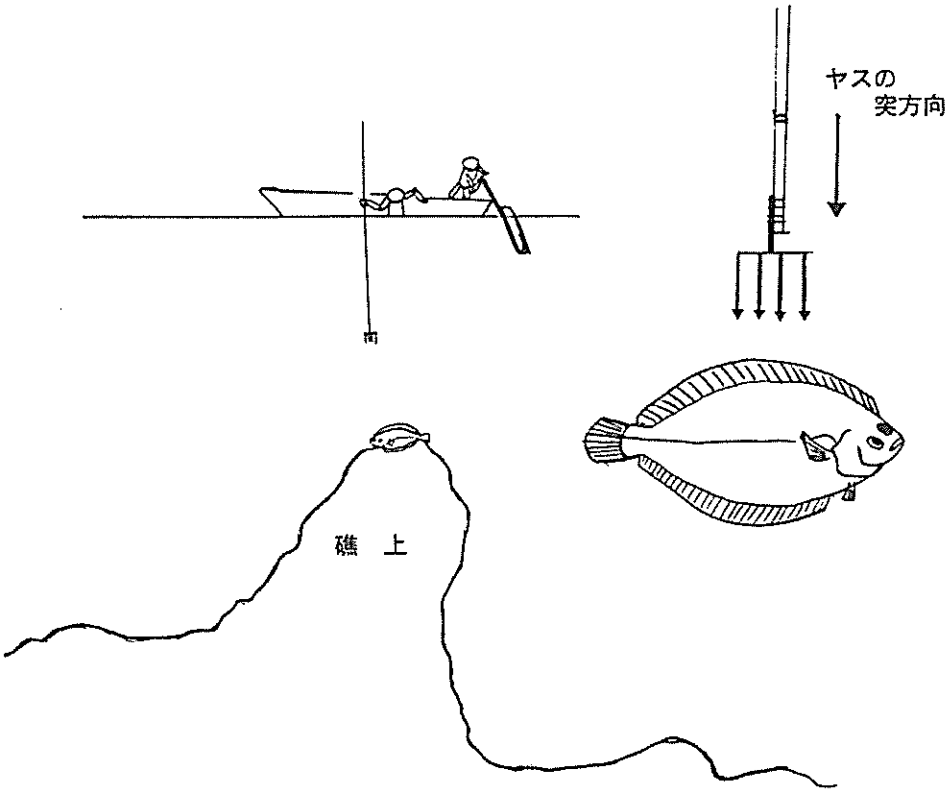
漁具は３～４本ヤスを用いる

漁期は11月中の１カ月間である。漁場は地先沿岸の海底が岩礁の場所である。

アワビ漁が始まると船にヤスを積み込み出漁する。ナメタガレイは11月になると６～７尋の礁上にいることが多い。漁獲方法はアワビを取りながらナメタガレイを見付けるとカギをヤスに替えて船を近付け、いっきに突く。この漁では、ヤスの使い方が大事であり、頭から尾鰭にかけて縦に突くことが必要である。

漁獲されたナメタガレイの大きさは２尺、重さ１～１貫200匁のものが多かった。

現在ナメタガレイはあまり見られなくなったことから、操業は行われていない。



ナメタガレイ突操業図

②ミズダコカギ捕り（歌津町）

ミズダコは寒海性の大型のタコである。県内でも牡鹿半島以北でカギによる漁獲が行われる。

タコカギはカギ、柄、竿からなる。カギは鉄製であるが細く曲げることが出来る強さのものを使う。柄は、弾力性があるソゾメの木、長さ１尋のものを用い、カギと竿の中間に取り付ける。竿は、水深により竹をつないで作る。補助漁具のナグリカギはタコを穴から引っ張り出す道具で、針金20番線を使用し、タコの穴に合わせて曲げて用いる。

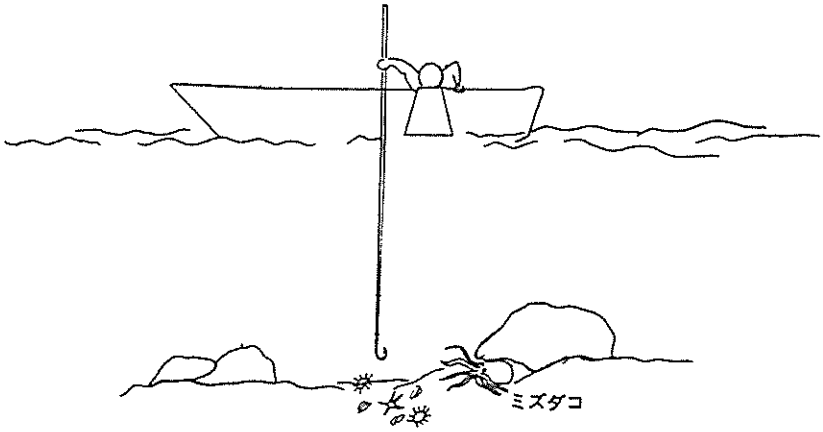
漁期は10～１月。漁場は、地先沿岸で水深７尋までの海底が砂地か岩場の場所である。

ミズダコ漁は、10月20日頃より始められ１月まで行われる。時期により漁獲されるタコの大きさが違う。漁期始めは、手長（足の長いもの）といい重さ１貫200目位のもの、次は重さ４貫前後のもの、11下旬～12月上旬には重さ５～６貫のもの、最後にアブラダコといい重さ400～900匁の小型のものが来て漁がおわる。

ミズタコは、寒くなると深みから浅瀬に移動する。この時期になると宿を取るといい、自分の穴を見付けてあまり移動して歩かなくなる。このため、この漁ではタコの穴を知っていることが必要である。それは、タコが毎年同じ穴にはいるためで、多くの穴を知っていることが、漁獲量を左右するもっとも重要な点になるからである。

漁船に１人乗り込み出漁する。タコのいる穴場に着くと箱メガネをのぞき込みタコを捜す。タコのいる場所は岩場や砂の所で、周りに貝殻が多くウニ等が食べ残しの餌に付いているのでわかる。タコが外に出ている場合は、カギを使用し引っ掛ける。タコが出ていない場合には、補助漁具のナグリカギを穴に入れてタコを突き、タコが穴から出て来た所をカギで引っ掛け漁獲する。箱メガネが無い時代には、風のない時だけ出漁し、タコのふ（内蔵）を口に含んで水面に吹きかけ、ガラスがわりとして漁をした。

現在も冬になるとミズダコ漁は行われる。



ミズダコカギ捕り操業図

③アワビ取り（本吉町）

アワビ漁は、県内の北中部を中心として行われるカギを使用した漁業である。

カギは鉄製の１本カギを使用する。柄には、竹を用いる。吊るし網は、口の直径２～２尺５寸のものを使用し、網は目合い１寸５分、袋の長さ３尺とする。吊るし網は、船から吊るしておき、引っ掛けたアワビを一時入れておく網である。

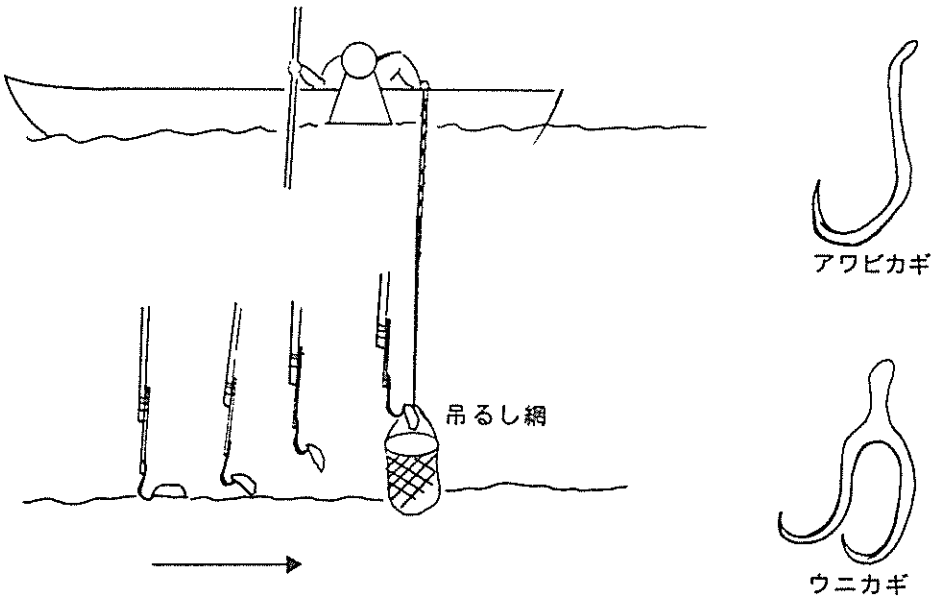
漁期は11～１月。漁場は地先沿岸の岩場である。

普通、アワビ漁は、組合で口開け（漁を行う日）を決めることから始まる。早朝各船に１～３人乗り込み漁場に向かう。１人は漕ぎ手、１人は箱メガネをのぞき込みアワビを捜す。アワビを見つけるとカギを用いて引っ掛け、落とさないように船に揚げる。しかし、この地区では吊るし網を用いた操業を行う。まず船から網を海底付近に吊るしておき、引っ掛けたアワビはその網にいっぱいになった時点で、船に引き上げる方法を取っている。

アワビ漁では、海藻の下や岩の間にいるものを見付けだすには経験を積んだ技術が必要であり、漁獲量には個人差が著しい。またアワビを傷つけず漁獲することが大切である。

アワビ漁では、県内の各地区により漁獲方法が違い、またカギの大きさや型も違ってくる。カギは昔から専門の鍛冶屋がおり、地区ごとの注文にあったものを作っている。

鍛冶屋は現在宮城県では、気仙沼の国光鍛冶屋を含めて10軒位しかないが、作っているものはアワビカギ、ウニカギ、ホヤカギ、１本ヤス、２本ヤス、ウニタモ輪、ワカメカマ、テングサ採取具等である。出荷先は県内はもとより北は北海道から南は山口までと広範囲であり、注文により作っている。また手作業であるためアワビカキで１日に20位しか作れない。



アワビ取り操業図

④ホッキ取り（本吉町）

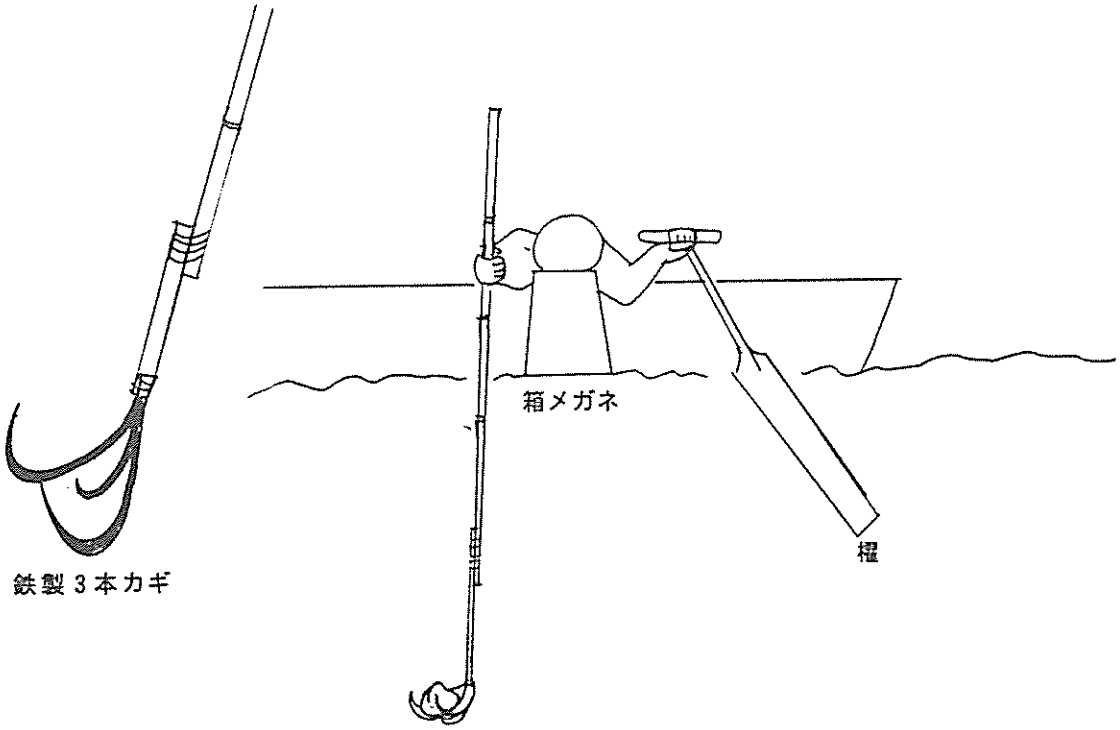
現在ホッキの漁獲は、底曳（貝桁）漁が中心に行われている。しかしこの地区では古くからカギ取り漁が行われている。

カギは鉄製で、３本付いており両側のものは大きく、中心のものは小さい。カギの小さいものは、引っ掛けたホッキが落ちないよう支えとなっている。棒は竹と堅木を使用する。

漁期は12～翌年２月。漁場は、水深５～６尋までの海底が砂地の場所である。

１～２人で行う漁である。漁場に着くと箱メガネをのぞき込み、カギを使用して砂を突く。ホッキがいる時は、突くと砂がまいあがる。この時、砂にカギを入れて掻き、ホッキをカギにのせて船に引き上げる。

１日の漁では、１バンジョ（竹で編んだ籠のこと）の漁獲がある。又アオヤギ（バカガイ）も多く漁獲される。



ホッキ取り操業図

⑤サラガイ突き（気仙沼市）

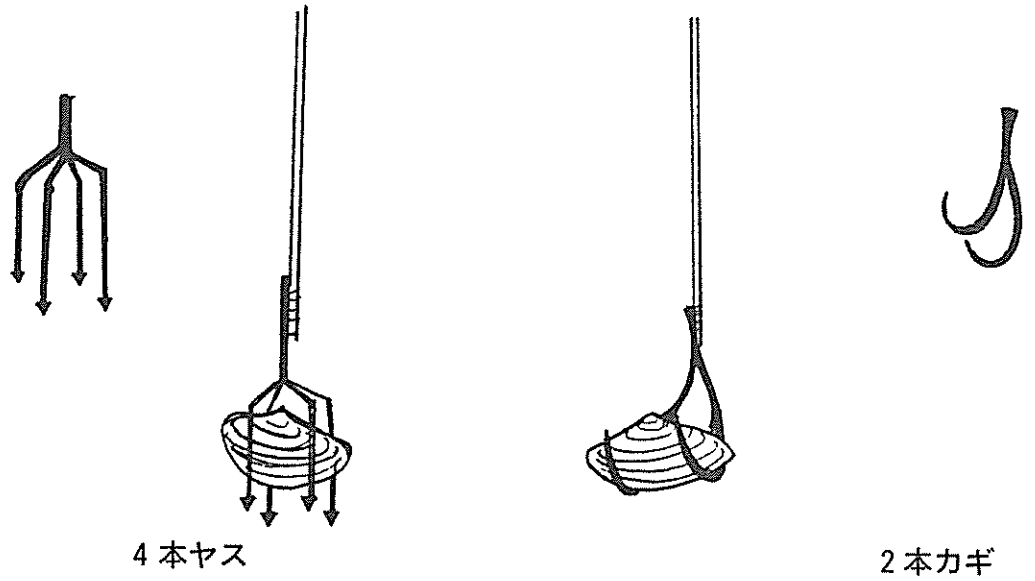
サラガイ漁は、４本ヤスを使用する場合と２本カギを用いて引っ掛けて漁獲する場合の二通りがある。

漁期は９～４月。漁場は、岩場で水深８尋以内の場所である。

漁船に１人乗り込み漁場に向かう。漁場では箱メガネをのぞき込み片手にヤスを持ってサラガイを探す。サラガイは水管を出しておりこれを見付けると、４本ヤスの間に挟み込むようにして突き船に揚げる。

漁獲されるサラガイの大きさは、３寸位である。

この漁では、10籠（１籠に入る貝の枚数は、約100枚）取って一人前になったとされた。



サラガイ突漁具見取図

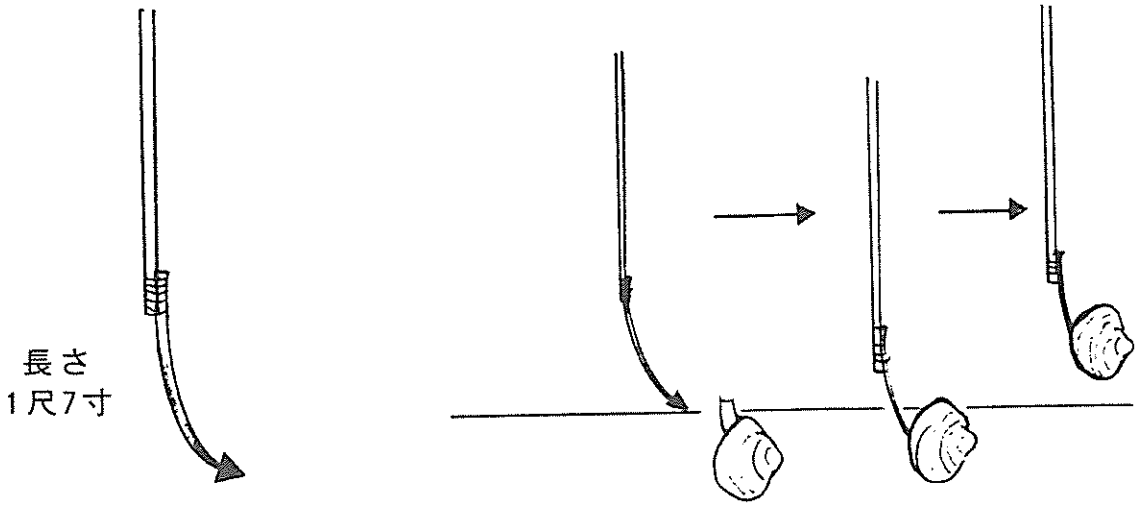
⑥ヨメガイ突き（気仙沼市）

ヨメガイ（ウチムラサキ）突きは、ヤスを使用して行う刺突漁業である。

ヤスは鉄製でヨメガイヤスと呼ばれ、長さ１尺７寸、先の部分長さ１寸、幅５分のものを、堅木に結び付け使用する。

漁期は12～１月。漁場は、海底が砂地の場所である。

漁船に１人乗り込み出漁する。漁場に着くと箱メガネを使用し、海底をのぞき込む。ヨメガイの生息している所は、海底に小さい穴が開いていて水管が出ている。そこをヨメガイヤスで突くと、柔らかい感覚と音で貝にヤスが刺さったことがわかる。この時ヤスを回し、カイの口が閉じたところで船に揚げ漁獲する。この漁には、次ぎのようなコツがある。



ヨメガイ突漁具見取図　　ヨメガイ突操業図

ヨメガイは水管をななめに出しているので、貝を突きやすくするためヤスの先を少し曲げること、また肉が柔らかいので、刃先を回して食い込ませてから引き上げることの二つである。

多い時には、1日に300個もの漁獲があった。貝の大きさは、4寸位のものが主体であった。

また、同じ漁具を使うが箱メガネを用いないメクラ突き漁法もある。これは砂の5寸位下で口を開いている貝をヤスでめくら突きし、カイにあたる音や手の感覚で、ヤスを口の中に入れ、口が閉じたところで取り揚げる方法である。メクラ突き漁法は、感覚によりヤスを海底に刺し、砂を掘るようにしてカイを捜し出すことから経験が漁獲量を左右する。現在もヨメガイ突きは行われているが漁獲量は少ない。

⑦ホ　ヤ　鈎（唐桑町）

ホヤは海のパイナップルとも呼ばれ、赤茶色の殻でおおわれた原索動物である。夏は肉が厚くなり美味しく、独特の香りがある。

ホヤ漁は、カギを使用した漁業である。各漁家で操業されていたが、養殖技術が発達したことから昭和30年頃から徐々におこなわれなくなった。現在では自家用のみに操業する人もいる。

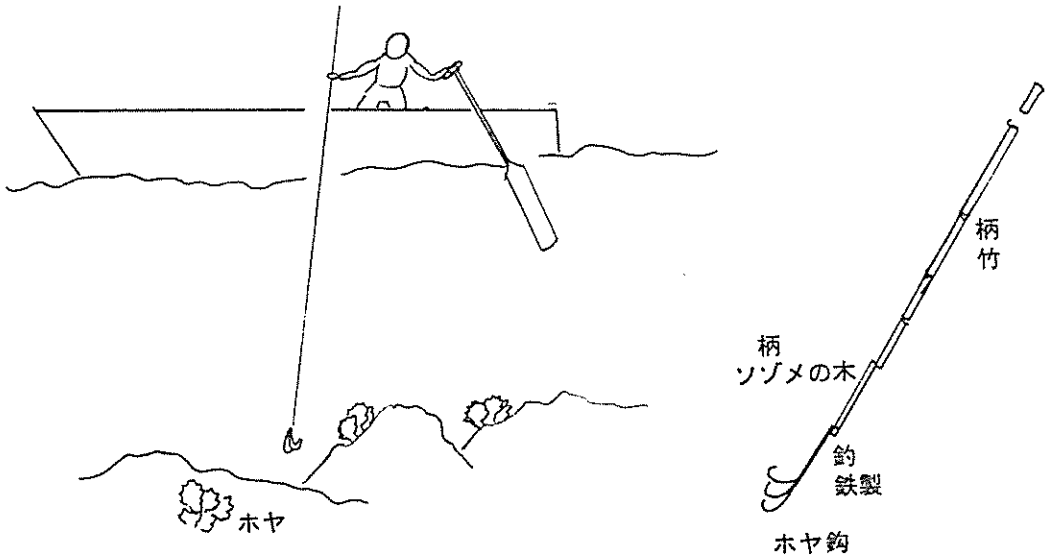
カギは鉄製で、3本カギを使用する。柄は始め細い鉄棒、次にソゾメ（ガマズミ）の木、最後に竹を使用し水深に合わせて繋ぎ合わせる。

漁期は6～8月。漁場は、地先沿岸の岩礁地帯で水深10～15尋までの所である。

カッコに1人乗り込み漁場に向かう。水深が深いため箱メガネは使用せず、経験で操業

する。まず片手に櫂を持ち船を操る、もう片方にはカギを持って海底を探る。ホヤは見えないが、あたると柔らかい感覚でわかる。この時、静かに底から起こし、岩からはずれたところで船に揚げる。これを繰り返す。ホヤは強く引くとこわれることが多く、上がってきても商品価値がなくなるため、無理には取らないようにする。深みの作業なので体力を必要とするが、これを出来るだけらくにするようにカギには工夫がされている。カギの部分は重いが他は竹で作ってあるので、前に浮こうとする力が常に働き、これを利用し少し力を加えれば下に沈むという作りになっている。力を使わなくてもカギを入れたまま移動出来るので、１日の操業が出来る。

ホヤは岩の平らな所に多く、山になっている所やくぼみのある所ではあまり多く取れない。漁獲は、多い時には１度に30個のかたまりが取れる時もあり、１回の漁では８貫前後の水揚げがあった。



ホヤ鈎操業図

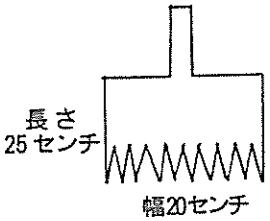
⑧テングサ採取（本吉町）

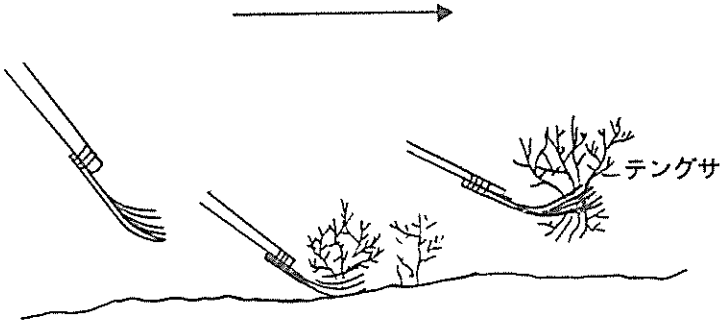
テングサは寒天原藻として知られている。テングサ漁はテングサ採取具を使用して行う夏漁である。

テングサ採取具は鉄製で、歯の部分と柄の部分から出来ている。歯の部分は、幅20センチ、長さ25センチで、10本前後の歯を切り込んである。柄は堅木を用いる。

漁期は６～８月。漁場は、水深８尋までの岩場である。

漁船に１～２人乗り込み出漁する。漁場に着くとテングサ採取具を下ろして、岩を擦るようにし、歯にテングサを刺して引き上げ漁獲する。





テングサ採取図

宮城県の伝統的漁具漁法

中南部地区(未収集分)

○目　　次○

宮城県の伝統的漁具漁法

中南部地区（未収集分）

1．底曳網漁 …… 51

①打　瀬　網 …… 51
②改良手操網ヤンダシ …… 53
③ウナギ曳網 …… 54

2．地曳網漁 …… 56

①ボラ地曳網 …… 56
②サケ地曳網 …… 57

3．旋　網　漁 …… 58

①マグロ旋網 …… 58
②イワシ沖取網 …… 60
③揚　操　網 …… 61
④ボラわりこ網 …… 63
⑤ブリ旋刺網 …… 64
⑥イワシ旋刺網 …… 65

4．刺　網　漁 …… 66

①セイゴ刺網 …… 66

5．流　網　漁 …… 67

①福来流網 …… 67
②サケ流網 …… 68

6．延　縄　漁 …… 69

①よ　た　縄 …… 69

②タ　イ　延　縄 …… 70
③ウ　グ　イ　縄 …… 71

7．そ　の　他 …… 72

①ワカナゴ釣り …… 72
②ボ　ラ　投　網 …… 73

1．底曳網漁

①打　瀬　網（石巻市）

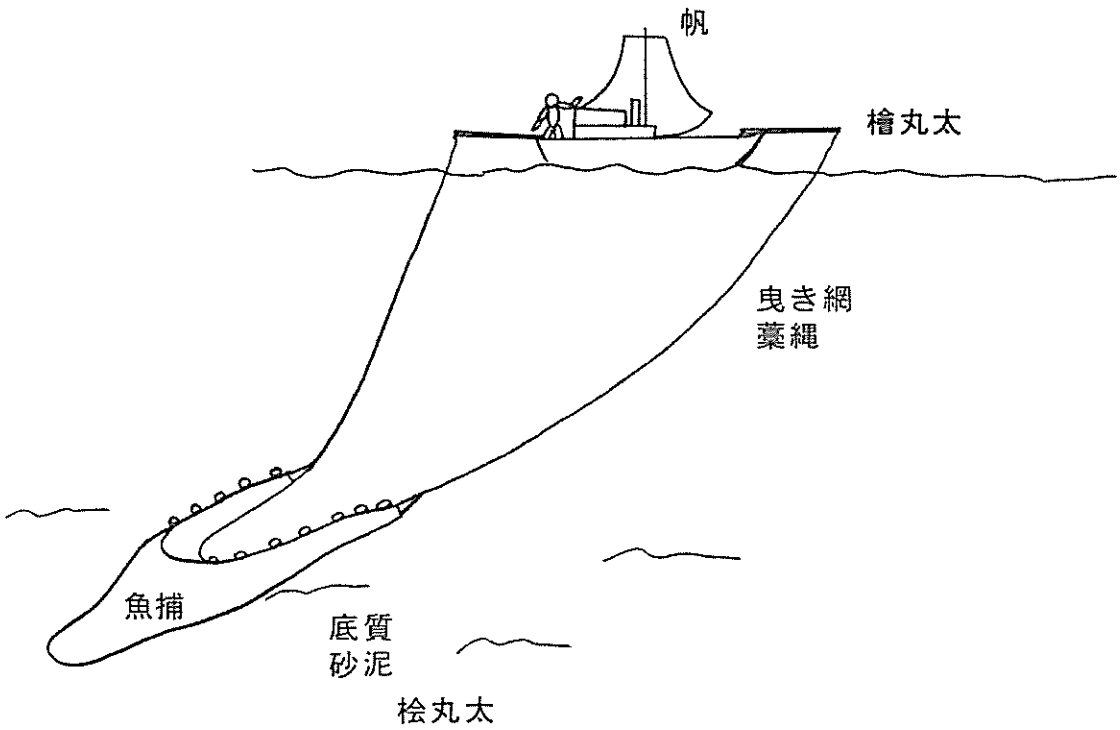
打瀬網の操業は明治39年頃より始められた。使用方法が簡易であり県下全域に普及していった。

打瀬網は風や潮流を利用し網を用いて海底を曳き回し、カレイ等を漁獲する横曳き（打瀬）漁法である。

魚捕りは12号綿糸を用い、目合い本目２寸、120掛け、６間切りのものを使用する。これを中央より折り返し、両側を縫合して袋状とし、一隅に袋口を設け捕獲物の取り出し口とする。方言「ずわ」と呼ばれる部分は、魚捕りの前方に縫合する筒状の網である。これは12号綿糸を用い、目合い本目２寸、75掛け、６間切りのもの２枚の間に、同じ網地で50掛けより目毎に１目づつ編み減らし、最後に１目終わる三角網２枚を挟み縫合したものである。漏斗網は６号綿糸を用い、目合い本目７節、180掛けとし180掛けより目毎に１目づつ編み減らして２尋編み下ろし、網地の両側を縫い合わせて漏斗状としたものである。この180掛けの方を、ずわの三角網の終わりの部分に縫い合わせ、他の端は離しておく。垣網は10号綿糸を用い、目合い３寸、50掛けの４網を使用する。網は１丈１尺切り１枚、１丈切り１枚、９尺切り１枚、８尺切り１枚を横に縫い合わせ片袖分として用いる。天井網は、海底に潜んでいる魚類が網に驚き逃げようとするものを、遮断して袋網中に入らせるものである。網は５号綿糸を用い、目合い本目６節、150掛けより４目毎に１目づつ減らしていき、６間編み下ろしのものをずわを中心として両垣網の浮子の間に結び付ける。浮子は漆木製で、長さ１尺、幅３寸、厚さ１寸のものを用いる。これを浮子綱に１尋に２個の割合で抱き合わせて用いる。浮子綱は５分径および３分径しゅろ綱を用い、長さ28尋のもの各１本を用いる。天井網の前口には、３分径しゅろ綱、４尋のもの２本を用いる。沈子は陶製の円筒型で、１個の重量は45～50匁であり、全部で280～300個を用いる。沈子綱は７分と１寸５分型の藁縄を用い、長さ28尋のものを使用する。この内７分径のものに沈子を通し２本を抱き合わせて用いる。曳綱は径２寸の藁縄を用い、長さ35尋のもの２本と、５分径マニラ綱１丸を片袖分として用いる。沈石は１貫目内外の石を用い、風力の強弱に応じて曳綱の藁縄部分に２～７個を取り付ける。

漁期は周年。漁場は２～５月はカナイシ礁の内側に沿って金華山より12海里離れた所から荒浜沖合までの間、６～９月は田代島南東沖合５～10浬の所より石巻沖合とする。

肩１丈位の船に漁師３人乗り組み出漁する。漁場には夕刻着くようにする。漁場に着くと船尾部に檜丸太、元周り２尺、末口８寸周りのものを船内に６尺、船外へ６間突き出し、



打瀬網操業図

舳には檜丸太の周り８寸、末口回り５寸位のものを船内へ５尺、船外へ１間半突き出す。次に各先端に取付けられた滑車に曳き綱を通し、網および綱類を整えておき、風が強いときは帆を下ろし風が弱い場合は帆をはる。この方法でまず風上の方へ袋網から投入し、次ぎに垣網を投じ、続いて曳綱を網の具合を調整しながら投入する。その後風の強弱により帆を調整し、潮に従い船を横に先行させて網を曳く。この網を使用するには風と潮流が同じ方向の時が一番良く、反対の場合は作業を行わない。２～３時間曳網を行い、網を繰上げ船中で袋網中に入った魚を収容する。その後、投網を行う。一晩で３～５回の操業を行い翌朝帰航する。

この漁法は漁船に初めて動力が導入された頃のもので、漁場への往復だけに動力を使用し、漁場では風力が利用されていた。その後、改良打瀬ヤンダシ漁法に変わっていった。

②改良手操網ヤンダシ（石巻市）

改良手操網（ヤンダシ）は打瀬網の構造を参考として、元からある手操網に改良をほどこした漁法である。打瀬網に使用していた張り出し棒（ヤンダシ棒）を舳舮から中央マストの所に移し両舷に張り出し、張り出し棒の両端に曳き網の手綱をしっかりと結び付け、袋網を船の進行方向に動力により曳行する底曳網漁業である。

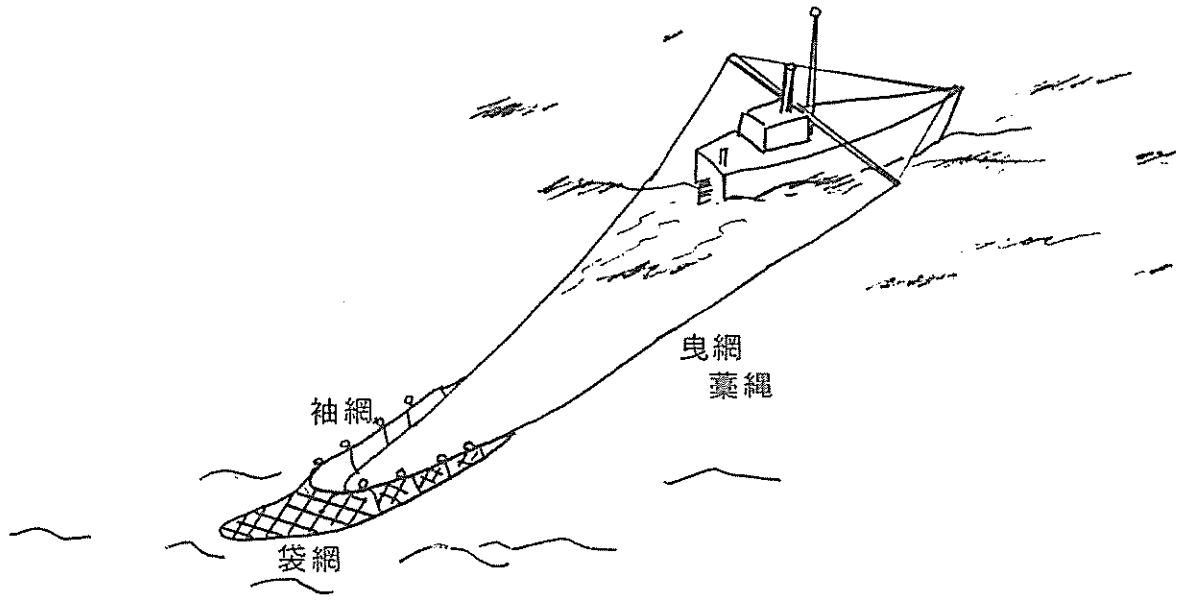
網は袋網部と袖網部からなる。袋網部は、胴尻、下蓋、上蓋、三角網、釣り網からなる。胴尻は綿糸７号を用い、目合い本目２寸、100掛け、４間切りのものを使用し中央より折り返して用いる。下蓋は綿糸５号を用い、目合い本目２寸、100掛け、２間切りのものを上側に用いる。三角網は綿糸４号を用い、目合い本目１寸５分、編み始め80掛けのものを両側を減じていき４目で編み終わる長さ約５尺のものを両側に用いる。釣り網は綿糸３号を用い、目合い１寸２分、80掛け、長さ３尺のものを三角網の終わり部分の上蓋に結び付ける。縮結は浮子方、沈子方とも４尺とする。袖網部は袖網と天井網からなる。袖網は網３枚を使用する。１網は綿糸５号を用い、目合い本目２寸、40掛け４間切り、２網は５号綿糸を用い、目合い２寸、30掛け、３間切り、３網は５号綿糸を用い、目合い２寸、20掛け、３間切りとする。この３枚を縫合して片袖とし、一端にてん木を取付ける。天井網は綿糸２号を用い、目合い本目１寸２分、180掛け、長さ４間のものを用い、４間の間に80掛けに減じるため、１尺に５目落としする。この80掛の部分を袋口に取付ける。目通糸は岩手麻、径１分を用い、長さ15尋のものを浮子方および沈子方に用いる。浮子は漆木製で、長さ８寸、幅１寸５分、厚さ５分の偏平のものを、全部で24枚用いる。この内、口前に２枚、片袖に11枚づつを用いる。天井網の浮子は漆木製で、長さ５寸、幅１寸５分、厚さ５分のものを５枚用い、３尋間隔で結び付ける。浮子綱は岩手麻、径２分、長さ15尋のものを１本、岩手麻、径１分、15尋切りのもの１本とを合わせて用いる。沈子は瀬戸焼きで、１個の重量16匁のものを、全部で120個使用する。この取り付け割合は袖端より袋口に近づくにしたがい間隔を狭めていく。沈子綱は藁縄、径５分、長さ16尋のもの１本に沈子を通し、これに藁縄、径１分５厘、長さ15尋のものを添えて結び付ける。からみ糸は岩手麻、径１分、長さ150尋のものを用い、目通し糸と沈子綱とを絡み付ける。曳綱は藁縄、径１寸、長さ19尋切りのもの２本と、藁縄、径６分、長さ35尋切りのもの11本を用いる。浮標樽は８升入樽１個を用いる。

漁期は３～11月。漁場は沿岸２～３浬沖合である。

漁船に３～５人乗り込み出漁する。夜間操業である。漁場に着くと風力を利用し、風上打瀬を行う。方法は打瀬網と同じ様に風のないときには横櫓を使用して行う。

大正11年になると大型の動力漁船を用いて、ヤンダシから曳行用のロープを直接舮に結

び付け操業する底曳網漁業が開始された。その頃の漁場は金華山から10～20浬沖合の水深120～180尋の海域で、漁獲物は主としてババガレイ、メヌケ、タラ、アブラツノザメ等であった。これより深い海域ではキチジが入りすぎて困るので操業を避けていた。



改良手操網ヤンダシ操業図

③ウナギ曳網（七ケ浜町）

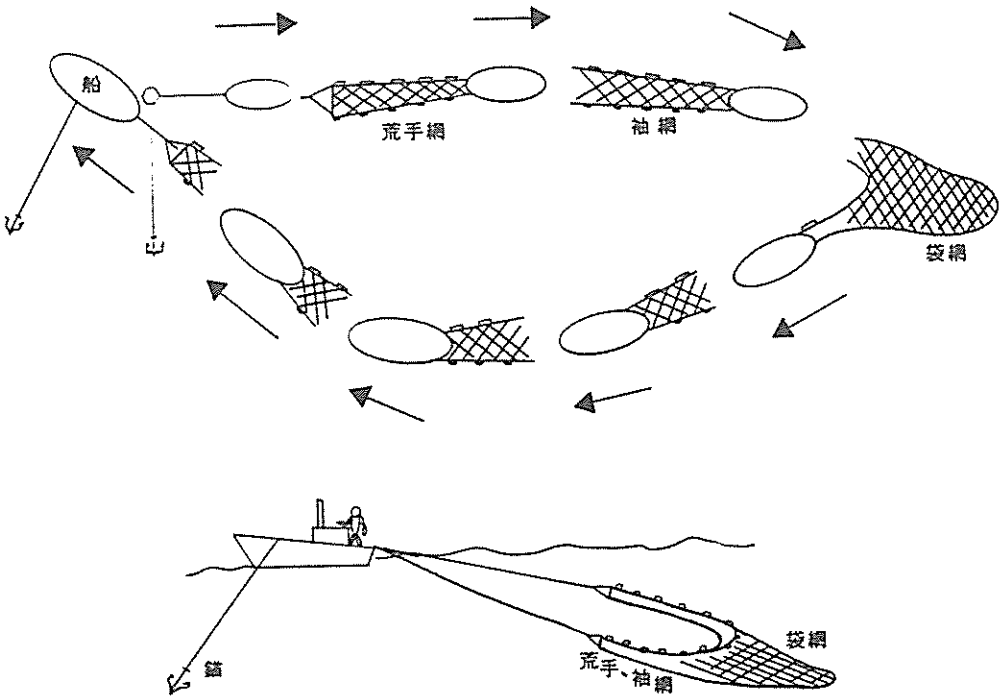
松島湾内のウナギ漁は釣り、延縄等多くの種類があり、曳網もその１つである。しかし、稚魚等乱獲の恐れがあることから、大正になり操業は中止された。

網は袋網部、袖網部、荒手網部からなる。袋網部は、胴網、魚捕りからなる。胴網は岩手麻を用い、目合い本目18節、100掛け、長さ５尋切りとする。これを８反横縫する。１枚の重量は約400匁である。魚捕りは岩手麻を用い、長さ３尋半切りのもの４枚を、胴網の中央２枚に縦目に縦縫する。この両側を胴網に横縫する。縮結は約９分とする。目通糸は綿糸８号を用い、長さ10尋のもの１本を使用する。浮子は桐製で、長さ６寸、幅２寸、厚さ５分のものを用いる。これを６寸間隔で３枚結び付け、合計41枚を使用する。浮子綱は藁縄、径２分のものを用い、長さ10尋のもの２本を使用する。浮子は鐵製で、円筒径の長さ２寸のものを用い、１個の重量50匁のもの３個を使用する。沈子綱は藁縄、径５分のものを用い、長さ２尺切りのもの２本を使用する。縁網は沈子方の口前に、麻、目合い本目３掛け、長さ２尺切りのものを１枚用いる。袖網部は、１脇とする。１脇は２網からなり、１網は岩手麻を用い、目合い本目18節、２尋半切り１枚を用いる。もう１網は岩手麻を用

い、目合い本目14節、２尋半切り２枚を用いる。以上の２網を横縫し、沈子方に用いる。縮結は浮子方で約９割とする。目通糸は綿糸８号を用い、２尋半切りのもの２本を浮子方の両方に用いる。浮子は桐製で、長さ６寸、幅２寸、厚さ５分のものを用い、浮子綱に６寸間隔で１枚結び付ける。浮子綱は藁縄、径２分のものを用い、２尋半切りのもの２本を使用する。沈子は鐵製で、円筒型のものを用い、１個の重量50匁とする。これを片側に12個づつ取付ける。浮子綱は藁縄、径５分のものを用い、２尋半切りのもの２本を使用する。荒手網は、くご縄、径１分のものを用い、目合い本目５寸、18掛けより12掛けまでもっていき18尋切りとする。縮結は浮子方で８尋を７尋に仕上げる。浮子は桐製で、長さ７寸、幅２寸５分、厚さ６分のものを用い、５尺間隔で１枚取付ける。浮子綱は藁縄、径６分のものを用い、７尋切りのもの２本を使用する。沈子は30匁位の石を用い、５寸間隔に１個の割合で取付ける。沈子綱は藁縄、径３分のものを用い、８尋切りのもの４本を使用する。これを片袖に２本づつ取付ける。てん木は長さ１尺２寸、径５分のもの２本を使用する。曳綱は藁縄、径８分のものを用い、長さ30尋とし、片袖に２本づつ取付ける。浮標は５升入樽１個を用いる。

漁期は周年。漁場は松島湾内の底質が砂泥の場所である。

漁船に３人乗り組み出漁する。漁場は湾内に数か所ありその日の状態により決定する。漁場に着くと先ず浮標と碇を投入する。それを目印とし船を走らせ、円をかくように網を投入する。船は初めの浮き標の所に戻ってもあいを取り、両曳き綱を同時に曳き上げていく。最後に袋網を船に積み込み漁獲物を取り上げる。



ウナギ曳網操業図

2．地曳網漁

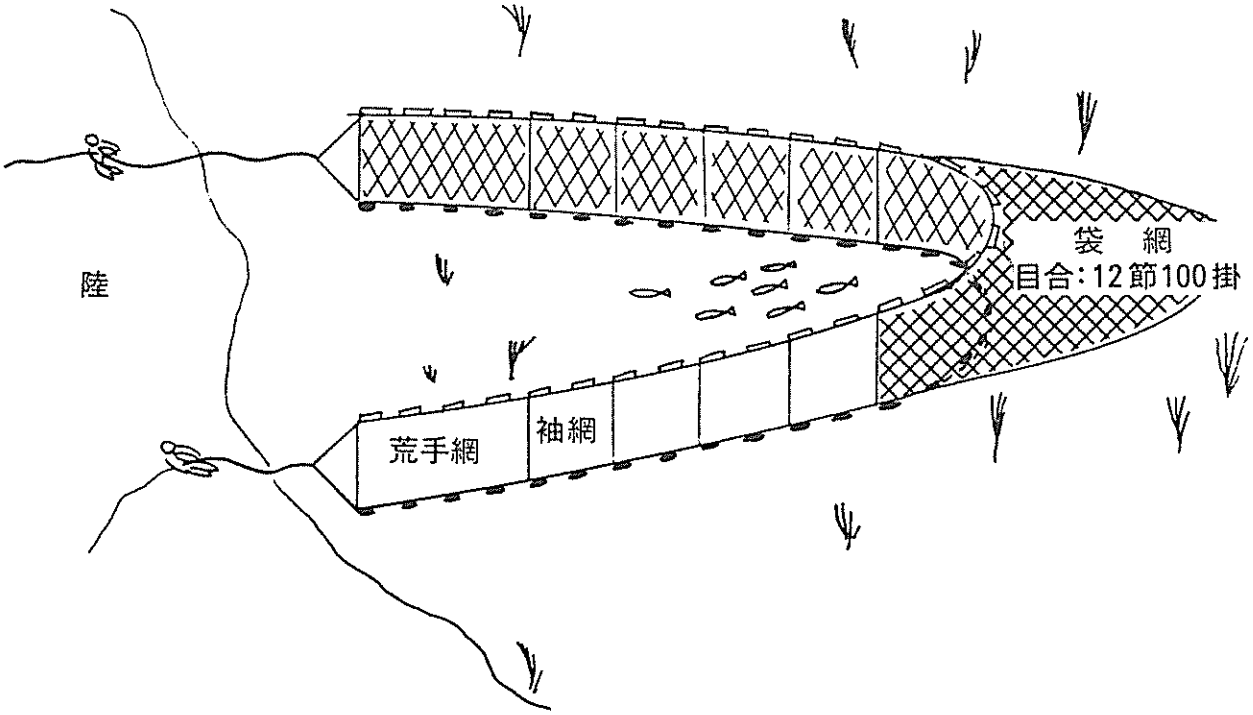
①ボラ地曳網（石巻市）

ボラは沿岸性の魚で、春～秋に索餌のため河口域等に入り、冬は外洋の定置等で漁獲される。性質は臆病で物音に驚きやすい。また冬には脂が乗って味が良くなる。

袋部は岩手麻を用い、目合い12節、100掛け、５尋切りのもの、４反半と三角網１枚を横縫する。袖網は三種類用いる。１網は岩手麻を用い、目合い８節、12尋切りのもの４反を、仕上げで９尋に縮結する。２網は岩手麻を用い、目合い７節、12尋切りのもの３反を、仕上げで９尋に縮結する。３網は岩手麻を用い、目合い６節、12尋切りのもの７反を、仕上げで９尋に縮結する。荒手網は、くご糸を用い、目合い15掛け、３尋切りのものを用いる。浮子は桐製で、長さ１尺２寸、幅４寸５分、厚さ８分のものを用いる。沈子は250匁位の石および40匁位の瓦を用いる。曳綱は藁縄径８分、長さ25尋のもの６本を用いる。

漁期は春秋の２期とし、春は３～４月の２カ月間、秋は９～11月の３カ月間。漁場は万石浦内とする。

漁船に網を積み込み出漁する。漁場につくと、まず袋部より投下し袖網の両端の曳綱を陸にとって、曳子は二手に分かれ網を引き寄せる。その後漁獲物を回収する。



ボラ地曳網漁具見取図

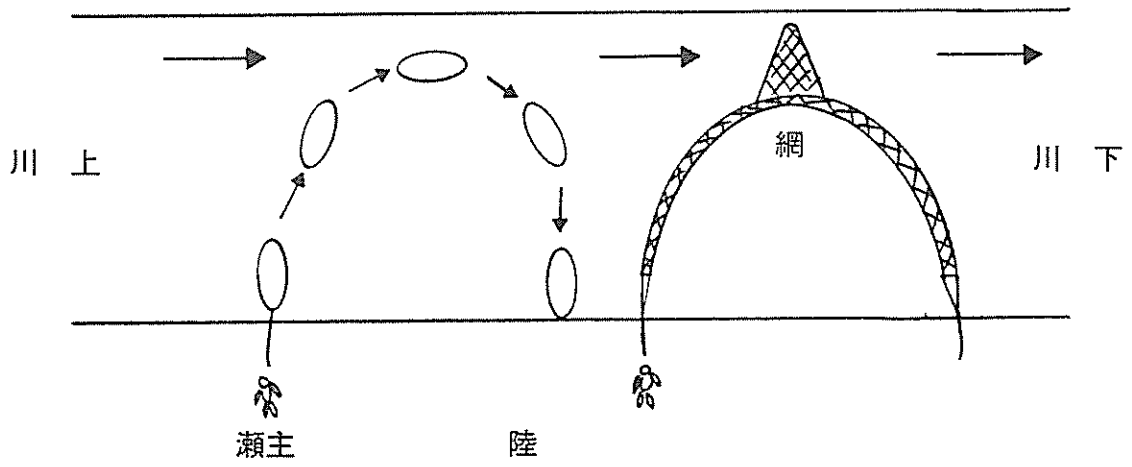
②サケ地曳網（石巻市）

河口でサケを対象にして行われる、小規模の地曳網である。

魚捕網は岩手麻、径６厘を用い、目合い３寸５分、150掛け、８尋切りのもの３反を縦縫する。元置き方の垣網は岩手麻、径６厘を用い、目合い３寸、150掛け、７尋５分切りのものを使用する。これを３反縦縫する。手元方の垣網は５網を用いる。１網は岩手麻、径６厘を用い、目合い３寸、150掛け、７尋５分切りのもの９反を縦縫する。２網は岩手麻、径６厘を用い、目合い３寸、150掛け、７尋５分切りのもの５反を縦縫する。３網は岩手麻、径６厘を用い、目合い２寸５分、150掛け、７尋５分切りのものを使用する。幅は７尋５分とする。４網は岩手麻、径６厘を用い、目合い３寸、150掛け、７尋５分切りのものを使用する。幅は９尋とする。５網は岩手麻、径６厘を用い、目合い３寸５分、150掛け、７尋５分切りのものを使用する。幅は10尋５分とする。浮子は桐製で、長さ８寸、幅２寸、厚さ１寸２分のものを用いる。これを浮子綱に８寸間隔で３枚づつ取付け、合計254枚を使用する。沈子は40匁位の石を用い、魚捕部に７寸間隔で１個づつ、垣網部には35匁位の石を８寸間隔で１個取付ける。浮子綱は藁縄、径７分のものを使用する。元置きは藁縄、径１寸２分のものを用い、長さ20尋とする。手元は藁縄、径１寸２分のものを用い、長さ120尋とする。縮結は約５割とする。

漁期は９～12月。漁場は北上川下流域である。

漁師５人で操業する。始めに操業の指揮を取る瀬主を決める。瀬主は元置き方（陸上で片方の手元網を押えておく部所）にいて元置きを保ち、投網を指揮する。他の４名は網を積み込み漁船に乗りこむ。まず川の流れを横断しつつ投網を行い、円をかくように網を巻下ろす。その後陸に上がり２人づつにわかれて、手元網を引き寄せ漁獲する。



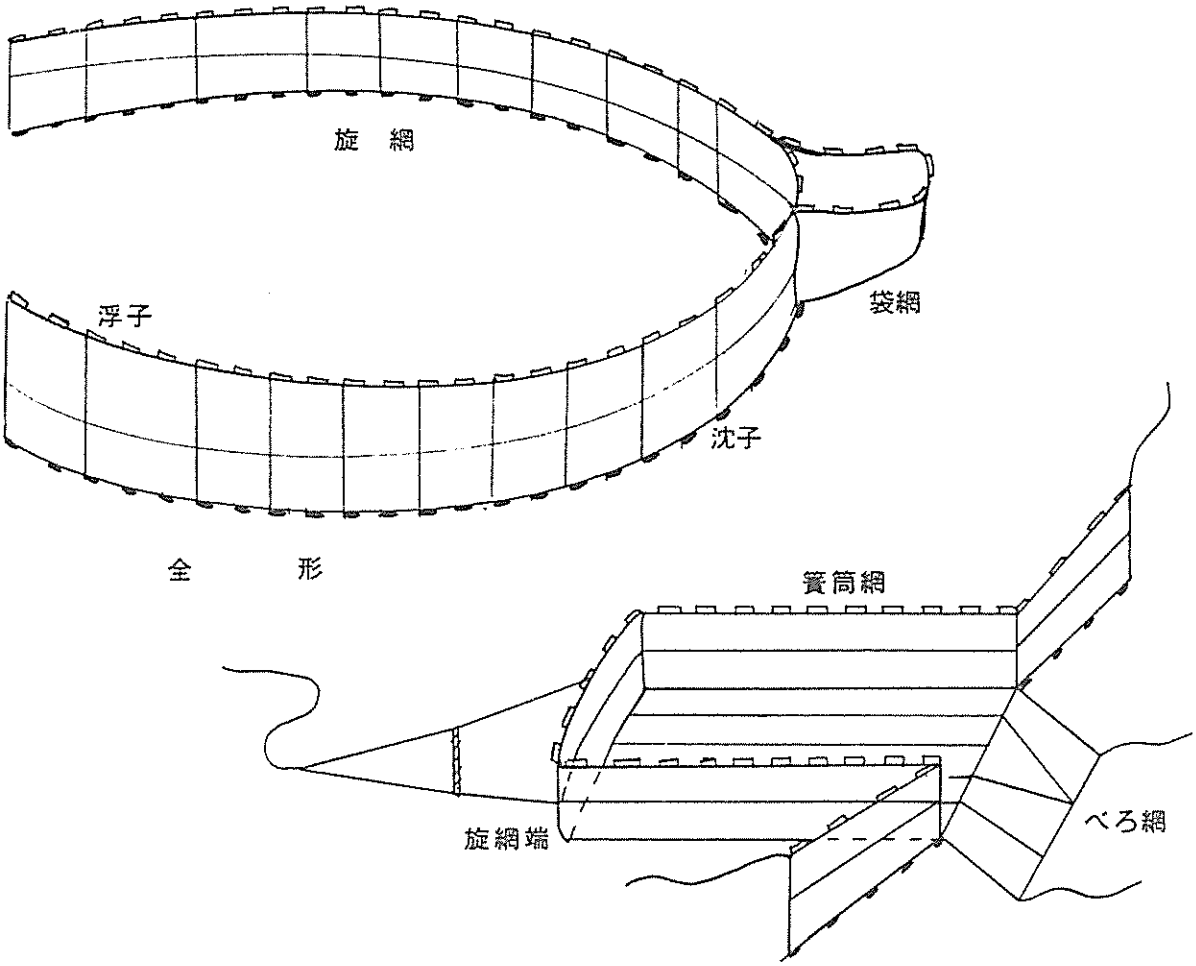
サケ地曳網操業図

3．旋　網　漁

①マグロ旋網（石巻市）

宮城県におけるマグロ旋網漁業は古くから行われ、日本水産捕採誌に記載されている陸前地方におけるマグロ旋網漁とは、石巻市田代島で行われた旧式旋網のことである。

網は袋網部と旋網部からなる。袋網部は魚捕り、３寸目、はさき、べろ網、袖網、縁網からなる。魚捕りは綿糸15号を用い、目合い２寸、100掛け、23尋切りのもの４反と、綿糸15号、目合い２寸、100掛け、15尋切り２反づつを用い、両側に横縫する。この内23尋切りのもの４反は、８尋を折り返して15尋切りとし縦目に横縫して袋状とする。３寸目は綿糸15号を用い、目合い３寸、100掛け、30尋切りのものを使用する。この内８反を横縫し両側は２反づつとする。残り４反は、はさき４反口に縦縫する。はさきは綿糸６号を用い、目合い100掛け、45尋切りのもの８反、外に綿糸６号を用い、目合い100掛け、45尋切りの三角網（方言ささ）を１枚、合計９反を横縫する。この内２反づつを両側とし、残りの５反を、べろ４反口に縦縫する。袖網は綿糸４号を用い、目合い５寸、100掛け、20尋切りのもの４反を横縫する。この内１反は三角網とし、４反口をはさき５反口に縦縫する。縁網は綿糸15号を用い、目合い３寸、５掛け、150尋切りのものを、はさきおよび３寸目に用いる。縮結は魚捕り部は５割、他は全部２割とする。目通し糸は綿糸30号を用い、長さ365尋のものを使用する。縫合糸は綿糸30号を用い、長さ1,200尋および、綿糸９号を用い、長さ900尋のものを使用する。ひうじめは岩手麻、径２分５厘を用い、長さ26尋のもの２本を使用する。べろ縁綱は岩手麻を用い、長さ63尋、重量２貫匁のものを使用する。浮子は袖網用には桐製で、長さ１尺２寸、幅３寸、厚さ１寸５分のものを、両側に50枚づつ結び付ける。他は桐製で、長さ１尺２寸、幅５寸、厚さ１寸７分のもの片側に150枚づつ結び付け、合計300枚を使用する。また、はさきより魚捕りに近づくにしたがい間隔を狭めていく。浮子綱は袖網にはマニラ綱、径３分のものを用い、長さ27尋半のもの２本を使用する。はさき以後はマニラ綱、径５分のものを用い、長さ160尋とし使用する。５枚あばは、桐製で、長さ１尺４寸、幅８寸、厚さ３寸のものを用い、18枚を魚捕り部の16尋を９尋に縮結した間に結び付ける。沈子は鉛製の円筒型で、１個の重量は約80匁のものを用い、全部で54個を使用する。沈子綱は藁縄、径３分のものを用い、長さ27尋半のもの２本を使用する。べろ綱は岩手麻、径５分のものを用い、30尋切りのもの４本を、べろ綱の引き揚げ用として使用する。この内２本はべろ綱の両端に、他の２本はひうじめの両側に結び付ける。旋網部は網地部分からなる。網地は綿糸４号を用い、目合い５寸、100掛け、25尋切りのもの２枚横縫したものを１反といい、合計20反を使用し、各反は４周を口編および縁編みする。口編



マグロ旋網漁具見取図

み縁編みは、綿糸30号を用い、長さ1,200尋のものを使用する。縮結は１反を仕上げ、浮子方は22尋、沈子方は21尋半とする。目通糸は綿糸30号を用い、長さ900尋を浮子方、沈子方に使用する。縫合糸は綿糸８号を用い、長さ660尋のものを網地の横縫用として使用する。くご縄は径２分のものを用い、長さ1,200尋のものを各網地の縦縫用として使用する。浮子は桐製で、長さ１尺２寸、幅３寸、厚さ１寸５分のものを、１尺８寸間隔で１枚を取付け、１反に40枚、全部で800枚を使用する。浮子綱はマニラ綱、径３分を用い、長さ22尋半切りのもの20本を使用する。沈子綱はマニラ綱、径３分のものを用い、長さ22尋のもの20本と、しゅろ綱、径２分のものを用い、長さ22尋のもの20本を使用し、全長440尋とする。結附糸は綿糸４号を用い、重量500匁のもの、浮子および沈子の結附用として用いる。てんがい縄は藁縄、径６分を用い、長さ30尋のものを袖端に付け曳綱との連絡用とする。曳綱はしゅろ縄、径５分を用い、長さ30尋のもの６本を１隻に２本づつを積みこむ。錨は四爪錨を用い、重量約12貫匁のもの２個、重量約６貫匁のもの２個を使用する。錨綱はしゅろ縄、径５分のものを用い、長さ30尋のもの１本、しゅろ縄、径１寸、長さ65尋のもの８本を使用する。

漁期は６～９月。漁場は端島沖から金華山付近の水深25尋以内の場所である。

肩７～８尺位の旋船２隻（１、２旋船と呼ぶ）および簀筒船１隻を使用する。旋船には旋網10反づつ簀筒船には袋網および袖網を搭載する。各船に漁師10名づつ乗り組み出漁する。漁場に着くと、まず魚群を捜し出す。魚群を見つけると、両旋船は旋網を縫合しこれを投下しつつ、潮下あるいは風下または斜側方より魚群を囲んでいく。旋網で両船が近づかない時は、てんがい綱を継ぎ、これを延ばす。１旋船は２旋船が旋いて来る網に、２旋船は１旋船が旋いて来る網に曳綱を付ける。これを曳き寄せて網の両端を縫い合わせ簀筒船のそばにくる。簀筒船は、旋船の来る前に潮上あるいは風上より錨を投じ、旋網の中央にくる。旋船が来ると袋網の袖網を両方に曳いて、旋網の外側に取付ける。これが終わると旋網の縫合を解き、旋船１隻と簀筒船は簀筒網の網口において合体し、他の旋船はてんがい綱の所で、次々と両旋網を縮小し魚群を簀筒網（袋網）に入らせるようにする。魚群が簀筒網に入れば直ちにべろ網を引き揚げて、袋中に追い込み捕獲する。

②イワシ沖取網（石巻市）

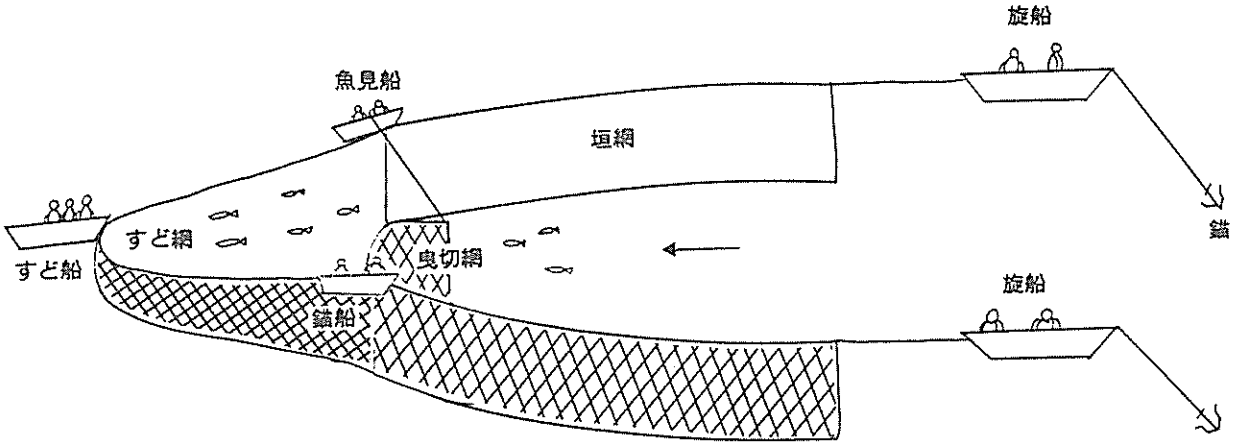
イワシ沖取網は、明治27年頃よりスズキ旋網を参考にして操業が行われた。

すど網は岩手麻、15号綿糸を用い、目合い本目16節、100掛け、10尋切りのもの28反を横縫する。この他は岩手麻、15号綿糸、目合い本目14節のもの、30反、34反、36反、38反、40反の７車を縦目に縦縫する。舌網は２号綿糸を用い、目合い本目14節、100掛け、６尋切りのもの10反を横縫する。すど網は前部中央に縦縫し、この両側３脇との間に最長20、最短６尋の５反からなる三角網を取付ける。曳切網は２号綿糸を用い、目合い本目14節、100掛け、13尋切りのもの20反を横縫し、この両側に最長６尋５分、最短５分からなる、５反横縫の三角網を取付ける。袖網は２号綿糸を用い、目合い本目14節、20尋切りのもの15反横縫したものを使用する。これを１脇といい、一端はすど網に接合する。垣網は２号綿糸を用い、目合い本目14節、25尋切りのもの15反を横縫し10車とする。縁網は、すど網と身網からなる。すど網は岩手麻糸を用い、目合い本目14節、10掛け、長さ160尋とする。袖網は３号綿糸を用い、目合い本目８節、15掛け、長さ540尋とする。浮子は桐製で、長さ１尺１寸、厚さ１寸、幅３寸５分のものを、すど網には１尺５寸の間隔で、垣網には２尺の間隔で１枚を取付ける。浮子綱は３分径マニラ綱を用い、長さ500尋とする。沈子は鉛製の円筒型で、１個の重量40匁のものを、沈子綱に１尺５寸の間隔で１個取り付ける。沈子綱は、５分径マニラ綱を用い、長さ300尋とし、錨に取付ける分は30尋、残りは分けて２本とし船に積み込み、使用の際に艫舳に分けて張る。

漁期は夏は５～６月の２カ月間、秋は９～11月の３カ月間。漁場は水深14～15尋の海底

が砂地の場所である。

漁船５隻を使用して操業する。簀筒船は９人乗り１隻、旋網は６人乗り２隻、魚見船は５人乗り１隻、錨船は５人乗り１隻とする。各船ごとに作業分担を行う。魚見船は他の船より先に出港し、魚群を捜索する。魚群を見つけると、直ちに他の船に連絡する。この連絡により、簀筒船は積んでおいた１脇と旋船にある垣網とを連結する。適当な位置に来ると、旋網は左右に別れて投網しながら魚群を囲み、簀筒船は錨船の投じた錨綱を手操りながら潮下の方へとすど網を投じる。魚見船および錨船の２隻は、曳切網の両側にいて魚群がすど網に入るのを監視する。魚群が入ると、２隻は直ちに曳切網を曳き揚げ、すど網を繰上げて魚を捕獲する。



イワシ沖取網操業図

③揚　操　網（鳴瀬町）

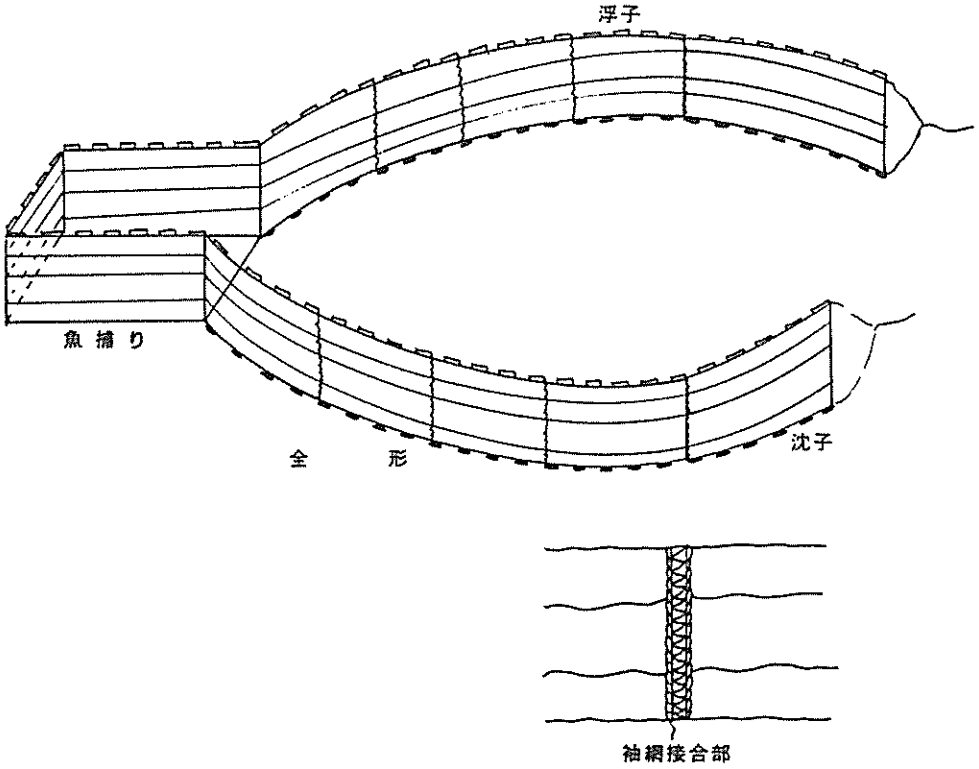
揚操網は、ニシンおよびイワシを漁獲する目的で行う旋網漁業である。

網は袋網部と袖網部からなる。袋網部は魚捕り、胴網からなる。魚捕りは岩手麻を用い、目合い14節、100掛け、10尋切りのものを使用する。これを７反横縫する。胴網は岩手麻を用い、目合い10節、120尋切りのものを使用する。これを16反横縫する。縮結は約１割とする。袖網はせめ、小脇、中網、荒手網元、荒手からなる。方言「せめ」は岩手麻を用い、目合い100掛けのもので６節を１反、10節を３反として用いる。この内６節を沈子方とし横縫する。小脇、中網、荒手網元は同じ網を使用し、作製も同じである。網は岩手麻を用い、目合い６節、100掛け、15尋切りのものを使用する。これを２反半横縫する。袖網部の小脇、中網、荒手網元の両方には方言「ひうじめ」を作って縫合する。荒手は、くご縄、径２分を用い、目合い本目１尺２寸、25掛け、15尋切りのものを使用し、荒手元に縦縫する。縁網は綿糸８号を用い、目合い１寸２分、４掛け、長さ15尋切りのものを使用する。これを麻網部の浮子方、沈子方の全体に取付ける。縮結は15尋切りのものを、浮子方のみ14尋に

仕上げる。目通し糸は、くご縄、径２分を用い、長さ334尋とする。浮子は桐製で、長さ８寸、幅２寸５分、厚さ８分のものを使用する。これを荒手よりせめまでの５車（方言で一反のことを車という）に、１車に付き20枚を結び付ける。浮子綱は藁縄、径６分のものを用い、長さ14尋のもの20本、18尋のもの４本、４尋のもの２本を使用する。浮子結綱は、くご縄、径２分のものを用い、長さ１尋のもの315本を使用する。沈子は30匁位のものを、荒手より袋網までの間全体に、２尺５寸間隔で取付ける。浮子綱は藁縄、径６分のものを用い、15尋切りのもの20本、４尋切りのもの２本を使用する。沈子包縄は藁縄、径２分５厘のものを用い、１尋半切りのもの300本を使用する。ひうじめ綱は、くご縄、径２分のものを用い、長さ500尋を使用する。曳綱は藁縄、径１寸のものを用い、20尋切りのもの２本を使用する。錨綱は径１寸２分、15尋切りのもの２本を使用する。もあい綱はマニラ綱、径７分のものを用い、長さ10尋のもの１本を使用する。錨は２貫500匁のものを用い、各船に１個づつ使用する。

漁期は周年。漁場は地先300間以内の水深10尋以内の底質が砂泥の場所である。

肩５尺の漁船２隻に漁師が４人づつ乗り組み出漁する。２隻には網を肩袖づつ積みこみ、袋網は２隻の中央の舳方に置き、もあいをとって航行する。船は魚群を見つけるともあいを解き、袋網より投下し、せめ、小脇、中網、荒手元、荒手の順に入網しながら魚群を囲んでいく。曳網は両船同じになるように投下し、両船近寄ったところで錨を投じると同時にもあいをとり、船曳を行う。



揚操網漁具見取図

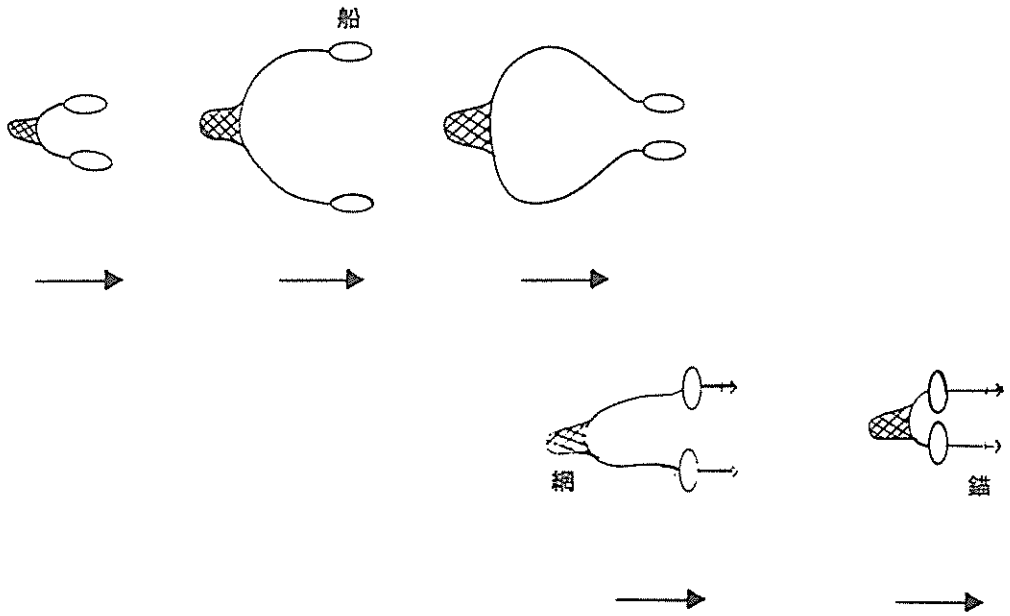
④ボラわりこ網（石巻市）

ボラわりこ網は、夜間行われる小型の旋網である。ボラは敏捷な魚であり、網等で囲むと跳ね上がって逃げることが多いが、冬期間は動きが鈍いので漁獲効率がよい。

魚捕りは岩手麻を用い、目合い14節、長さ25尋切りのもの６反を横縫する。１脇は綿糸３号を用い、目合い10節、17尋切りのもの３反半を横縫する。袖網は以下５網からなる。１網は綿糸４号を用い、目合い８節、長さ16尋切りのもの３反半を横縫する。２網は綿糸５号を用い、目合い６節、長さ15尋切りのもの３反を横縫する。３網は綿糸６号を用い、目合い５節、長さ15尋切りのもの３反を横縫する。４網は綿糸６号を用い、目合い４節、長さ15尋切りのもの２反を横縫する。５網は綿糸６号を用い、目合い３節、長さ15尋切りのもの２反を横縫する。縮結は１割５分とする。浮子は桐製で、長さ１尺２寸、幅８分、厚さ５寸のものを使用する。浮子綱は藁縄径８分のもの２本を使用する。沈子は80匁位の石を使用する。沈子綱は藁縄径８分のものを使用する。曳綱は藁縄径２寸のもの60尋を使用する。

漁期は１～４月。漁場は小竹浜より大曲浜までである。

わりこ網は夜間操業する。網を２隻の漁船に分けて積み込み、漁場に向かう。漁場につくと先ず魚群を捜す。魚群が見付かると、両網を繋ぎ合わせ左右より網を下ろし、魚群を囲んでいく。この作業が終了後錨で船を固定し、両船で網を繰り揚げ漁獲物を回収する。



ボラわりこ網操業図

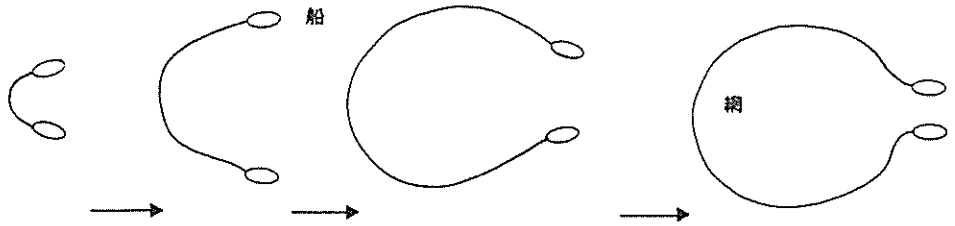
⑤ブリ旋刺網（亘理町）

この漁は魚群を囲み石等を使用して、魚を驚かせ網に追い込み刺さったものを漁獲する旋刺網漁業である。

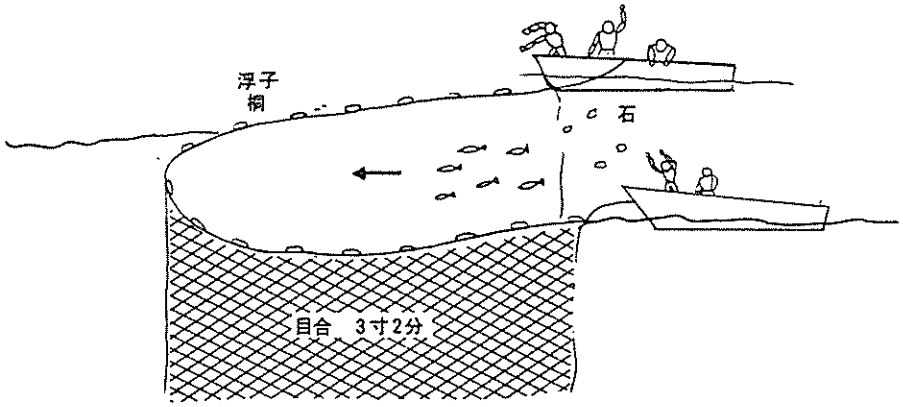
網地は岩手麻、径４厘を用い、目合い３寸２分、150掛け、長さ40尋を１反とする。１反の重量は３貫500匁である。縮結は浮子方で５割５分とし、仕上げ28尋、沈子方で５割、仕上げ30尋とする。目通糸は綿糸10号を使用する。浮子は桐製で、長さ１尺、幅２寸、厚さ１寸のものを用い、浮子綱に３尺間隔で１個取付ける。浮子綱は、しゅろ縄、径２分のものを用い、長さ29尋のもの２本を使用する。沈子は約300匁の石を用い、これを藁縄で包み、沈子綱に１丈間隔で結び付ける。沈子綱は藁縄径３分、長さ33尋のもの１本を使用する。はがい糸は、くご縄径１分、長さ８尋のものを使用する。巻留め綱は、網のみで魚群を包囲し、巻ききれない時に繋ぎたし使用する。その他には、藁縄径８分、33尋のもの各船に１本を用意する。

漁期は５～６月。漁場は海岸から半浬内外の礁間とする。

肩７尺の漁船２隻に漁師５人づつ乗り込み出漁する。網は５反づつ積み込む。漁場につき魚群を見つけると、両船の網を繋ぎ合わせ、投網を開始する。船は左右より魚群を囲んでいく。その後石又は貝殻等を投げたり、船縁を叩いて音を出し魚を網のあるほうに追い込んで、刺さったものを漁獲する。



ブリ旋刺網操業図１



ブリ旋刺網操業図２

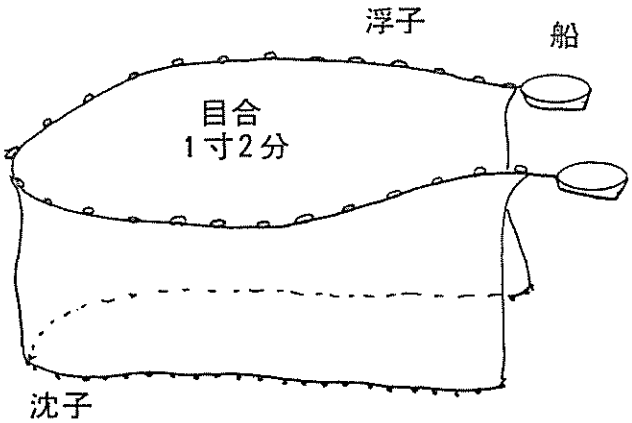
⑥イワシ旋刺網（名取市）

イワシ旋刺網は魚を包囲し、逃げ場を失ったイワシが網に刺さるのを待つ旋刺網漁業である。

網地は鹿沼麻、径１厘を用い、目合い本目１寸２分、100掛け、長さ25尋を１反とする。これを６枚横に繋ぎあわせ、両端は綿糸10号で口編みする。縁網は綿糸５号を用い、目合い２寸、本目10掛け、長さ25尋とする。これを浮子方、沈子方に各１反を縫合する。縮結は浮子方で２割とし、仕上げ20尋、沈子方では１割８分、仕上げ20尋２尺とする。目通糸は綿糸15号を用い、浮子方、沈子方の双方に使用する。浮子は桐製で、長さ１尺２寸、幅３寸５分、厚さ１寸のものを、浮子綱に１尺２寸間隔で取付ける。浮子綱はしゅろ綱、径４分、長さ22尋半のものを使用する。沈子は約30匁の石を用い、沈子綱に２尺間隔で１個を結び付ける。沈子綱は藁縄径４分、長さ21尋のもの２本を使用する。縫合糸は綿糸15号、長さ25尋のものを５本用意し、各網地の縫合に使用する。はかい糸は綿糸15号、長さ13尋のもの１本を使用する。旋網は藁縄径６分、長さ20尋のもの２本を使用する。浮標は５升入樽を用い、１網に11個取付ける。

漁期は５～11月。漁場は沿岸の水深１５尋内外の海底が砂地の場所である。

肩８尺位の漁船２隻に漁師５人づつ乗り組み出漁する。網は６反づつを積みこみ、全部で12反使用する。漁場につき魚群を認めると、各船は投網しながらまいていく。まいている途中網が不足した場合は、まき網を使用し補う。網がまき終わると、２隻を合わせ魚が網目に刺さるのを待つ。魚が網に掛かると、網を繰り上げ帰航する。その後、陸上で網から魚をはずす作業を行う。



イワシ旋刺網操業図

4．刺　網　漁

①セイゴ刺網（石巻市）

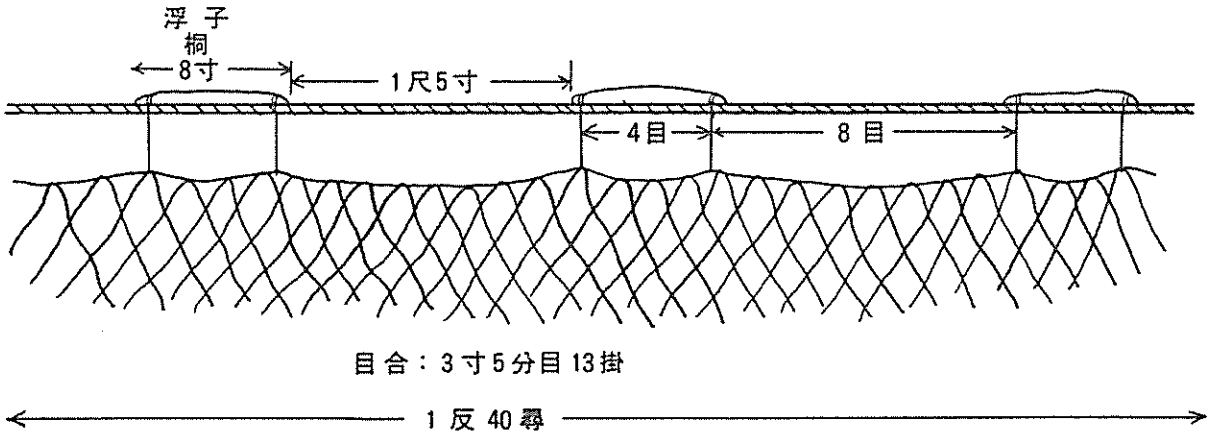
スズキを対象とした漁は旋網、釣り等種々あるが、セイゴ（スズキの小型のもの）は主として内湾での刺網漁業で漁獲される。

網地は岩手麻を用い、目合い３寸５分、13掛け、長さ40尋を１反とする。縮結は約３割とする。目通糸は綿糸６号を使用する。浮子は桐製で、長さ８寸、幅８寸、厚さ５分のものを、１反に付43枚用いる。浮子綱は、くご縄径２分５厘のものを用い、１反に４個取付ける。沈子綱は岩手麻、径２分５厘を用い、長さ19尋のものを使用する。

漁期は４～５月。漁場は、万石浦内の海藻が繁茂する所が良い。

肩４尺位の船に漁師３人乗り組み出漁する。網は４反を１把とし５列に投網する。翌朝揚網を行う。

漁獲は万石浦に西南風が強く吹き込み、沖合が時化て海水が濁っている時が良い。



セイゴ刺網漁具見取図

5．流　網　漁

①福 来 流 網（亘理町）

福来（ソーダガツオ）は南方系の魚で、夏に宮城県沿岸に索餌のため回遊する。水温の高い年に多い。

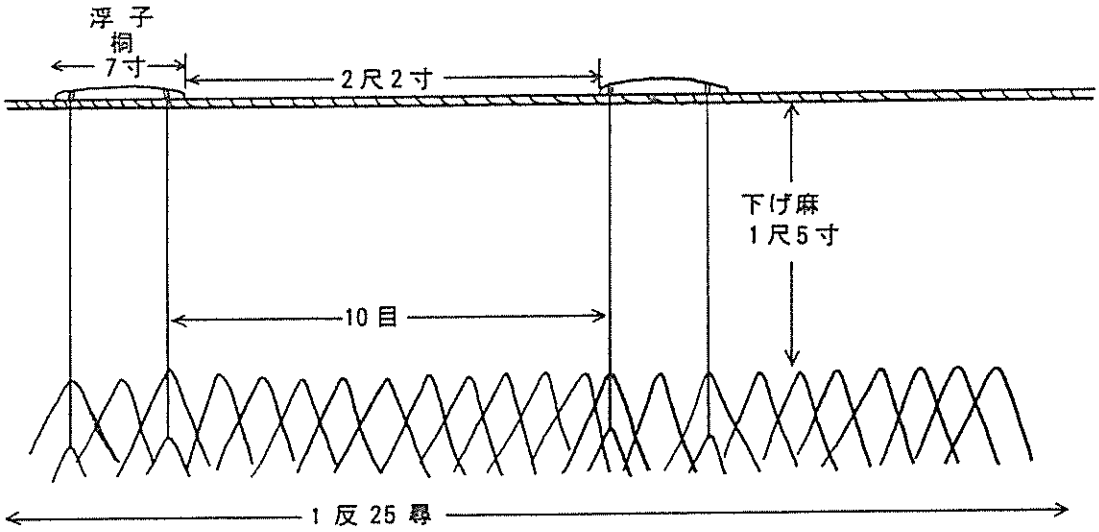
福来流網は、夜間行われる浮流網である。

網地は岩手麻を用い、目合い３寸５分、40掛け、長さ25尋を１反とする。１反の重量は400匁である。縁は、網糸の２倍の太さの糸を使用し、浮子方を半目丈縁編みする。縮結は４割５分とする。浮子は桐製で長さ７寸、厚さは６分、幅１寸のものを用い、浮子綱に２尺２寸間隔で取付ける。浮子綱は岩手麻、径１分５厘、長さ12尋のものを２本を使用する。下げ麻は綿糸20号、長さ１尺５寸のものを使用する。これを浮子１枚につき、２本づつ取付ける。

漁期は８～10月。漁場は沿岸より３～４海浬の場所である。

漁船１隻に５人乗り組み出漁する。夕刻漁場に着くと25反の網を用意し、投網を行う。網は潮流を横断し、一直線になるように張り、片側にはボンデンを取付け、もう片方を船に結び付ける。この状態で網を流し、翌朝まで３回位見回りを行う。この時魚が掛かっていれば、網を揚げ漁獲物をとりはずす。

この魚は、近年漁獲量が少なくなったため操業されていない。



福来流網漁具見取図

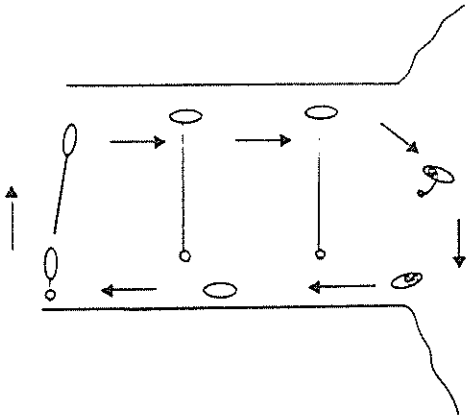
②サ ケ 流 網（亘理町）

この漁は、北上川両下流を初め、阿武隈川、鳴瀬川等サケ、マス類の遡上に適する河川で行われた。

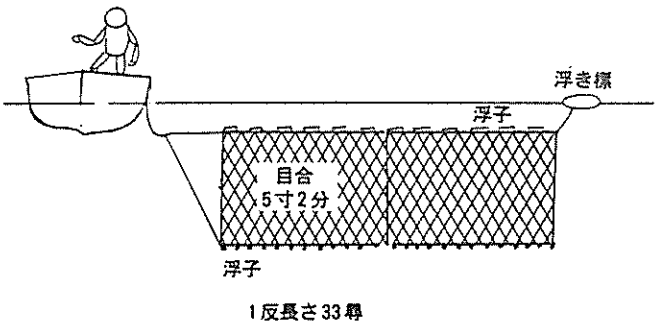
網は構造が簡単で、小舟を使用し、１人で大量に漁獲出来ることから明治、大正にかけて盛んに行われた。

網地は岩手麻を用い、目合い５寸２分、17掛け、長さ59尋を１反する。重量は400匁である。網の縁は４号綿糸を使用し、沈子方を半目丈縁編みする。縮結は浮子方で５割７分、沈子方で５割４分とする。目通糸は綿糸５号を使用する。浮子は桐製で、長さ７寸、中央径５分、両端径３分の蒲鉾型のものを用い、浮子綱に１尺９寸の間隔で１個づつ取付ける。浮子綱は、岩手麻、径５厘、長さ26尋のものを使用する。沈子は鉛製で、重量２匁のものを１反に付き、100個使用する。浮標は桐製で、径７寸、長さ８寸のもの１個を取り付ける。浮標綱は岩手麻を用い、径１分、長さ２尋のものを使用する。漁期９～11月。漁場は県下の河川下流域である。

肩３尺５寸位の船に１人乗り込み出漁する。網は２反を使用する。漁場に着くと、最初浮標を投じ、次に網を流しながら川の流れを横断する。投網が終了すると船に網端を取って、網と共に下る。川口に着くと網を引き揚げ、漁獲物を取り揚げる。その後船を上流に戻し同じ要領でこの作業を繰り返す。



サケ流網操業図



サケ流網漁具見取数

6．延　縄　漁

①よ　た　縄（石巻市）

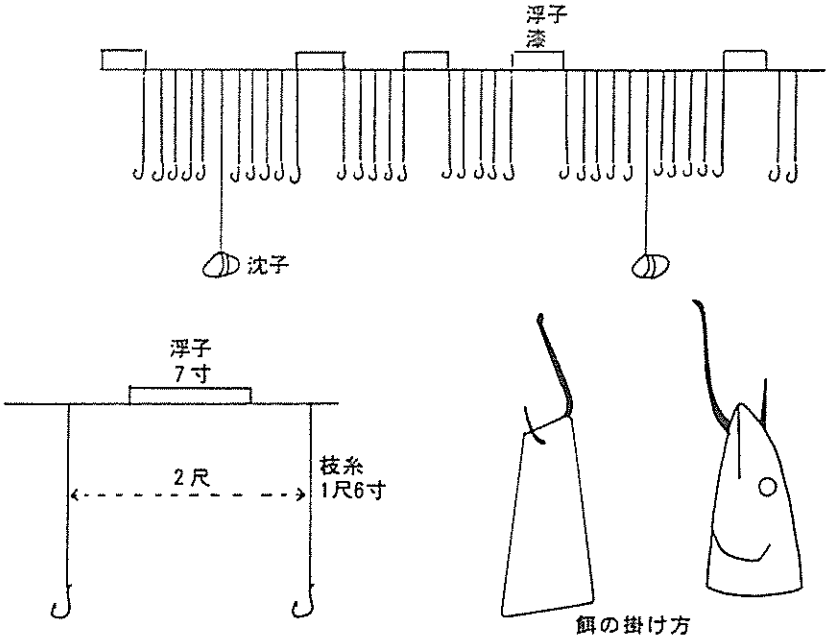
よた縄は、冬の間タラ等を漁獲する目的で行われる底延縄である。この漁は、各漁期の休漁期に副業的に行われた。

幹縄は４枚麻を用い、長さ60尋とする。枝糸は６号綿糸を用い、長さ１尺６寸切りのもの150本を使用する。浮子は漆木製で、長さ７寸、幅中央１寸、両端８分、厚さ８分のものを使用する。これを幹縄には６枚（枝縄24本に１枚）、底副絲には123枚を用い、13尋間隔で３枚を取付ける。浮縄は６枚麻を用い、長さ500尋のもの３本を使用する。底副絲は６枚絲を用い、長さ3,600尋として使用する。底副絲は幹縄間の繋ぎ用として使用する。沈子は、ま石として重量130匁位の石を使用する。これを１反に付３個取付ける。はかい石は、重量500匁位の石を使用する。これを１鉢の結合部分に１個づつ、ど石は、重量800匁位の石を用い、延縄の両端に１個づつ取付ける。釣り針は９分鐵線、錫鍍金を使用する。目標は、樽３個に長さ１丈５尺の竹竿と笹を取り付け、ボンデンとして使用する。

漁期は11～翌年５月。漁場は金華山南東沖合８浬より18浬の、水深120～160尋の海底が砂泥の場所である。

漁船に２～３人乗り組み漁場に向かう。漁場に着くと浮標、ど石を投じ、その後船を走らせながら投縄を行う。揚げ縄は翌日行う。

餌は、主としてイワシを使用するが、大の場合は４切りとし、小の場合は３切りとして用いる。



よた縄漁具見取図

②タ イ 延 縄（亘理町）

タイは、年により来遊量の変動が著しい。近年では沖合定置でかなりまとまって漁獲されることがあるものの、全体的に漁獲量が少なくなっている。

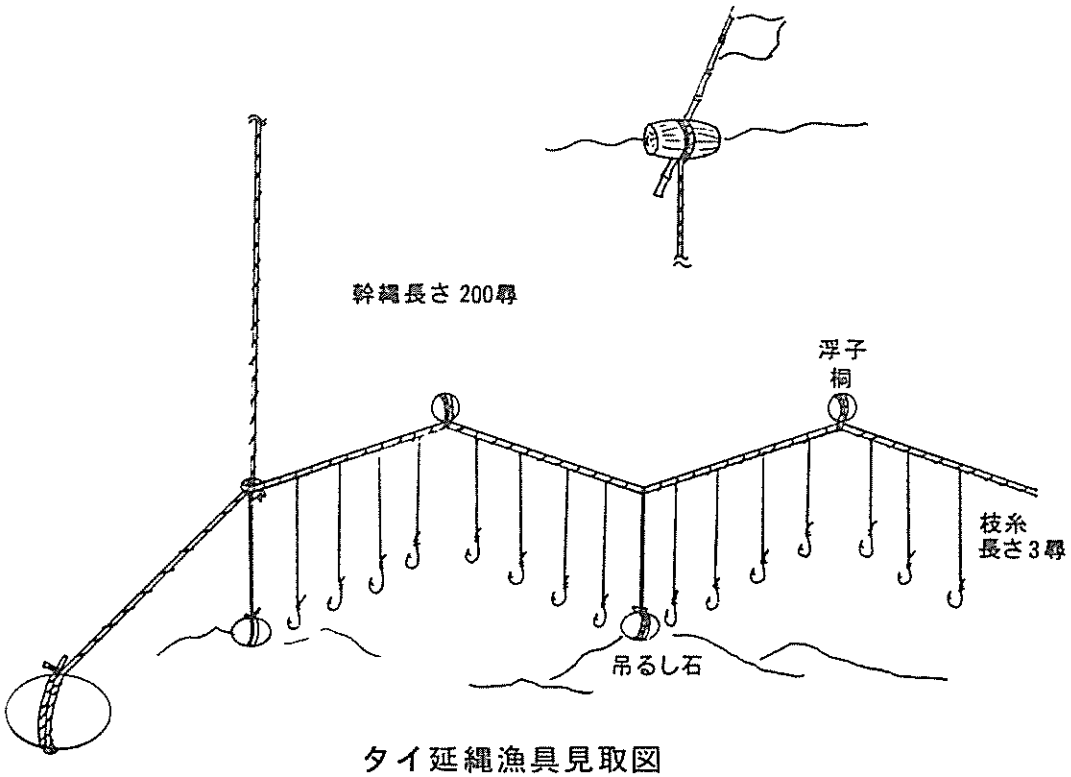
タイ延縄は、マダイを対象とした底延縄である。

幹縄は綿糸10号を用い、長さ200尋とする。枝糸は岩手麻、径５厘のものを用い、長さ３尋とする。これを幹縄に40本取付ける。釣り針は鋼鉄線の亜鉛鍍金したものを用い、太さ１匁、長さ１寸８分のものを曲げて作る。浮子は桐製の円錐形で、長さ５寸の円材を用い、一端の径５分、他端の径８分のものを使用する。これを１縄に10本取付ける。沈子は、方言「吊るし石」といい、重量300匁位の石である。吊るし石は、浮標を直立させるために使用する。浮標は桐丸太を用い、長さ５尺、径２寸のもの２本を使用する。浮標竹は、長さ９尺、元径５分、先径２分位のもの２本を使用する。浮標綱は、綿糸15号を用い、長さ３尋のものを使用する。方言「のべ縄」は、綿糸15号を用い、長さ200尋とし、漁船と延縄との連絡用として使用する。

漁期は５～10月。漁場は、沖合１浬内外の礁上とする。

肩４尺位の漁船に漁師３人が乗り組み、夕刻出漁する。漁場に着くと、直ちに投縄する。揚げ縄は、翌朝未明に行う。普通１人で３籠、１隻で９籠を使用する。餌はエビを使用する。

現在、この漁は行われていない。



タイ延縄漁具見取図

③ウ グ イ 縄（石巻市）

降海型のウグイは大河川の下流域や、川口付近の浅海域に生息する。また川口付近で漁獲される大型のものは、マルタと呼ばれる。

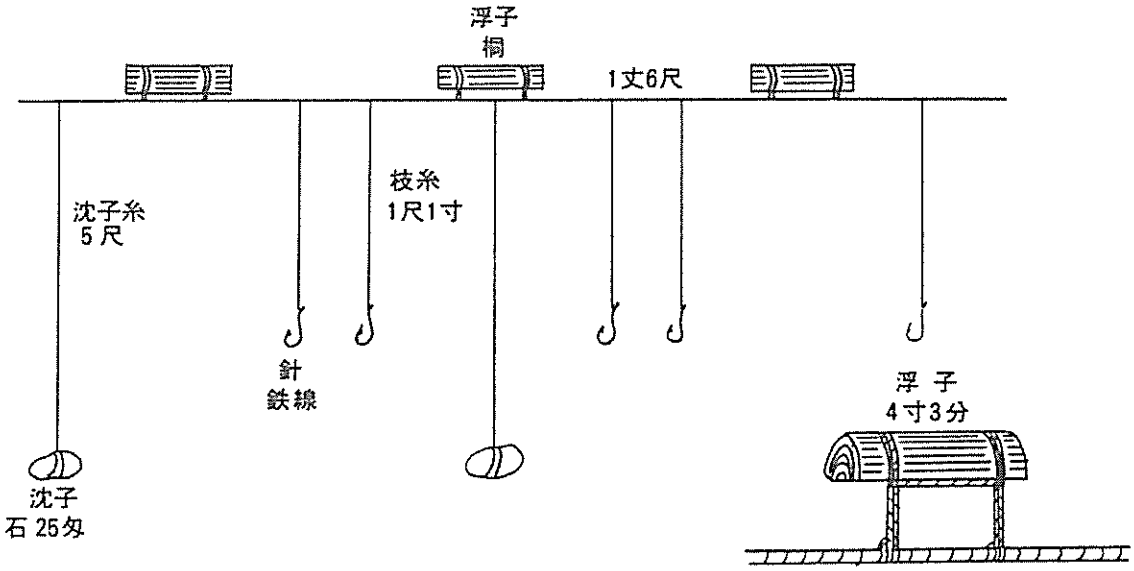
ウグイ漁は、冬期間行われる浮延縄である。

幹縄は５号綿糸を用い、長さ50尋とする。枝縄は２号綿糸を用い、長さ１尺１寸のものを57本使用する。釣り針は８厘鉄線を用い、長さ１寸５分のものを曲げて作る。浮子は桐製で、長さ４寸３分、幅８分、厚さ６分のものを用い、幹縄に１丈６尺間隔で結び付ける。１反に28枚を使用する。沈子糸は３号綿糸を用い、長さ５尺のもの１反に、14本を取付ける。沈子は石を用い、ま石は25匁位の石を14個、ど石は800匁位の石を２個使用する。

漁期は12月～翌年２月。漁場は万石浦内の澪すじがよい。

手漕ぎ船に１～２人乗り込み、上げ潮を見計らって漁場に向かう。漁場は狭いため話し合いによって、着いた順番に１鉢づつ投縄を行い、最後の人が終わるとまた初めの人が投縄を行う。これを繰り返す。

餌はゴカイを使用する。



ウグイ縄漁具見取図

7．そ　の　他

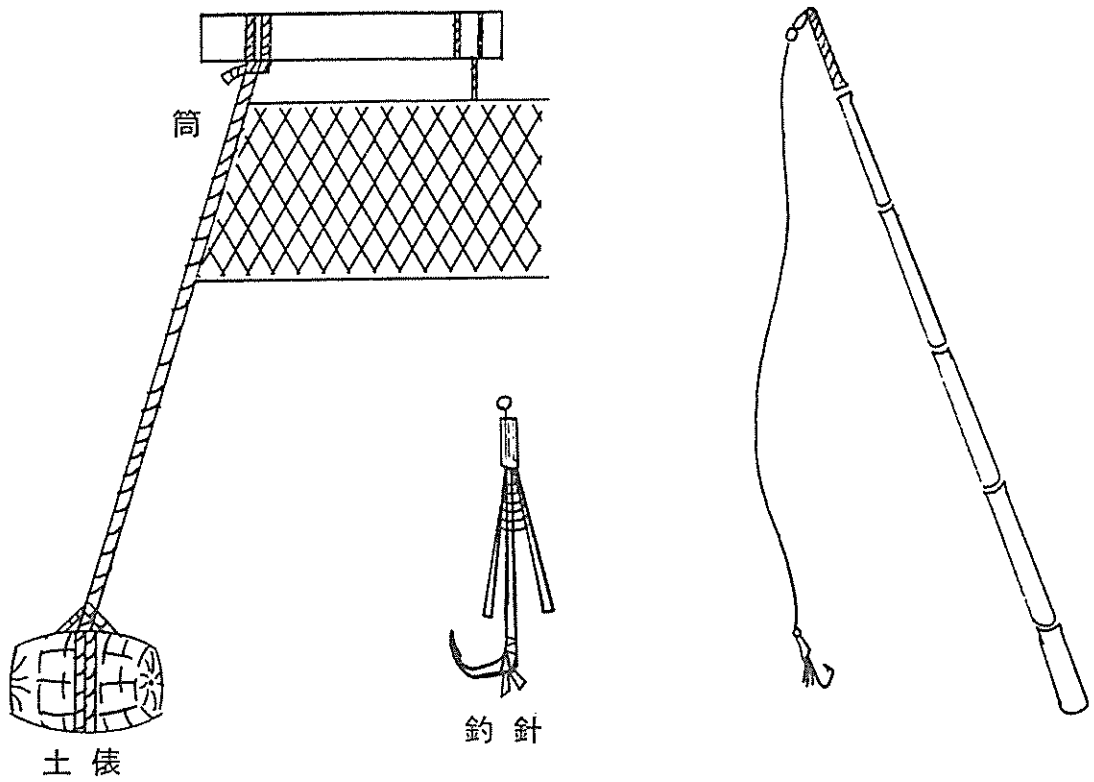
①ワカナゴ釣り（鳴瀬町）

ワカナゴ釣りは、索餌のため回遊してくるワカナゴ（ブリの小型のもの）を対象とした釣り漁業である。この漁は、筒という浮魚礁のような副漁具を用いて魚群を集め、擬餌針で１尾づつ吊り揚げる漁法である。また、大量の漁獲をしようとしても、潮流風向等の影響により漁獲がない場合もある。

釣糸は岩手麻、径２厘のものを用い、長さ３尋とする。これを漆引きとし、この一端にコウ東テグス、５尺を取付ける。釣り針は、擬餌針を用いる。針は、鐵線８分を用い、長さ２寸５分のものを角に曲げて作る。この釣り元、５分の間に鉛２匁のものを付け、釣り尖の方向にフグ皮を短冊形に切ったもの数枚を結び付ける。釣り竿は、長さ３尋半のものを用い、手元径１寸、先端径２分位の竹竿とする。この針を使用するためには、次の各部よりなる筒という補助漁具を用いる。浮標は杉の丸太を用い、長さ６尺、径５寸のもの60本を使用する。浮綱は、藁縄径５分のものを用い、長さ17～26尋のもの各５本づつ使用する。総数は60本を使用する。縄網は、藁縄径２分５厘のものを用い、目合い３尺、５掛けのものを使用する。長さは、浮子方で９尺、沈子方は１丈１尺とし、同じ目数で作る。土俵は、空俵に砂礫を詰めたものを用い、重量は20貫位とし全部で60個を使用する。

漁期は８～10月。漁場は、沿岸から900間の沖合で水深25尋以内の場所である。

漁期が近付くと、筒を地先に設置する。筒の設置は、小島より15間位の所から南東に向かい、長さ26～27尋のものを、順に取付ける。漁期になると、魚群はこの筒の付近に群集し、遊泳する。この時、擬餌針を竿に付け、魚群の中に投じて、徐々に引き回す。魚が釣り針に掛かれば、船中に引き上げ漁獲する。魚を針からはずす時は、急に糸を強く引いて、魚が自然に針からはずれる用にする。その後再び針を海中に投じて引き回し、これを繰り返す。この漁では、早朝より午前９時頃までの間に南風が徐々に吹いて、細波が生じ、気温が高くなる時がもっとも多く漁獲できる。



ワカナゴ釣り漁具見取図

②ボラ投網（石巻市）

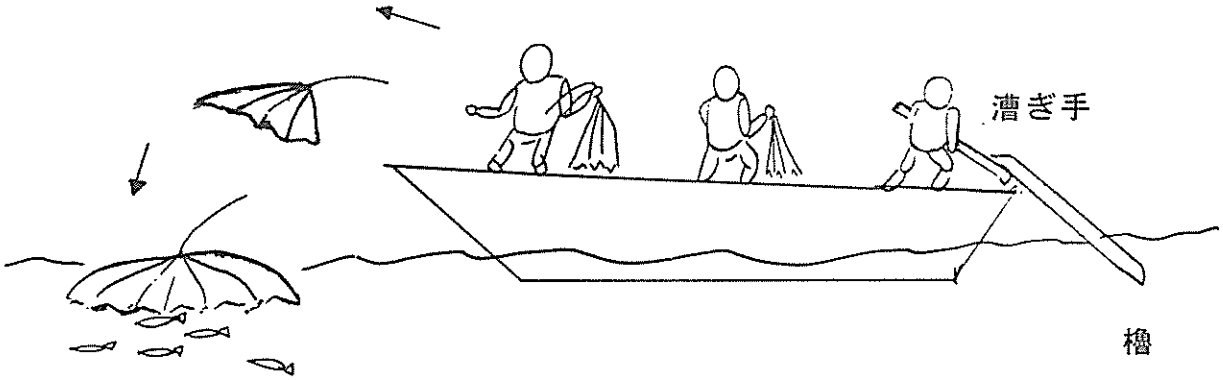
投網は川や沼等の内水面で多く使用される漁法である。また沿岸の浅い場所や河口付近でもボラ等を対象に行われる。漁法は、魚の上にすばやく網をかぶせ漁獲するものであり、技術を要する漁である。

身網は麻極細糸を用い、目合い本目１寸とする。編み初めは80掛けよりはじまり、５寸毎に40掛けづつを増していき、最後に840目に持って行く。この間は10尺とする。その後は、840掛けをつづけ、長さ８尺に編んでいき、全長は１丈８尺とする。沈子は鉛製で抽手型とし、１個の重量は11匁位とする。これを160個使用する。沈子綱は５号綿糸、太麻糸を用い、長さ１丈６尺～１丈７尺のものを使用する。これを沈子の両端および、網袖の目を通して、細糸で絡み付ける。沈子綱は、網目に対して、沈子内に２目、沈子間に２目づつ挿入するようにする。「やなわ」の作製は、以下のとおり行う。まず身網上部80掛けのところに、２目毎に１本の細糸、長さ２尺のものを通して結び付ける。これに麻、長さ９尋のものを結び付ける。次に沈子綱は、沈子２個おきにとりつける。場所は網袖より１尺２寸位上部の網節で、ここに８分位の間隔をとり結び付ける。魚捕袋は全長３尺５寸、両端80掛け、中央120掛けの袋である。これを５号綿糸、太麻糸により１寸目、本目編みとし、その一端を身網上部の80掛けのところに縫い合わせる。一端は取り集めて円型のかどに収め、や縄を

通して上下させる。網は柿シブで染めて使用する。柿シブは他の染料に比べ糸を堅くするような感じはあるが、水切りがよく投網のような投下が速いものには適している。

漁期は周年。漁場は万石浦および長浜から北上川河口までの、水深7尋以内の海底が砂地の場所である。

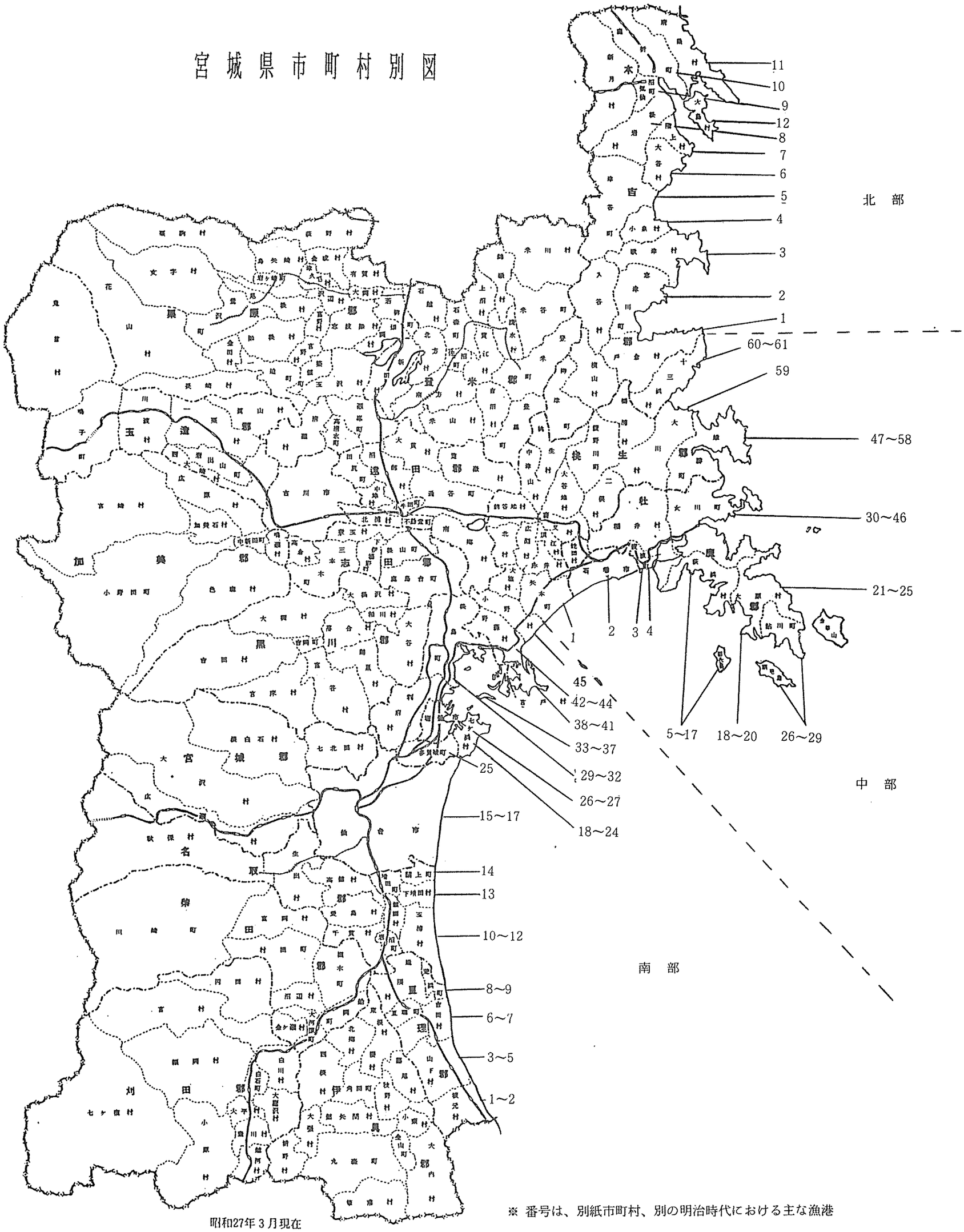
肩5尺位の船に漁師2～3人乗り組み出漁する。漁場に着くと、船を走らせ魚群を調査する。1人は櫓を操り、他は網を使用する。魚群を見つけると船を近づけ、投網をして、やなわをしぼる。上下に振動するときは動きにまかせ、身網上部の口を開閉する。その後、魚を魚捕袋の中に入れてから船に引き上げ一方の口を開き魚を取り出す。



ボラ投網操業図

宮城県における明治時代に行なわれていた主な地域別漁法

宮城県市町村別図



昭和27年3月現在

※ 番号は、別紙市町村、別の明治時代における主な漁港

宮城県における明治時代に行われていた主な地域別漁法

南部地区

1．坂本村磯浜

カレイ刺網、ヒラメ刺網、タイ刺網、イシモチ刺網、サンマ旋刺網、マグロ流網、福来流網、イワシ地曳網、手操網、マグロ旋網、根魚延縄、タイ延縄、エイ空釣り、スズキてんてん釣り、根魚天秤釣、タコ壷、ホッキ萬鍬、ワカメ採取、コンブ採取

2．坂本村中浜

マグロ旋網、イワシ旋刺網、ブリ流網、イワシ地曳網、手操網、ホッキ萬鍬

3．山下村新浜

手操網、イワシ地曳網、餅網、ホッキ萬鍬

4．山下村笠野浜

カレイ刺網、手操網、イワシ地曳網、マグロ旋網、エイ空釣り、タコ壷、ホッキ萬鍬

5．山下村花釜村

手操網、イワシ地曳網

6．吉田村吉田浜

ハゼ刺網、イシモチ刺網、マグロ旋網、手操網、餅網、エイ空釣り

7．吉田村大畑浜および長瀞浜

ハゼ刺網、ハゼ釣り、ウナギ筒、ウナギ竹筒、ウナギ掻き、ハマグリ採取、アサリ採取

8．逢隈村高尾崎

ハゼ刺網、投網、待網、ハゼ釣り、ウナギ筒、ウナギ竹筒、ウナギ掻き、ハマグリ採取、アサリ採取

9．荒浜村荒浜

カレイ刺網、ヒラメ刺網、イシモチ刺網、コチ刺網、サメ刺網、マス流網、サケ流網、投網、待網、イワシ地曳網、手操網、サケ地曳網、エイ空釣り、ウナギ掻き、アサリ採取、カキ採取

10．玉浦村蒲崎

サケ流網、投網、サケ地曳網、イワシ地曳網、マグロ旋網

11．玉浦村長谷釜浜および二ノ倉浜

カレイ刺網、サメ刺網、コチ刺網、イワシ地曳網、エイ空釣り、手操網、ホッキ萬鍬

12．玉浦村長相ノ釜浜

イワシ地曳網、手操網、ホッキ萬鍬

13. 下増田村北釜浜

イワシ地曳網、手操網、ホッキ萬鍬

14. 多賀城村門上浜

カレイ刺網、ヒラメ刺網、コチ刺網、サメ刺網、イワシ旋刺網、マス流網、サケ流網、投網、イワシ地曳網、サケ地曳網、マス地曳網、手操網、マグロ旋網、タラ延縄、ホッキ萬鍬

15. 六郷村藤塚井土浜

カレイ刺網、ヒラメ刺網、サメ刺網、イワシ地曳網、サケ地曳網、手操網、コチ刺網、ブリ旋刺網、イワシ旋刺網、イワシ小地曳網、手操網、マグロ旋網、ホッキ萬鍬

16. 七郷村荒浜

カレイ刺網、ヒラメ刺網　サメ刺網、コチ刺網、イワシ地曳網、イワシ旋刺網、改良手操網、マグロ旋網

17. 高砂村蒲生浜および新浜

ヒラメ刺網、イワシ地曳網、手操網、マグロ旋網、イワシ沖取網、タラ延縄、ホッキ萬鍬

18. 七ケ浜村港浜

カレイ刺網、ヒラメ刺網、サメ刺網、手操網、マグロ旋網、マグロ流網、タイ延縄、小縄、ハモ縄、カツオ釣り

19. 七ケ浜村松ケ浜

カレイ刺網、ヒラメ刺網、サメ刺網、手操網、マグロ流網、タイ延縄、小縄、カツオ釣り

20. 七ケ浜村菖蒲田浜

カレイ刺網、ヒラメ刺網、サメ刺網、手操網、マグロ流網、タイ延縄、小縄、カツオ釣り、タラ延縄、根魚釣り、スズキ釣り、ハモ釣り、コチ釣り

21. 七ケ浜村花淵

カレイ刺網、ヒラメ刺網、サメ刺網、手操網、マグロ流網、福来流網、アワビ採取、コンブ採取、ワカメ採取、カジメ採取、イワノリ採取、テングサ採取、マツモ採取、フノリ採取、ヒジキ採取

22. 七ケ浜村吉田浜

カレイ刺網、ヒラメ刺網、サメ刺網、手操網、マグロ流網、福来流網、カツオ釣り

23. 七ケ浜村代ケ崎

手操網、マグロ旋網、揚操網、スズキ叩網、根魚延縄、ハゼ延縄、ハゼ釣り、ハモ釣り、根魚釣り、簀建、アサリ採取、カキ採取、コンブ採取、ワカメ採取、カジメ採取

24. 七ケ浜村東宮

ボラ刺網、手操網、揚操網、ハモ延縄、ハゼ延縄、ハゼ釣り、ハモ釣り、簀建、アサリ採取、カキ採取

25. 多賀城村大代および笠神

シラウオ又手網、ハモ延縄、ハゼ延縄、ハゼ釣り、ハモ釣り、根魚延縄、ウナギ釣り、簀建、ウナギ竹筒、ウナギ掻き、ウナギ楢葉漬け、ウナギ藻漬け

26. 塩釜町塩釜

ボラ刺網、投網、シラウオ又手網、ハモ延縄、ハゼ延縄、根魚延縄、カレイ釣り、ハモ釣り、イシモチ釣り、スズキ釣り、ウグイ釣り、簀建、アサリ採取、カキ採取

27. 塩釜町吉津

シラウオ又手網、スズキ延縄、ハゼ延縄、ハモ釣り、ハゼ釣り、簀張、ウナギ掻き、アサリ採取、カキ採取

28. 利府村浜田および四家浦

ハゼ延縄、ハモ釣り、ハゼ釣り、簀建、ウナギ掻き、アサリ採取、カキ採取

29. 松島村松島

シラウオ又手網、投網、ハゼ延縄、根魚延縄、スズキ延縄、ハモ延縄、スズキ釣り、ウグイ釣り、ハモ釣り、ハゼ釣り、ウナギ釣り、簀建、簀張、ウナギ楢葉漬け、ウナギ掻き、カキ採取、エビいせ漬け、アサリ採取

30. 松島村高城

投網、エビ網、シラウオ又手網、ウナギ網、ハゼ延縄、スズキ延縄、ハモ延縄、根魚釣り、ハゼ釣り、ウグイ釣り、ハモ釣り、ウナギ楢葉漬け、ウナギ藻漬け、ウナギ筒、ウナギ竹筒、ウナギ掻き、簀建、エビ柴漬け、アサリ採取、カキ採取、ハマグリ採取

31. 松島村磯崎

投網、シラウオ又手網、餅網、待網、ハゼ延縄、根魚延縄、スズキ延縄、スズキ釣り、ウグイ釣り、ハモ釣り、ハゼ釣り、ウナギ釣り、簀建、ウナギ楢葉漬け、ウナギ竹筒、ウナギ掻き、エビ笹漬け、カキ採取

32. 松島村手樽

ハゼ延縄、ハゼ釣り、簀建、簀張、ウナギ竹筒、ウナギ掻き、アサリ採取、カキ採取

33. 浦戸村桂島

カレイ刺網、ボラ刺網、ムツ網、手操網、マグロ延網、揚操網、スズキ延網、手操網

34. 浦戸村石浜

根刺網、ボラ刺網、マグロ旋網、フカ延縄、スズキ延縄

35. 浦戸村野ノ島

ウグイ刺網、カレイ延縄、ハゼ延縄、スズキ延縄、小縄、活縄、スズキ釣り、ウグイ釣り、根魚釣り、ウナギ掻き、ウナギ筒、ウナギ楢葉漬け、ウナギ藻漬け、アサリ採取、カキ採取

36. 浦戸村寒風沢

マグロ旋網、活縄、ハゼ縄、小縄、根魚釣り、スズキ竿釣り、根魚縄、アサリ採取、カキ採取、コンブ採取、ワカメ採取、カジメ採取

37. 浦戸村朴嶋

ウグイ刺網、ボラ刺網、スズキ延縄、ハゼ縄、ハモ縄、簀建、アサリ採取、カキ採取

38. 宮戸村里浜

ウグイ刺網、ムツ船曳網、手操網、打瀬網、揚操網、マグロ旋網、スズキ延縄、ハゼ縄、ハゼ釣り、根魚釣り、簀建、ウナギ掻き、柴漬け、竹筒、アワビ採取、アサリ採取、ハマグリ採取、テングサ採取、カジメ採取、ヒジキ採取、カキ採取

39. 宮戸村月浜

カレイ刺網、根刺網、手操網、小縄、活縄、アワビ採取、コンブ採取、ワカメ採取、カジキ採取、イワノリ採取、テングサ採取、マツモ採取、フノリ採取、ヒジキ採取

40. 宮戸村大浜

カレイ刺網、手操網、マグロ旋網、スズキ延縄、小縄、スズキ釣り、根魚釣り、ワカナゴ釣り、アワビ採取、コンブ採取、ワカメ採取、カジメ採取、イワノリ採取、テングサ採取、マツモ採取、フノリ採取、ヒジキ採取

41. 宮戸村室浜

根刺網、手操網、小縄、スズキ延縄、スズキ釣り、ワカナゴ釣り、油目釣り、簀建、カキ採取、アワビ採取、コンブ採取、ワカメ採取、カジメ採取、イワノリ採取、テングサ採取、マツモ採取、フノリ採取、ヒジキ採取

42. 野蒜村大塚浜

沙魚延縄、沙魚釣り、簀建、ウナギ竹筒、ウナギもっぱ漬け、鰻掻き、カキ採取

43. 野蒜村東名

イワシ地曳網、手操網、揚操網、スズキ延縄、簀建、カキ採取

44. 野蒜村野蒜

イワシ大地曳網、イワシ小地曳網、手操網

45. 小野村浜市

サケ流網、投網、イワシ地曳網、手操網、マグロ旋網、揚操網、イワシ沖取網、スズキ延縄、エイ空釣り

中部地区

1．鷹夾村大曲

地曳網、手操網、打瀬網、スズキ延縄、エイ空釣り

2．石巻町門脇石巻及び港

サケ流網、マス流網、サケ地曳網、地曳網、手操網、打瀬網

3．渡波町渡波

サメ刺網、スズキ刺網、コチ刺網、ウグイ刺網、ボラ刺網、ボラ投網、白魚又手網、サケ地曳網、イワシ地曳網、打瀬網、手操網、イワシ沖取網、マグロ旋網、スズキ旋網、ボラわりこ網、桃生式器械網、スズキ縄、タイ縄、小縄、ハモ縄、ウグイ縄、タラ縄、カレイ縄、赤魚縄、メヌケ縄、ヨダ縄、空釣り縄、赤魚立て縄、スズキ釣り、スズキ底釣り、根魚釣り、コチ釣り、メバチ釣り、ウグイ釣り、タコ釣り、ホッキ萬鍬、カキ採取、アワビ採取、ハマグリ採取、ホタテ採取、オオノガイ採取、コンブ採取、ワカメ採取、カジメ採取、イワノリ採取、テングサ採取、マツモ採取、フノリ採取、ヒジキ採取

4．稲井村流留及び沢田

ウナギ掻き、ウナギ竹筒、ウナギ突き

5．荻ノ浜小竹浜

サメ刺網、メバチ刺網、マグロ流網、マグロ大網、桃生式器械網、筒状網、メヌケ延縄、ヨダ縄、タイ延縄、小縄、タラ延縄、イシナギ延縄、スズキ延縄、カツオ釣り、カジカ釣り、タコ壷、ハモ筒、アワビ採取、コンブ採取、ワカメ採取、カジメ採取、イワノリ採取、テングサ採取、マツモ採取、フノリ採取、ヒジキ採取

6．荻ノ浜折ノ浜及び蛤浜

手操網、ナマコ曳網、マグロ旋網、イワシ巾着網、桃生式器械網、メヌケ延縄、ヨダ縄、小縄、タラ延縄、スズキ延縄、カツオ釣り、タコ壷、ハモ筒、アワビ採取、ワカメ採取、イワノリ採取、フノリ採取、ヒジキ採取

7．荻ノ浜桃ノ浦

サメ刺網、マグロ流網、ムツ地曳網、打瀬網、マグロ旋網、イワシ巾着網、桃生式器械網、ヨダ縄、ハモ延縄、カツオ釣り、タコ壷、ハモ筒、アワビ採取、テングサ採取、フノリ採取

8．荻ノ浜月ノ浦

カレイ刺網、サメ刺網、イワシ地曳網、手操網、マグロ刺網、マグロ大網、筒状網、桃生式器械網、水晶型器械網、メヌケ延縄、ヨダ縄、小縄、ハモ延縄、カツオ釣り、タコ壷、ハモ筒、フノリ採取

9．荻ノ浜侍浜

サケ地曳網、イワシ地曳網、手操網、ナマコ曳網、スズキ延縄、桃生式器械網、水晶型器械網、タコ壷、タコ釣り、テングサ採取

10．荻ノ浜村荻ノ浜

ムツ地曳網、手操網、ナマコ曳網、ハゼ延縄、カツオ釣り、スズキ釣り、根魚釣り、ハゼ釣り、タコ釣り、タコ壷

11．荻ノ浜小積浜

イワシ地曳網、浮操網、ナマコ曳網、手操網、マグロ大網、フノリ採取、テングサ採取

12．荻ノ浜竹ノ浜

カレイ刺網、打瀬網、マグロ大網、桃生式器械網、水晶型器械網、メヌケ延縄、タコ壷、ハモ筒、フノリ採取、テングサ採取

13．荻ノ浜村狐崎

手操網、マグロ大網、水晶型器械網、筒状網、ヨタ網、タラ延縄、ハモ延縄、カツオ釣り、タコ釣り、タコ壷、ハモ筒

14．荻ノ浜牧ノ浜

カレイ刺網、アワビ採取、コンブ採取、ワカメ採取、イワノリ採取、テングサ採取、フノリ採取、ヒジキ採取

15．荻ノ浜村巣立浜

イワシ地曳網、手操網、桃生式器械網、ヨタ縄、小縄、タラ延縄、ハモ延縄、カツオ釣り、タコ釣り、ハモ釣り

16．荻ノ浜村福貴浦

イワシ地曳網、マグロ大網、水晶型器械網、筒状網、ヨタ縄、ハモ延縄、カツオ釣り、タコ壷、ハモ筒、フノリ採取、ツノマタ採取、ヒジキ採取、ワカメ採取

17．荻ノ浜村田代島

サメ刺網、タラ刺網、メバチ刺網、マグロ大網、張網、サケ地曳網、ナマコ曳網、タナゴ打網、シラス旋網、スズキ旋網、マグロ旋網、器械網、筒状網、小縄、タラ延縄、カツオ釣り、ハモ筒、潜水器、潜水業(スモグリ)、ノリ採取、フノリ採取、ツノマタ採取、ヒジキ採取、ワカメ採取、タコ釣り、タコ壷

18．大原村小網倉

カレイ刺網、ムツ地曳網、手操網、ナマコ曳網、筒状網、水晶型器械網、カレイ延縄、小縄、タラ延縄、タコ釣り、タコ壷、ハモ筒

19．大原村大原

メロウド張網、サケ地曳網、マグロ大網、筒状網、カツオ釣り、カジカ釣り、タコ壷

20. 大原村給分及び小淵浜

サメ刺網、マグロ流網、張網、ムツ地曳網、ナマコ曳網、筒状網、水晶型器械網、ヨタ縄、小縄、タラ延縄、カツオ釣り、カジカ釣り、タコ釣り、タコ壷、ハモ筒、アワビ採取、フノリ採取、ノリ採取

21. 大原村新山

メバチ刺網、福来流網、張網、シラス旋網、タナゴ打網、イワシ壷網、小縄、タコ壷、アワビ採取、ワカメ採取、フノリ採取、ツノマタ採取、ノリ採取、ホソメ採取

22. 大原村泊浜

メバチ刺網、カレイ刺網、タラ刺網、福来流網、張網、シラス旋網、小縄、カツオ釣り、アワビ採取、ワカメ採取、フノリ採取、ツノマタ採取、ノリ採取

23. 大原村谷川及び大谷川

タラ刺網、張網、ムツ地曳網、地曳網、シラス旋網、水晶型器械網、イワシ建網、小縄、スズキ延縄、赤魚延縄、カツオ釣り、タコ壷、アワビ採取、ワカメ採取、ノリ採取

24. 大原村鮫ノ浦

タラ刺網、福来流網、張網、水晶型器械網、小縄、スズキ延縄、タコ壷、アワビ採取、ワカメ採取、ノリ採取、マツモ採取

25. 大原村前網及び寄磯

サメ刺網、タラ刺網、赤魚刺網、カレイ刺網、張網、シラス旋網、マグロ大網、筒状網、水晶型器械網、小縄、カツオ釣り、イカ釣り、タコ釣り、イワノリ採取、ワカメ採取、テングサ採取、フノリ採取、ツノマタ採取、ナマコ採取

26. 鮎川村十八浜

サメ刺網、張網、ムツ地曳網、手操網、水晶型器械網、でん扇型器械網、筒状網、小縄、ハモ筒、タコ壷、アワビ採取、ワカメ採取、フノリ採取

27. 鮎川村鮎川浜

メバチ刺網、張網、ムツ地曳網、シラス旋網、タナゴ打網、マグロ大網、マグロ旋網、水晶型器械網、小縄、フカ網、メヌケ延縄、カツオ釣り、タコ壷、アワビ採取、潜水器、ワカメ採取、ツノマタ採取、イワノリ採取

28. 鮎川村網地浜

サメ刺網、メバチ刺網、マグロ流網、張網、シラス旋網、タナゴ打網、マグロ大網、マグロ旋網、谷川式器械網、小縄、タイ延縄、カツオ釣り、タコ釣り、アワビ採取、潜水器、ワカメ採取、ツノマタ採取、イワノリ採取、ヒジキ採取、テングサ採取

29. 鮎川村長渡浜

サメ刺網、赤魚刺網、マグロ流網、張網、タナゴ打網、マグロ大網、小縄、イシナギ縄、

カツオ釣り、タコ釣り、イカ釣り、ハモ筒、潜水器、潜水業(スモグリ)、ノリ採取、フノリ採取、ツノマタ採取、ヒジキ採取、ワカメ採取、テングサ採取、カジメ採取

30. 女川村小宿及び塚浜

サメ刺網、タイ刺網、マス刺網、福来流網、張網、マグロ旋網、イワシ旋網、シラス旋網、谷川式器械網、ヨタ網、カツオ釣り、タコ釣り、イカ釣り、テングサ採取、イワノリ採取、フノリ採取、ワカメ採取

31. 女川村飯子浜

タラ刺網、マス刺網、帳網、シラス旋網、イワシ旋網、筒状網、水晶型器械網、ヨタ網、タイ網、タコ釣り、タコ壷、イカ釣り、イワノリ採取、フノリ採取

32. 女川村野の浜

張網、ムツ地曳網、カレイ縄、ウニ採取

33. 女川村大石原

張網、ムツ地曳網、カレイ縄、ウニ採取

34. 女川村横浦

マス刺網、メバチ刺網、張網、ヨタ縄、ウニ採取、イワノリ採取、ワカメ採取

35. 女川村高白浜

張網、ヨタ網、小縄、タイ延縄、タコ釣り、タコ壷、アワビ採取、ウニ採取、ノリ採取、ワカメ採取、テングサ採取、水晶型器械網、桃生式器械網

36. 女川村小乗浜及び鷲の神

手操網、イワシ旋網、筒状網、タイ延縄、ヨタ縄、カツオ釣り

37. 女川村女川

メヌケ延縄、カツオ釣り、簀建、ノリ養殖業

38. 女川村石浜及び宮ケ崎

ムツ地曳網、筒状網、谷川式器械網、ノリ採取

39. 女川村桐ケ崎

張網、シラス旋網、桃生式器械網、メヌケ延縄、ヨタ縄、タイ延縄、タコ釣り、テングサ採取

40. 女川村竹ノ浦

イワシ地曳網、張網、筒状網、水晶型器械網、桃生式器械網、メヌケ延縄、ヨタ縄、タイ延縄、赤魚延縄、小縄、イシナギ縄、タコ釣り、アワビ採取、ホヤ採取、ノリ採取、ワカメ採取、ウニ採取、ナマコ採取

41. 女川村尾浦

サンマ流網、イワシ地曳網、張網、手操網、マグロ大網、筒状網、水晶型器械網、メヌ

ケ延縄、ヨタ縄、タイ延縄、小縄、カツオ釣り、タコ釣り、アワビ採取、ホヤ採取、ノリ採取、ワカメ採取

42. 女川村御前及び指浜

筒状網、カツオ釣り

43. 女川村出島及び寺間

タラ刺網、カレイ刺網、張網、筒状網、水晶型器械網、桃生式器械網、メヌケ延縄、ヨタ縄、タイ縄、カツオ釣り、タコ釣り、アワビ採取、ワカメ採取

44. 女川村江ノ島

サメ刺網、張網、マグロ大網、赤魚立網、ヨタ縄、タイ延縄、小縄、カツオ釣り、タコ釣り、アワビ採取、ホヤ採取、ノリ採取、ワカメ採取

45. 女川村浦宿

ボラ地曳網、ウナギ筒網、ウナギ掻き

46. 女川村針の浜

ウナギ掻き、ウナギ竹筒、ボラ突き

47. 十五浜村分浜

カレイ刺網、タラ刺網、張網、ナマコ曳網、筒状網、桃生式器械網、メヌケ延縄、小縄、カレイ延縄、タラ延縄、カツオ釣り、イカ釣り、タコ釣り、アワビ採取、イワノリ採取、ワカメ採取

48. 十五浜村水浜

張網、イワシ地曳網、ムツ地曳網、手操網、ナマコ曳網、筒状網、桃生式器械網、メヌケ延縄、小縄、カレイ延縄、タラ延縄、赤魚延縄、カツオ釣り、イカ釣り、タコ釣り、アワビ採取、ノリ採取、ワカメ採取、ツノマタ採取、ヒジキ採取

49. 十五浜村雄勝浜明神浜及び小島

タラ刺網、カレイ刺網、張網、イワシ船曳網、浮操網、ナマコ曳網、筒状網、水晶型器械網、桃生式器械網、カレイ延縄、カツオ釣り、タコ釣り、ハモ筒、ノリ養殖

50. 十五浜村大浜

マス刺網、張網、ムツ地曳網、イワシ巾着網、イワシ揚げ釣り網、筒状網、桃生式器械網、メヌケ延縄、タイ延縄、ヨタ延縄、カツオ釣り、イカ釣り、タコ釣り

51. 十五浜村立浜

ムツ地曳網、イワシ巾着網、ナマコ曳網、筒状網、桃生式器械網、メヌケ延縄、赤魚延縄、カツオ釣り、イカ釣り、タコ釣り、イワノリ採取、ワカメ採取

52. 十五浜村桑浜

マス刺網、タラ刺網、張網、筒状網、桃生式器械網、メヌケ延縄、小縄、カツオ釣り、

イカ釣り、イワノリ釣り、ワカメ釣り、ツノマタ採取、ヒジキ採取

53. 十五浜村羽坂浜

マス刺網、タラ刺網、張網、メヌケ延縄、小縄、赤魚延縄、カツオ釣り、イカ釣り、タコ釣り、アワビ採取、ホヤ採取、ウニ採取、ワカメ採取、ホソメ採取、テングサ採取、ツノマタ採取、ヒジキ採取、イワノリ採取、フノリ採取、マツモ採取

54. 十五浜村熊沢

張網、器械網、メヌケ延縄、小縄、カツオ釣り、イカ釣り、アワビ採取、ワカメ採取、ホソメ採取、テングサ採取、ツノマタ採取、ヒジキ採取、イワノリ採取、フノリ採取、マツモ採取

55. 十五浜村大須浜

マス刺網、タラ刺網、張網、桃生式器械網、タイ網、ヨタ網、イシナギ網、赤魚網、小縄、カツオ釣り、イカ釣り、タコ釣り、アワビ採取、ワカメ採取、ホソメ採取、テングサ採取、ツノマタ採取、ヒジキ採取、イワノリ採取、フノリ採取、マツモ採取

56. 十五浜村船越

カレイ刺網、マス刺網、タラ刺網、張網、地曳網、雑魚地曳網、シラス船地曳網、巾着網、揚操網、筒状網、桃生式器械網、メヌケ延縄、小縄、ヨタ縄、小船ヨタ縄、タイ延縄、カツオ釣り、イカ釣り、タコ釣り、アワビ採取、ワカメ採取、ホソメ採取、テングサ採取、ツノマタ採取、ヒジキ採取、イワノリ採取、フノリ採取、マツモ採取

57. 十五浜村名振

カレイ刺網、マス刺網、タラ刺網、張網、地曳網、ムツ地曳網、巾着網、揚操網、筒状網、桃生式器械網、メヌケ延縄、小縄、ヨタ縄、カツオ釣り、イカ釣り、タコ釣り、アワビ釣り、ワカメ採取、ホソメ採取、テングサ採取、ツノマタ採取、ヒジキ採取、イワノリ採取、フノリ採取、マツモ採取

58. 十五浜村尾の崎浜

スズキ刺網、投網、イワシ地曳網、雑魚地曳網、巾着網、揚操網、桃生式器械網、カレイ延投げ、ハゼ延縄、ハゼ釣り、イカ釣り、ウナギ筒、カキ採取、ワカメ採取、ホソメ採取、テングサ採取、ツノマタ採取、ヒジキ採取、イワノリ採取、フノリ採取、マツモ採取

59. 大川村長面浦

カレイ刺網、マス刺網、ボラ刺網、投網、イワシ地曳網、雑魚地曳網、ムツ地曳網、イワシ揚げ操り網、水晶型器械網、桃生式器械網、カレイ延投げ、ハゼ延縄、ハゼ釣り、イカ釣り、ウナギ筒、ヒラガイ及びアサリ採取、カキ採取、ウナギ竹筒

60. 十三浜三ケ浜

ムツ流網、ムツ地曳網、マス曳網、ウナギモッパ漬け、ウナギ掻き、ウナギ筒

61. 十三浜村十ケ浜

サメ刺網、タラ刺網、マス刺網、マグロ流網、張網、地曳網、巾着網、揚操網、浮操網、桃生式器械網、小縄、タコ釣り、アワビ採取、ワカメ採取、ホソメ採取、ツノマタ採取、ヒジキ採取、イワノリ採取

北部地区

1. 戸　倉　村

サメ刺網、タラ刺網、マス刺網、マグロ刺網、サンマ流網、張網、地曳網、浮操網、タナゴ打網、筒状網、桃生式器械網、タラ器械網、小縄、ハモ延縄、カツオ釣り、イカ釣り、タコ釣り、簀建、アワビ採取、ウニ採取、カキ採取、カキ養殖、ナマコ採取、ホヤ採取、ワカメ採取、フノリ採取

2. 志津川町

タラ刺網、サメ刺網、カレイ刺網、ナメタガレイ刺網、マグロ流網、小流網、カジカ流網、張網、ムツ地曳網、浮操網、タナゴ打網、水晶型器械網、メヌキ延縄、ハモ延縄、小縄、カレイ延縄、カツオ釣り、イカ釣り、タコ釣り、簀建、ウニ採取、アワビ採取、カキ採取、カキ簀建業、ナマコ採取、ホヤ採取、ワカメ採取、フノリ採取

3. 歌　津　村

サメ刺網、タラ刺網、ナメタガレイ刺網、マス刺網、マグロ流網、張網、ムツ地曳網、シラス船曳網、タナゴ打ち網、マグロ大網、桃生式器械網、小縄、アオ縄、スズキ延縄、カツオ釣り、イカ釣り、タコ釣り、アワビ採取、ワカメ採取、ホソメ採取、ツノマタ採取、ヒジキ採取、イワノリ採取

4. 小　泉　村

サメ流網、根刺網、ナメタガレイ刺網、マグロ流網、張網、イワシ地曳網、浮き操り網、シラス船曳網、タナゴ打網、ブリ器械網、小縄、カツオ釣り、イカ釣り、タコ釣り、アワビ採取、ワカメ採取、ツノマタ採取、ヒジキ採取、フノリ採取

5. 嶽　尾　村

カレイ刺網、サメ刺網、アオマグロ刺網、張網、タナゴ船曳網、小縄、アワビ採取、ウニ採取、ワカメ採取、ツノマタ採取、ヒジキ採取、カジメ採取

6. 大　谷　村

タラ刺網、サメ刺網、ナメタガレイ刺網、マス刺網、マグロ流網、張網浮操網、ムツ地

曳網、シラス船曳網、タナゴ船曳網、ブリ延縄、小縄、マス延縄、カツオ釣り、イカ釣り、タコ釣り、アワビ採取、ワカメ採取、ツノマタ採取、ヒジキ採取、カジメ採取

7．階　上　村

タラ刺網、サメ刺網、ナメタガレイ刺網、マス刺網、マグロ流網、張網、浮操網、ムツ地曳網、シラス船曳網、筒状網、ブリ延縄、小縄、マス延縄、カツオ釣り、イカ釣り、タコ釣り、簀建、タコ壷、アワビ採取、ワカメ採取、ツノマタ採取、ヒジキ採取、カジメ採取、ノリ養殖

8．松　岩　村

マガレイ刺網、サメ刺網、ナメタガレイ刺網、筒状網、張網、赤魚延縄、タイ延縄、小縄、カツオ釣り、ノリ養殖

9．気仙沼町

カレイ刺網、小縄、スズキ縄、ハモ縄、簀建、ハモ筒、アカガイ採取、トリガイ採取、ノリ採取

10．鹿　折　村

サメ刺し網、張網、イワシ船曳網、シラス船曳網、ムツ地曳網、浮操網、タナゴ打網、ボラ巾着網、スズキ延縄、ハモ縄、小縄、アオ縄、タコ釣り、イカ釣り、ハモ筒、アカガイ及びトリガイ曳き、サラガイ及びサラガイ突き、ヨメガイ突き、アサリ採取、アワビ採取、カキ採取、ウニ採取、ノリ養殖

11．唐　桑　村

カレイ刺網、サメ刺網、マス刺網、タラ刺網、マグロ刺網、張網、イワシ巾着網、マグロ巾着網、タナゴ旋網、大網、赤魚延縄、メヌケ延縄、小縄、アオ縄、ナメタガレイ延縄、カツオ釣り、イカ釣り、アワビ採取、ワカメ採取、ツノマタ採取、フノリ採取、イワノリ採取、ノリ採取

12．大　島　村

マガレイ刺網、タラ刺網、サメ刺網、ナメタガレイ刺網、マス刺網、マグロ流網、張網、イワシ船曳網、シラス船曳網、大網、水晶型器械網、小縄、カツオ釣り、イカ釣り、アワビ採取、ワカメ採取、ホソメ採取、イワノリ採取、ツノマタ採取、ノリ養殖

以上地区別の漁法を記したが、現在との比較により漁法の変化がどうであるかを知る上での参考とした。

編　集　後　記

漁村高齢者活力促進事業の一環として、今回は北部地区の調査、収集を行い県内全域にわたった取りまとめも終了となりました。

調査の中では、地域の漁業形態の変化、漁獲対象種の移り変わりなど現在では考えられないような様々な話や、県内各地で行われる同一対象種、同一漁業種類についてもその地区の自然条件等から様々に変化していることが強く印象に残りました。

記載資料については、明治時代に行われていたものを中心とし、出来るだけ当時の状況を記載するようにしましたが、ある漁業者が、ある時点で使用していた漁具ということで、大方の目安となれば幸いです。又、現在行われていない漁法もあり、当時の記憶をたどったため、内容については幾分不明瞭の点もあるので、お許し願います。

今回は特に、前回まで未収集だった中南部分の取りまとめも出来、調査に協力していただいた関係者の方々に心から感謝致します。

調査編集担当者
技　師　　阿　部　啓　一

文　献

宮城県水産試験場事業報告　　大正５年
宮城県水産試験場沿岸漁業集約経営調査報告書　昭和33年～35年

平成２年３月30日　印　刷
平成２年３月30日　発　行
平成11年７月１日　増　刷

発行所　宮城県水産研究開発センター
〒986-2135　宮城県石巻市渡波字袖ノ浜97－６
ＴＥＬ　石巻　0225（24）０１３８